
夜行遊女

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜行遊女

【Zコード】

Z3764S

【作者名】

ワシワシ

【あらすじ】

中華風ファンタジー。

鼻水を垂らして逃げ回る人間臭いヒロインが「コンセプト。シンデレラ要素と成り上がり要素あり。残虐な妖鳥に襲撃された村の生き残りの少女思嵐（（すらん）。醜い痣とやせ細った身体、陰鬱な少女は人々の生と死の狭間で、次第に成長して行く。やがて物語は西遊記の世界へとつながるが……。

残酷表現多々ございますので、ご注意ください。ヒロインの不幸ぶりには定評があります。

(自サイトより実験的に移植中。お汚じ」勘弁ください)

なお、ストック切れ後は、更新は緩やかに……遅筆なので、お許しあれい。

最終的には恋愛ものを描いていますと云ふやうであります。

序幕

夜行遊女。あるいは姑獲鳥こがくちょう、上帝少女、鬼鳥ともいう。その性残忍ひじんにして残虐みどりごを極む。嬰兒みどりこを攫さあいてその血肉を好み、若い男女の肝えぐを抉り喰す。

一度見えれば、逃るる術なし。甘んじて死ぬるより他なし。

夜行遊女。

思風すいふうはぼんやりと呆けた顔で天を仰いだ。周囲には怒号いかと悲鳴が満ちていた。転んで泣いている子供を気にする者はなかつた。その母親が気づいて慌てて駆け寄り、我が子の手を引いて立ち去つた。

方々で火の手があがつた。木造と、白漆喰、藁葺きの屋根はあつという間に火に包まれた。炎はちらちらと大蛇の舌のように家屋を嘗めあげ、たちまち踊る赤と燃くすぶる黒い煙の色に染め変えた。

煙は縦横無尽に流れて人々の退路を塞ぎ、目を痛め、呼吸を妨げた。

思風はふらふらと立ち上つた。唐突に頭に浮んだものがあつた。

母さん。

里外れの傾いだ小さな屋に、母は寝たきりで過はいでいる筈はずだつ

た。幼い妹も。妹はまだ九ヶ月にもならない赤ん坊だった。

逃……げなきや。

一度思い定めると、思嵐は辺りを探り伺いながら、じりじりと後ずさった。くるり、と踵を返す。

身を翻した後方で断末魔の声と甲高く狂おしい哄笑がきこえ、思嵐はびくりと肩を揺らした。

早くしないと……！

焦りが先行した。

思嵐の家は里落でも地位が低かつたが、それが今日この日幸いした。里の中心部はいまや惨劇の舞台と化していることだろう。

友人の壮絶な最期が脳裏に焼き付いて離れない。

高蘭。
—じゅらん—

一人の少女

普段は編み下^くげ髪にしている高蘭の長い黒髪は、組み紐を解くと滝のように椅子の背から膝のあたりまで流れ落ちた。芳香油でとかずとも艶やかな碧なす黒髪は、まるで生きもののよつなうねりをみせていく。

「ほつ、」と感嘆の吐息が零れ落ちる。梳^{くし}る手が止まつた。

「どうしたの？」

凜と通る、涼やかな聲音。

高蘭の不思議そつな問いに下^げ婢^女は自分の立場を思い出し、「ほつ」とする。

「あ、申し訳ありません」

黽^{べつひ}甲^{こう}の櫛^{くし}をつよく握り締めたまま、咄嗟に謝罪した胃下婢^{思嵐}を、小家碧玉と賞讃される美貌の娘が怒った風に咎めた。

「もーしあつけあつませんじやないでしょーなんべんいつたらわかるのよーけこー」はやめおつてこつてるでしょー

「……お嬢さま」

無言で言葉使いに抗議した思嵐に、高蘭は舌を出す。その拍子に雪の如く白い肌理から甘い芳香が立ち上つた。そういうはしたない仕草も不思議と上品に愛らしく見えてしまう娘だった。赤い舌がち

ろつと覗く様は、娘の健全さとは対照的にビリか扇情的で色香を感じさせる趣すらある。

厭だわ。

思わず赤面してしまった思嵐はふいと顔を背けた。自分の醜い顔を見られたくないせいもあつた。

そう、思嵐はまれにみる醜女しうめだった。

不幸なことに、顔の半分を占める大きな痣あざがある。これは思蘭に一生消えない劣等感を与えていた。また身体は栄養不足の為この年いろの娘らしい丸みを帯びるけはいもなく、真麻まおの纖維で織り上げた粗末な粗布そふで棒切れのようながりがりに瘦せた身を包んでいるだけであった。日に焼け酷使した手には、老人と同様、白い粉さえ吹いていた。

ああ。

これが、若い娘の手か。

黒々とした絶望が溢れ出す。

比べることさえも恐れ多いけれど、高蘭と思嵐のなんと異なることよ。

高蘭は小作人をたくさん抱えた里の豪農の一人娘で、その父を胡耳、母を呂氏といった。何不自由ない暮らしに加え、生まれ持つた玲瓏たる容色と、明朗闊達な気質で誰からも愛された。

思嵐も高蘭も笄年けいねんをむかえている。笄年とは女子の十五歳をいい、初めて笄じょうがいをつける年である。婚約がいやくがととのえば、笄をさして成人式を挙げ、字あさなをつけた。字は、名と意味上関連のある文字を使う」とが普通である。

高蘭は求婚の意味で、邑里の主だつた若者から笄じょうがいや花鉢かはん（額飾り）を幾度となく贈られていた。

しかし高蘭は、いやその父である胡耳は求婚をことじとく断つていた。慈しみ育てた掌中の珠を一介の百姓などにくれてやるのは許せないのである。いずれ然るべき月下氷人なごみづゆを介して、貴人のもとに輿入れさせようとあれこれ画策しているのかもしれない。

おそらく、と思嵐は想像する。高蘭の婚礼は商家の娘には不遜であるほど盛大なものとなるだろう。

胡耳は溺愛する彼女の為に財を投じるのを惜しむまいて、練り絹の婚礼衣装を着て、真珠に水玉すいざめよ（水晶）、紅玉髓に青玉、翡翠、まるで一国の公主のようにその肢体を宝玉で飾り立てるのだ。

しずしずと輿は嫁ぎ先へと導かれるだろう。花嫁が頭からすっぽりと被つた赤い絹の蓋頭は、新郎によつて取り除かれ、初めて夫婦となる一人は顔を合わせる。新郎は現れた花嫁のかんばせに、一目で心を奪われるだろう。

高蘭を娶めとつた男は一身に嫉妬と羨望を浴びるだろうが、三国一の

果報者には違ひあるまい。

だけだ。

私は、高蘭と違ひて、一生誰かと添い遂げる」とはないだらう。

思風は顔を伏せて哀しみを押し殺した。高蘭と全く対照的な自分は、その人生をも全く対照的に歩んで、終わらせるだらう。唯一同じのは、生まれて死ぬことだけだ。

「……嵐」

耳元ではつまつと声がした。

「思風ー。」

呼び声に、思風は顔を上げた。

「……え……？」

すぐに少女特有のしのび笑いが重なる。

「じつしたの、思風つむらん？ 今日は本当にやつねえ。立つたまま寝てる？」

「あ……はい……つむ」

敬語を使うな、と言われたのを思い出して、思風はどうしながら曖昧な返事を寄越した。

高蘭はくすくすと笑つて思嵐の顔を下から覗き込んだ。思嵐の顔半分以上を覆う、長い前髪の帳も、真下から覗き込まれては何の障壁にもならなかつた。まともに視線が合つ。

「ほづら。まだ睛が寝てる」

言われて、瞬間何を指摘されたのか分からなかつた。

眼前に同性でも息を呑む人間離れした美貌の細面がある。こんなにも間近にはつきりと。

同時に気づいて恐慌をきたした。

顔を、見られた……！！

お互に真正面から、お互の天と地程もかけ離れた顔を。高蘭のけぶる睫毛^{まつげ}に囲まれた、杏仁形^{あんにんがた}の漆黒の睛が、自分をじつと見つめていた。花唇^{かしん}が淡い微笑をたたえている。

それが、思嵐の一割の嫉妬と九割の劣等感に歪められた睛には、嘲笑と映つた。

いやつ

頭に血が上り、顔面にはカツと朱が走つた。

慌てて両腕で顔を覆い、その場を飛び退いた。

襲つたのは激しい羞恥心。見られたのはこの醜い顔だ。よりによ

つてこの美しい娘に…！

惨めだった。己の顔を直視した高蘭に、憎しみさえ覚えた。

「見……見ないで下せー」

内実は嵐が荒れ狂っていたが、おどおどとした声で顔を隠しながら頼んだ。卑屈であると、思嵐はますます自分を嫌悪した。

高蘭が呆れたように背筋を伸ばし、大仰な仕草で柳腰に手をあてた。そして洞騒する。

「もう。思嵐はびくびく過ぎよ！ あなたそんな自分で言つほど
酷い顔じやないわよ！」

やつやつて前髪を簾みすだれみたいに長くして顔を隠してゐから、かえつて悪い印象を持たれるのよ」

娘はすばすばと容赦無く指摘する。

高蘭が自分の為を思つてあれこれ叱咤してくれたのだと分かつてはいても、それは無理なのだと思嵐は顔をそむけ、絶えいんばかりに睛を瞑つた。

「の顔を堂々と晒して歩くのは、私には耐えられないのよ……

分かるまい。お前などには分かるまい。

大きな醜い痣あざを、人に見られるくらいなら、溶けて淡雪の「」とく消えてしまいたい。

高蘭にはきっと死ぬまで、いや死んでも分からぬだらう。

「いいの……いいんです。これでいいの。私は……」

俯いてぼそぼそと言ひ思風に、高蘭はふつと肩の力を抜くと、やおら思風の手を引いた。

「あ」

思風は体勢を崩して、高蘭の胸に倒れ込む。高蘭は華奢な身体の割に、力が強い。一緒に倒れ込むこともなく思風を支えた。

「お嬢さま　高蘭」

身を起こしてさすがに文句を言おうとした思風を、高蘭が背を押されて遮る。

「思風」

真剣な声音に思風は動きを止めた。体が強張る。

まだ。

顔を上げずとも、高蘭の笑みが絶えたけはいがする。

一種恐怖に似た感情が思風を襲う。

高蘭の容姿はあまりに完璧過ぎるのだ。しかし普段はその陽気な性格が人形じみた厭世的^{えんせい}的な美貌の与える恐怖を中和している。だが

高蘭が一度表情をなくすと、その本性がたちまち露わになる。

見る者は一瞬にして悟らざるをえない。

これは、人外の美だ、と。

いつもは擬態しているとしか思われない。そんな空恐ろしさを覚える。

高蘭は優しく思嵐の背を撫ぜた。母が子にするような慈愛の手つきだった。思嵐は知らず母の手を思い出していた。母は体調を崩して久しく、家計を支える思嵐は心配をかけない為にも肩を張るしかなく、誰にも甘えることができない。

高蘭を嫉妬しているのに、同時にこんなにも慕わしい。

私……ばかみたい。

矛盾して、ぐるぐるスキとキライの間を往復している。

働き過ぎて身も心も疲れきっている思嵐は、安心したせいもあるのか、使用人としてあるまじきことではあるが、次第に睡魔に襲われた。

顔を埋めた衣裳からは何かの香を焚き染めているのだろう、良い香りが思嵐の鼻腔を刺激し、次第に思考力を麻痺させた。

それは実際、高蘭の身につけた匂い袋から漏れていた。

高蘭はゆづくつと、噛んで含めるように言い聞かす。

「いいのよ、それでもいいんだわ。」ひつゝ、それがいい。思風はそのままでいい。

もつすべだから。もつすべだから待つて

何を言つてこむのだろ？

思風は夢現に思つた。おけつこべ。

眠りこおちた思風の頭をゆつくつと膝の上に乗せて、高蘭はひつ
そつと毒が広がるが如く嗤わらつ。

「癌あががあつて良かつた」

くつと肩が揺れた。

「我ながら、嗤えるな」

「」の表は。

執着

胡耳は娘を手放したくなくて、あるいは娘に相応しい大夫を探してことじ」とく求婚を断っているわけではない。

高蘭が初めて思嵐と顔を合わせたのは七つの時だった。それまで高蘭は身体が弱くて、ずっと臥榻に寝たきりで縛り付けられていたから、里の子供とも殆んど接触したことがなかつた。六つを過ぎた辺りから次第に快方に向かい、七つになる頃にはすっかり健康体となつていた高蘭は、今までの不自由を取り戻すように外に出て近所の子供たちと遊び回つた。

それである日、いつもぽつんと独りでいる思嵐と出会つた。

最初に顔を合わせた時、雷に打たれたかと思つた。

私はこれを知つてゐる。

唐突に高蘭は知つてゐることを思い出した。名前や姿かたちを知つていたわけではなく、『これ』を知つてゐるのだと。

どこかで擦れ違つたとか、似た人物を知つてゐたとかそういう程度ではない。強烈な直感であり確信だつた。

懐かしさと慕わしさに、不覚にも涙が零れ落ちそつになつた。

何故か、など知らない。どういうわけで知つてゐるだのと思つた

のかも。

ただ手に入れたいと強く思った。

むろんその為に色々手を打つた。思嵐の家が大黒柱を病で亡くして困窮しているのをいいことに、父に頼んで侍婢にした。本人が妙な劣等感を持つているのも好都合だった。孤立して、誰の手も取らぬのであればそれで良かった。

前世、というものがあるのか高蘭には分からぬ。しかし前世で深い縁を結んでいたのでなければ、説明のつかない激しい渴望だった。

高蘭は**美醜**というものに実は拘らない。人は皮を壹枚剥げば皆肉の塊である。形というものは生まれ落ちたその時から崩壊を始めていふ。滅びるよう運命付けられたものが命である。形の良し悪しを論じるなど無意味だ。

かといって醜女の思嵐の内面に、何か澄んだ美しいものを見出しあわけでもない。むしろ思嵐は常人より後ろ向きでひたすら内向的、内にどろどろした粘着質の闇を抱えた娘だった。

だから、疎む理由こそあれ、執着するのに理由などないのだ。だのに欲しかった。

ただ手に入れる。それだけが高蘭の内を占めた。

驕慢に育てられたが故の独占欲の発露であったか。それとも。

周囲が思つほど無邪氣でも優しくもなかつた高蘭は、更に可憐で

才氣煥発な婦女子の擬態を装つようになる。
さいきかんぱつ

十を過ぎた辺り、母の呂氏が高蘭の臥榻がとつ（寝台）に忍び込んできた。毎夜交わされる行為に高蘭は悟った。

我が性は陽である。

昔、天と地も分かれず、陰と陽も分かれず、全てが渾沌として、あたかも溶き卵のように形が定まらない時に、かすかなもののきしさがあらわれた。その中で清く澄んで明るいものは高く上にあがつてたなびき、天となり、重くて濁つたものは固まって地となつた。清く細かなものは集まりやすく、重く濁つたものは固まりがたい。そのため、先に天ができ、地があとにできた。

『日本書記』

天ははじめに上に生じたので一、地は後から下に生じたので二、天と地の構成を一と二を合わせて三とする。

万物はこの天地陰陽から生まれるものであつて、全てをその陰と陽に分類することができる。男女もまた陰陽に分けることができる。

陽とは、すなわち男性である。女性は陰。

高蘭は陽の性、畢竟女児なりやる男児であった。

これは驚嘆すべきことである。女子の姿をしていた高蘭は、その時まで己が女であるを疑つこともなかつた。しかし今や眞実は明らかであつた。

故に呂氏が犯した不義・不道徳は息子との姦通。

されど、陰陽は和合する。それを求める。

陰と陽に気が通ずることによつて五行が生じ、その作用によつて森羅万象は生ずるのである。新しい命も陰陽の和合より生まれるのでだ。

高蘭が陽であれば呂氏が陰の性で陽を求めたのは意味が通り、陽の高蘭が陰の思風を求めたのも自然の掟に反しない。

心の働き　　高蘭が思風に惹かれたのはこれで説明がつく。

しかし、もう一つの問題がある。

何故高蘭は女子の形をしていたのか。それは先も述べたように彼女　いや彼の体が非常に弱かつたことにあつた。

生まれた瞬間より呼吸困難に陥つた我が子を、呂氏は氣も狂わんばかりに生き長らえさせようとした。胡耳も大方手を尽くして、幼い息子の命を助けようとした。

しかし財力にものいわせて招いた医生も皆役に立たず、一年以内の死を宣告した。

そこにふらりと訪れたのが身なりの汚い道士である。

「成人するまで女子の姿をさせるがよい。されば命数は伸び、健康なままでなる^{しほい・れいじょ}疾病・靈障^{はくじゅ}も免れ白寿まで生きるだろう。しかし成人する前にその約束を破つて男子の姿に戻れば、私は安全を保障しない」

道士はそう言つとたちまち田に霊が湧き出てその中に消えてしまつた。

若い夫婦は呆然とした。

「あれはきっと畠山に洞府を構える仙人だろう」

畠山はこの里のすぐ背後に聳える、道士の修行場としても有名な深山幽谷を供えた名山である。

「おっしゃった通りにいたしましょう」

これは実は高蘭の陽の氣があまりに盛んであつた為に起きた弊害^{へいがい}であった。過度なものは毒となる。故に、女子の格好をし、その振る舞いを真似て荒ぶる魂魄^{こんぱく}を慰撫することで、陰の氣を補つたのである。

果たして仙人の言う通り、高蘭は丈夫な身体になつてすくすく成長した。今年で十五、女子の成人を迎える。しかし男子としてはあと五年待たなければならぬ。

その約束が高蘭を縛つている。

あと五年も待てるか。

「**酷薄**な笑みを浮かべて高蘭は思った。

これは恋情ではないだろう。ただ、何かが高蘭を突き動かすのだ。
それは多分前世からの業だろう。一度や二度関わっただけではなく、
幾度も生を交えているような気がする。

手に入れたいと思つからには何としても手に入れよ。

彼の命数が一年であつたのは、天がこの者の徳を鑑みて、そのよう
に定めた為である。それを無理やり伸ばしたつけが、今回つてこ
よつとしていた。すなわち天命、天数は揃れたのである。

天界

「最近は妖魔の動きが活発といつが……」

沈痛な面持ちで縫腋に纓冠を付けた文官は、同僚に声を潜め漏らした。

「やれ、下界では惨劇が繰り広げられておると聽く。下界に根を張る風伯、水神によると妖魔どもはますます数を増やし、天界まで台頭する勢いと言つが」

「一体どうなつておるので……」

分からぬ。

文官は答え、眉根を揉む。

「これは玉皇大帝のしろしめす天界、金闕宮にある、諸神が集つて政を行なう靈霄殿の一角である。

中岳・嵩山の西北五万里にある崑崙山は太丘の天柱とも称す九層の楼閣では、風は穏やかに花咲き乱れ、富城は玉で色とりどりにまるで暗雲垂れ込める気配もない。

だが、更に下つた太丘の麓では、妖魔の影色濃く、前衛の武官は群がる魔変化生のものに戦陣を開いているといつ。

されど、と今一人の文官が不安を払いのけるよう口を開く。

「それがしの聞き及びしこりでは、とある女仙が獅子奮迅しじふんじんの働きにて妖魔を駆逐くそくしておるとか」

阿呆あほめ、と一人が眉間に皺みけん しわを刻む。

「それが頭痛の種よ。まるで協調性きょうとうせいといつものを知らぬ、その女仙の身勝手極まりない振る舞いに、規律が乱れ私闘わたくちを挑む者まで出る始末。一人の並々ならぬ働きより、軍をいかに合理的に動かすかが肝要かんようなのだ」

「その者はそれほどまでに得て勝手を？　しかし凄まじい働きなのであるつゝ。」

「あれは

彼は英々と流れる果てしない雲海を望む。

「凄まじい、などといつものではない。まるで血に飢えておるかのよつに……天界の者にはあるまじき狂氣よ。他の者がその異端ぶりに拒絶反応を起こすも道理……」

異変

初め、空にぽつんと見えたのは、塗りこめたような紺碧じんぺきの中の黒い染みだった。

染みは筆先から絹布けんぶにぽたんと落ちた墨汁のよひごじわりと広がり、やがて形を成した。

子供が、何も知らずに指を指して悦んだ。

ひとがた ではあるが、背せなに禍々しい翼こぎょうの生えた異形。

「ひつ」

誰かが、息を呑んだ。

彼は指摘する。

「夜行遊女だああああああああああああああああ

つつ

里落中りらくちゆうが、水を打つたように不自然なほどしん、と静まり返った。

一瞬の長闊のびかとすら言える静寂の後。

「うわああああああああああああああああああーーー」

魂切たまきる絶叫が、恐慌に火を点けた。

それを機に、怒号と悲鳴と恐怖とが一気に爆発する。

四方八方に駆け出した村人は、互いにぶつかって罵り合つて、揉みくじやにされながら逃げ惑つ。

混乱と、黒く塗り潰された絶望の淵に、人々は本能で感じ取つていた。

逃げられない。

「もう、この呪里はお仕舞おひりだああ」

はたゞ、二枚の猛禽の翼を羽ばたいて、異形が広場に舞い降りた。

「あーん、見て見てつ バカどもが逃げ回つてゐよーん」

幼い顔つきをした、それでも将来的には男を惑わす美貌の主になるだろうと思わせる、翼の生えた娘が身をくねらせる。

少し年かさの好戦的な顔つきをした娘が、ぶるつと身震つてゐる。

「うふふ、堪たまらないわねえ。あたし悲鳴を聞くとぞくべくしちゃつ

つ

怜俐さの中に蠱惑的な色香を湛えた美女が、一人の妹を宥めた。

「妹妹達、はしたない真似しちゃ駄目よ?」

「はあーー」

「殺つちまう時は、興奮に任せて一思ひにぐつわづじやなくてええ」

「苛め抜いて苛め抜いて、死なしてくれって嘆願してもまーだまーだ殺しちゃ駄目なの！」

絶世の美女は、はんなりと脳髄まで蕩けそうな微笑を浮かべる。
（とき）

「せこ、よくでももつた」

夜行遊女達は次々と降り立つ。その数、見積もつて二十ばかり。邑を壊滅させるには、充分過ぎて物足りないくらいである。

先陣を切つて、あどけない容貌をした娘が哄笑しながら突っ込んでいく。

「この世のものではない異形の美しき娘達は、その花の顔を輝かせて、惨たらしい殺戮^{さつりく}にまるで童女が遊びに熱中するがごとく身を投じ始める。彼女達は恍惚と弛緩しきつた表情で、その非情な遊戯に耽溺^{たんのき}していった。

* * *

「アーティストの心」

たちまち騒がしくなった表に、思嵐は半泣きになつて家人を捕まえ、尋ねた。

いつもは淑女せんとしている侍女頭の女は、半狂乱になつて思嵐のがりがりの手を振り払つた。

「つぬせこねつ、『ひちや』ひちや言つことじやないよ。」はやく逃げないと、ここにもあいつらが来ちまつた。」「

裙子もすそをたくし上げ、女は一刻も早く立ち去りとすむ。しかし思嵐は女の袖を再度掴んで放さなかつた。

「何するんだいこの子はつ」

思嵐は必死の形相で女に取り縋る。家人は皆奔走して、誰も思嵐など気に掛けてはくれない。屈強な男達に突き飛ばされ、同じ下婢げじよの娘達ですら、血の氣を引いて思嵐の問いには答えてくれなかつた。

今、この袖を放したら、何が起きているのか分からないつ

常に考へられない行動力であつた。思嵐は必至の形相で食い下がる。

「あいつらって何なの！？」

「お放しよー、ええい、あいつらってのは、姑獲鳥じがくちょうだよつ あの残忍極まりない鳥の化け物がこの世に大量にやつてきたのさーー！」
もう何もかもお仕舞だよーー！」

最後はもう悲鳴であつた。

女の口走った妖魔の名に、思嵐は身の毛もよだつ戦慄を走らせる。

「よ……よつによつてあの…………」

言葉が続かない。夜行遊女の通つた後には、屍骸しか転がらぬといつ、あの恐るべき妖魔である。血肉を好み、その性向は残虐にして無慈悲。

狂乱を愛し、断末魔を何より悦ぶといつ

「さあもつ放しとくれつ」

女が乱暴に腕を振り払つたのにも、思嵐は暫く気づかなかつた。

女は堂房むねを出るや階さあわせを駆け下り、院子なかにわを突つ切つて大門いづぶちの方へ行いつとする。

残された思嵐はほんやりと呟いた。

「……は、はは……ど……し、よ……つ……」

田まぐるしい事態の展開に頭が追いつかず、いつそ乾いた笑いさえ込み上げて来る。ねえ、どうすれば、いいの。

外は騒がしい。皆屋敷を出て行くとしているのだ。

自分も逃げなれば。こんな田立つ大きなお屋敷の中には、あ殺して下れこと言つてくるようなものだ。

そう思つのに、足が疎んで動かない。

ひざがじゅう
膝頭が笑つてゐる。

いい加減、現実逃避から頭も覚めてきて、今度はじわじわと焦躁感が込み上げて来た。

「……シラ、動いてよ」

「己の足にいい聞かせてみる。心臓が狂つたように鼓動を打ち、全身が小刻みに震え始めた。足が、足が動かない。

「逃げないと、逃げないと、逃げないと…」

あいつらが来ちゃうよつ 悪い夢。吐き気が込み上げて、口許を抑えた。怖い怖い怖い怖い。目の縁から涙が盛り上がりてくれる。

「あ、あ、あ」

私、死ぬの？ ここで死ぬの？ こんな所で、まだ、まだ何もしてないのに何にも楽しい事、知らないのにつ

誰か。

ばたばたと足音が近づいてくる。

瞠目して顔を上げた。

同僚の少女だ。

「桃つ」

思嵐は安堵感にへなへなと座り込んだ。一番仲の良い少女である。

桃が蒼冷めた顔でこじらを振り返った。

ああ、ちゃんと聞こえたのね。

「お願い！ 助けて、足が動かないの！」

反対側から叫ぶと、桃は立ち止まって田を見張った。よかつた、気がついてくれた！ 彼女は強張った形相でこじらに駆け寄ってきた。

「 あ、ありがとう っ

感謝に、睛が潤んで来る。

だが。

桃は汚いものでも見るよう顔を背けて、思嵐のへたり込んだ回廊をそのまま突つ切つた。外へ。外へ。外へ。もう彼女は振り返らない。

「 え？」

思嵐の笑みが強張る。どうして？ 助けてくれるのではないの？

嘘でしょう？

「桃？ ねえ、桃ツ 桃、桃、桃おオオオおおつ」

後ろ姿が小さくなり、その足音は遠ざかって行く。

思風は愕然^{がくぜん}と廊下に手をついた。全身が痺れきつている。

どくん。

どくん。

ど、くん。

み…見捨て、られた ?

顔面からあわてと血の氣^{けい}が引いた。

私は、見捨てられた。

見捨て、られた。

その違えようもない事実にて、顔面蒼白となる。

……ツー……やあああああああツ

膨れ上がった緊張が爆発した。油汗をしどとに垂流しながら、思風は立ち上がりうつとして、ずるりと無様に転がった。

手足が、がくがくと震えて、這いつぶばつたまま四つんばいで立ち上^じげることが出来なかつた。焦れば焦るほどにつるつると磨き抜かれた廊下を汗ばんだ手が滑る。顔面蒼白のまま血が滲むほど下唇を噛んで、ようやく自分の腰が抜けたことを知つた。動けなければ、

取り残され、死ぬ。ぼたりと大粒の汗が額から頬を滑り、木肌に黒い染みを作った。死ぬ。殺される。簡単な等式だった。

血を吐くような絶叫が、もう誰もいない廊下に木霊する。

「お願いイイツ！ 置いていかないでえええエエえええつ！」

灯りの落ちた、暗い廊下に深遠として吸い込まれるよう絶叫は響いた。返ってきたのは、しんしんとして、針の落ちる音さえ聞こえそうな静寂だつた。绝望が溢れ出さんばかりに、涙と汗と鼻水混じりの懇願をしても、応える者など皆無だ。

もう、人気は完全に絶えている。

私しか、いないの！？

ふつん、と危うい理性の糸が切れた。

「……ッいや、いやああああッ ねえ、誰か！？ だれあかああア
アアあああああッツッ」

どんな無様な姿でもいい、這つてでも追いかけようとするが、今度は全身から力が抜けて、またもんどうつた。他人の体を借りたみたいに、手も足も思うように動かなくて、汗ばかり噴き出た。視界が涙でぶれ、何もかも霞んで見える。もうどこへも行けない。

……ッひ

死にたく、ないつ

その時、再び誰かがぱたぱたと走つてくる音を耳が捉えた。

思風はもう幽かな期待すら抱けず、腰が抜けたまま脱力しきつてころ。

今度も、見捨てられる。

また、同じだ。誰もが自分で手一杯。一体誰がこんな醜い自分を、身を呈して助けてくれると?

足音が近づき、再び遠ざかるのを覚悟した。しかし、それはぴたりと俯いた思風の前で止まつたのだ。

荒い呼吸を繰り返しながら、絹の沓の主は、裳が汚れるのも構わず、膝をついて思風の肩に手を置く。

「思風つ 良かった! 探したのよ……」

「え?」

「ど、う、して?」

慌てて仰いだ先に、高蘭の紅潮した顔があつた。

呆然と呟く思風に、高蘭が表情を改める。

「わあつひさな所で油を売つていい場合じやないわー逃げるのよー」

思風はくしゃり、と顔を歪めた。醜い顔がますます醜くなつただれつ、と頭の隅ついで思つ。

「足が」

「何…？」

こんな事を言えば、見捨てられる。そつもつ一人の自分は叫んでいたが、遅かれ早かれてしまふのだ。

「足が、動きません」

ぱたりと泪なみだが頬を伝う。

ぐつと高蘭が飲み込んで、真摯な睛で思嵐を貫いた。

「そう」

ああ、もう終わりだ。

思嵐は絶望に身を任せた。

「なら、私がおぶって行くわ」

何を言われたのか、分からなかつた。

呆然とする思嵐を、高蘭が強い語調で叱咤じっさつした。

「何をほんやりしてゐのつ死にたいのー！」

反射的に首を横に振る。

「し、死にたくない」

それだけははつせりと言える。

「なら、私の背に抱まりなさい。それくらいなら出来るでしょう？」

「けれど」

「早く！」

急かされ、思嵐は下唇を噛んだ。お嬢さま育ちの彼女ですが、こうして恐怖に立ち向かい、その上他人まで助けようとしている。自分が何だ？

未だ震えながらも、顔を上げ呂律の回らぬ舌で嘆願した。

「お、お嬢さま、おぶつてくれなくていいです」

苛立たしそうに高蘭が肩を揺さぶる。

「何を言つてゐるの、ほりつ！」

息を整え、どうにか意思を伝える。

「いいえ。肩を貸して下さい。自分で歩けます」

思嵐の言葉に、高蘭は晴を見開き、それから口許を弛めた。

「分かったわ。まあ、肩に抱まつて」

二人は立ち上がる。

「大門は危ないわ。裏手の側階から抜けましょう」

「はい」

頷く思風に励ますよう笑いかけ、高蘭は歩調を速めた。

妖魔襲来（前書き）

すみません、作者は以前心情について、”（台詞）” くべりし
ていたのですが、現在心情は ”（台詞）” といづ風に使いな
しています。

これまでの話数は直していくといったのですが、修正する労力が
めんどうなので、とりあえず、全話あげておき、時々直して生きた
い……と思います。違和感があると思いますが、ご寛恕いただけ
る幸いです。

妖魔襲来

誰が火を放ったものか、屋敷の外も内も、炎に躊躇じゅうりゅうされつつあった。

思風と高蘭が脱出した後、ある臥室しんしつに一人の夫人が、臥榻がとう(寝台)の側で虚脱していた。

上等の衣裳、頭には金笄を挿している、柳のよくな妙齡の夫人。

思風が見れば、『奥さま』とでも呼んだだろつ。

高蘭の母、田氏である。

「あ」

彼女は虚ろな睛で唇を僅かに開いている。

「…………らん…………」

高蘭。

あの子。あの子。あの子。あの子。

「わたくしを、置き去りにしたのね……」

ぎりり、と付け爪が、家事をした事のない柔肌に喰い込んだ。

「…………わたくしを、突き飛ばしたわ…………」

可愛がつてあげたのに つ

夫以上に近くして、昼となく、夜となく、舐めるように溺愛して。

それなのに、あの子は嗤笑ちしようしたのだ。

逆光に、顔を塗り潰されていたが、確かに。

扉を開いた高蘭に、田代氏は当然のものと思つて命令した。

「ああ、高蘭つ待つっていたのよ。さあ、わたくしを助けて頂戴」

手を、蔓つるのように伸ばした彼女に、高蘭は歩みより、いつそ優しいとも言える美しい笑みを寄越した。

「ああ、母上。いじこらひしゃつたのですか」

「やうよ、いいから早く、恩知らずどもは皆方々に散つてしまつたの。お前だけが頼りよ」

それは、息子に対する言葉と言つより、愛人に対する依存の姿勢だつた。

高蘭は蕩けるような微笑を唇に刻み、

「母上、お別れです」

別離の言葉を彼女に宣告した。

呂氏は笑顔のまま時を止めた。

「 は ？」

高蘭はにっこりと笑んだまま、笑んだまま、彼女の咽元に言葉の刃を突きつけた。

「道を外れた淫婦が。私はあなたのぶよぶよした白い肉が大っ嫌いでしたよ。ここで死んで下さい。清々しますから」

「 は ？」

呂氏は再度繰り返した。

高蘭がぐるりと背を向ける。

行つて、しまつ。

娘の姿をした、私の息子が。

呂氏は意味が頭に染みとおつた途端、愛情や肉欲を勝り、腸の煮え繰り返る殺意を覚えた。

悪鬼の如く眦まなじりを吊り上げ、手を伸ばした彼女を、高蘭が振り返り、躊躇なく呂氏のはらわたの?を突き飛ばした。

臥櫈にぶつかって、呂氏は睛を回す。

(わたくしを、突き飛ばしたの?)

痛みより、何より、その事実が呂氏を完膚なきまでに打ちのめす。高蘭は従順で、自分に絶対服従している筈だったのに。

頭が混乱していた。

(何故、何故、何故、何故!?)

彼女は永遠に解けぬ命題に、迫る死の瞬間まで囚われ続けた。

それは、とても速やかに訪れたのである。

美しくも淫蕩な死の乙女達によつて。

裏の通りに出た途端、思風は絶句した。

「嘘……」

邑落が、燃えている。

そして、空を何か人にあらざる鳥のよつなものが飛翔している。

それが、急降下する度、悲鳴が。悲鳴が、尾を引いて。

自失する思風に、高蘭が厳しい顔で促した。

「いんな所でぐだぐだしている場合じゃない。急いで離れるんだ」

一瞬、高蘭の口調に違和感を覚えたものの、思風はそれを上回る

衝撃に人形よろしく頷いた。

どうにか駆け足に屋敷から離れる。

と、空中から異形の女達が連なつて、燃え上がる屋敷に数名降り立つのが見えた。

(間一髪だった)

思嵐は高蘭に助け出された幸運を重く受け止めた。

今まで、あまりの境遇の違いに勝手に高蘭を憎悪していた。その事が今、耐えようもなく羞恥を伴つて、思嵐を苛む。

(何て、恥ずかしい……私は、本当に心根が醜かつた)

誰より美醜に拘つていたのは、自分だったのだ。

口を引き結び、煤だらけになつた高蘭の横顔をそつと盗み見た。

厳かで、神々しかつた。汚れてもなお、高蘭の高潔さは内から光を放つ。

(生きて、生き延びて、今度こそちゃんとお仕えしたい)

思嵐は密かに願つた。自分を変えたい。もう一度、機会が欲しい。

はつと高蘭が足を止めた。

「え?」

きょとんとした思嵐は、次の瞬間にはぢんつと高蘭に突き飛ばされ、家屋の方に倒れ込んでいた。

「な、に」

高蘭がふり返り、引きつった形相で叫ぶ。

「早く隠れなさい！」

立ち竦む思嵐をじれつたそうに高蘭が戸の中に押し込む。自分も素早く中に入つて、急ぎ戸を閉めた。

「さやーはははははははは」

「逃げなさいよー！」

甲高い哄笑。

板の隙間から外を窺うと、人が向こうから駆けて来る。着衣がボロボロに引き裂かれ、乱れている。

「桃つ」

思わず口を押された。

「助けてっ助けて　　つ

桃は絶叫しながら走っていた。丁度思嵐達の隠れている家の前で転んだ。

「ひいっひいいいいい」

立ち上がるうとして、ぺたん、と座り込む。

「いやーん、もつお仕舞なお」

「もつと愉しませしてよー」

「あ、ひ」

やつだーと一際甲高い嘲笑が響く。

「見てーん、この『失禁してる』

「もつたなーー」

「ひいいいいい」

猛禽の翼の娘は、腰に手を当けて、

「汚いからあ

舌足らずな声で高らかに宣言する。

「しけ
　　いー」

(桃つ)

先ほど見捨てられた。最初は泣き惑う彼女の姿に少々いい気味だ、

と思わないでもなかつたが、次第に思風は見ていられなくなつた。

(どうなるの?)

不安だけが増大していく。助けたい。でも、ここから出て行く事は出来ない。今、自分が仮初かりそめにも安全だから、こうして同情心など湧いてくるのだ。その事を、思風は痛いほど理解していた。

誰しもそつなのだ。桃もそつだつた。他の家人もそつだつた。自分も。高蘭も。自分を守るので手一杯だ。

悲鳴を、押し殺せたのは、いかなる御業であつたか。

思風は、うつと強烈な嘔吐感ねつとうかんに襲われた。それほど、田の前で繰り広げられたのは凄惨極まる光景だつた。

鋭い鍵爪が、桃の頭をまるで熟した果物を握りつぶすようにして抉つた。

桃の恐怖に引きついた面が、石榴やくろのように弾ける。ぼたぼたと滴り落ちる血に、彼女は不思議そつな顔をした。したと思つた。

一拍おいて彼女は、

「きやああああああああ

」

絶叫した。

ひい、ひい　つと空氣が咽から漏れる音。じたばたと手足が痙けい

撃したよつに動く。

(いや　ひ)

背後から高蘭が思風を抱きしめた。

人の温かみを感じていなければ、思風は長い悲鳴を放つていただ
ろう。

「あはははははははおもしろーー」

ぞわ、と湧き上がる田も眩むような怒りが、思風の田頭を熱くさ
せる。

何が、一体何がおもしろいと言つのだ！

(私達は、あんた達の玩具じゃなーいっ……)

一抹の怒りと、それを上回る絶対恐怖。

のた打ち回る桃を、人外の娘達は踏みつけにする。

拍子抜けしたかのよつに、

「あ、事切れちゃった」

「えー、つまんなーい」

でもおお、と妙に間延びした声で、片方の娘が淫靡な笑みを作つ
た。ちる、と紅い舌先が唇を舐める。

「セニの家からあ、人間の匂いするしいしいい」

「あはつあたしもやう思つてたんだあ」

(……うむー?)

思風は凍つつき、全身から血の気が引いていく音を聞いた。

娘達に対する義憤はあつといつ間に萎んだ。その程度のものでしかなかつたのだ。絶大なる恐怖の前には。

「ひつ」

歯の根が合わず、勝手にカチカチと鳴る。

その思風を、高蘭がぎゅっと強く掴んだ。恐怖で?が一杯に満たされる。

(突き飛ばされるのだろうか)

そんな考えが頭を過つた。

まさか、その為に助けたのだろうか。襲われた時に、身代わりとする為に?

そして、やつぱり、思風は突き飛ばされたのだ。

「つあ」

しかし、表ではなく、家の奥へと。「逃げろ」と強く囁かれて。

(高蘭ー!?)

同時に、鮮血を全身に浴びた娘達が、家中に踏み込んできた。

「みーつけたっ」

それは嬉しそうに無邪気な笑みを浮かべて。

思嵐は、仕切りの方に尻餅をついていたので、彼女達からは死角になっていた。

高蘭が、胸を張つて堂々と切り出す。

「遊ぼう」

娘達はきょとん、と田を丸くする。

高蘭は不敵に笑い、もう一度繰り返した。

「私は逃げる。追いかけておいでの

いいつと娘が身を捩つて叫ぶ。

「！」の口元へ つうん逃げて逃げてええっ

「あはははつ逃げて

「

「殺しちゃうからさあああああああああ

ざつと地を蹴る音。ひらり、と身を翻して。衣裳は薰香を残し、風に流れた。

「行くよ

」「う

(あ、あ、高蘭　　……)

暫くの間、思風は動けなかつた。頭が混乱していた。

(ど、して? ど、して? ど、して? ど、して? ど、して? ど、して?)

ずきずきとこめかみが痛む。思風には理解不能な、高蘭の一連の行動。

突き飛ばされた。

でも、それは思風が考えたような事の為ではなく　　高蘭は囮となつて、一人表へと駆け出した。

(どうしてなの　　高蘭! ?)

ここにいれば、いずれまた嗅ぎつけられて殺されるのは分かついた。でも、この家を出ることで、安全な場所から渦中へ放り出されようつむ恐ろしがあつた。

黒煙に思風はけほつと咳き込む。もつ、火の手が近い。

(高蘭、高蘭、高蘭っ)

怖いよ怖いよ。

そして、取り返しのつかない事をしてしまったという罪悪感があった。

自分は、疑つた。最後に疑つた。高蘭を。高蘭が、自分を盾にして逃げる気だと。

(私は)

自分の中にあるものでしか、人を測る事ができなかつた。

(私は)

ひくり、と咽^{のど}が焼け付くような熱を持つ。

私は、高蘭が身を呈して守つてくれる価値など、なかつた。

泪^{なみだ}が止めどもなく両頬を濡らしていた。

(行こう)

行かなければ。

私の命は、彼女がくれたものだから。

ここに、いては駄目だ。

無駄になる。生き延びないと、無駄になる。

震える足で立ち上がり、思嵐はさつと表に出た。

表は、文字通り地獄だった。

暫し立ち廻くし、ふと思嵐は母や妹を思い出した。

今まで忘れていたのが不思議なくらいだった。

(か……かあ、さん)

最悪の予想が脳裏に浮び、それだけは絶対嫌だと思嵐は拳を握った。

そりり、と一步下がり、後は弾かれたように全力疾走した。

母との別離

「母ちゃん！」

まだ思風の家の辺りは火の勢いも届いてない。

駆け込んで、思風は母を必至に呼んだ。

「ああ、母ちゃん」

ふと、
禰から起き上がって、幼い妹を抱いた母の姿に、思風は一時の安堵を得る。無事を確かめて脱力しそうだった。

「思風ー！」

母は思風の顔を見るなり、口を押された。

「良かった
無事だったのねー？」

「うん、うん」

不覚にも泪が零れそうになる。だが、それを堪えて思風は訴えた。

「母さん、逃げないと逃げないとあいつらがつ」

あいつらが、と口走る娘を躊躇めようつ、母は落ち着いた聲音で問うた。

「一体、何では起きているの？」

「ああ、母さんはずっとここから分からなかつたのね！？母さん、落ち着いて聞いてね。夜行遊女が大群で畠に押し寄せたの。今は中心部にいるけど、もう直ぐここにもやって来るわ。早く逃げましょ！」

「え……」「え？」

顔色を真っ白にして絶句する母に、思風の反応も仕方ない、と思つた。

自分とて、ほんの少し前には歩く事すらまばらなかつた。こうして母に逃げよひ、と口に出来るのは、全て高蘭のお陰なのだ。彼女の勇気が、僅かにも自分に乗り移つて、奮い立たせてくれている。

高蘭の事を思つと、胸が張り裂けそうになる。彼女は、どうなつた。二匹の姑獲鳥を相手取つたのだ。結末は、簡単に思い浮かぶ。それでも、その最期を直接睛にしたわけではない。だから。一縷の望みに掛けたかった。

(もう一度、生きて会つんだ)

生きて。

「早く、母さん！」

母は立ち上がりかけて、急に前のめりになつた。

「母さん……？」

激しく咳き込む母に、思風は慌ててその背を擦る。じくじくと焦燥感が胸を侵食する。

「大丈夫？ 母さん、母さん」

母は、体調を崩している。その事実が急に現実のものとして重く思風に圧し掛かっていた。

(逃げ切れるの？)

病の母を抱えて。

一人なら、逃げられるかも知れない。

(何を考えているの私は！？)

自問自答しけけ、いいえ、皆で逃げるのだ、と強く念じる。

しかし、母はぜえぜえと不規則に苦しげな呼吸をしながら、

「思風、私は無理よ。お前だけでもお逃げ」

「止めてよつ母さん、一緒に逃げるのよ！」

いいから、と母はついぞなかつた霸氣を込めて娘を諭す。

「こんな村の外れだ、見つからないかもしれない。でも、万一を考えて、家族が分散していた方が、危険は少なくなるのよ。

お願ひだから、小翠連れて、山の方に逃げて頂戴」

「いやっ」

思風は頑迷に首を振った。

母を置いて逃げる事は、思風にとって自己崩壊に等しかった。父を亡くし、病の母と幼い妹を全て思風が背負つた。

しかし、母の存在がなければ、思風は一人では生きていけないのだ。支えていたつもりで、支えられていた。母を亡くしたら、本当に一切合切の拠り所をなくしてしまう。

病気でもいい。そこにいてくれるだけでいい。一人は堪らない。一人は、嫌だ。独りは嫌だ！！！！

「母さんがいないと私、どうしたらいいかわかんないよつー皆一緒にやないと嫌だよおおお」

幼子にかえったかのようになり、思風は尻餅をついて駄々を捏ねた。

「思風っ」

恫喝され、思風はびくっと肩を揺らした。

母の睛は、覚悟を決めた意思の光を宿して思風を射抜く。

「お願いだから、駄々を捏ねないで。皆が生き延びる、一番良い方法なんだよ。」

ほとぼりが冷めたら、またこの家に戻つておいで

「 ツツ」

そんな、の。そんなの分からなによ。

「……分かるだろう?」

思嵐は歯を食いしばり

頷いた。

「母ちゃん、さつとだよ、さつとだからねー!？」

母は淡く微笑んで、娘の決意を喜ぶ。

妹を紐で背に括りつけて、思嵐は戸外に出る。何度も何度も母をふり返つて。

(母ちゃん、きっと戻つて来るからね)

もし、この時思嵐が母の手元を見ていたら、どうなつただひつ。

氣丈に見えた母の手は、筋が浮ぶほどきつく握り締められ、小刻みに震えていた。

彼女もまた、例外なく、怯えていたのである。

絶望

畠山は思嵐達の住む畠里の背後に控える。思嵐は灌木かんぼくを搔き分け、山に分け入つて行く。

(娘娘ニヤンニヤン（女神）廟がある筈はず……そこまで辿り着けば)

辿り着いてどうにかなるものとも思われない。だが、廟の存在が一筋の光明に思えた。

(祈いのり、必死で祈いのり。きっと娘娘のお耳に届く筈)

皆を助けて。高蘭を、母を、助けて。

あの気高い高蘭が、汚らわしい姑獲鳥なぞに引き裂かれて良い筈がない。危険を冒してまで我が子を送り出した母が、死んでいいわけがない。

天帝は全て、お見通しの筈。罪なき者を、助けて下さる筈。

ふと、背中の小翠がしゃくりあげるよつむずがつた。

「ひいっ」

「どうしたの？」

言葉が通じるとも思われなかつたが、思嵐は尋ね、それから背後

を振り返つて ひくつと咽が引きつった。

「あはつ みーつけ」

ぱさり、二枚の猛禽もつかんの翼がはためく。

紅を引いたよに濡れ濡れと輝く唇を、尖った舌先がぺろりと舐める。

思嵐は、愕然としながら、どこか捩ねじれた頭の隅で不思議に思つて見蕩れた。

どうして、こんなに美しいのだろう。

残酷で、残酷で、慈悲の欠片すらない。人間を引き裂き、生温かい鮮血を浴びて、ますます人外の美貌に磨きをかける異形の娘達。

吐き気がするほど美しい。

思嵐の唇はかさかさに乾いて、細かく鱗割ひびわれていた。足が、がくがくと震えて、舌先は凍りついたまま悲鳴すら出でこない。

「こーんな山奥にまで逃げてたんだあーん」

「あーんな畠外れのあばら家にもババアが一匹いたしい。念の為と思つてこっちにも来てみたけどーん」

恐怖に思考の麻痺した思嵐に、鉄槌を下したのは、

(あばら家にも、ババアが一匹

?)

「この言葉だった。

母さん。

母さんの事なの？

「あのババア弱くてつまんなかったよねええ

「壁に叩き付けたら、ぐちゅって潰れちゃったあああん

「きやはつ 潰れ饅頭まんじゅう」

(潰れ た?)

潰れた?

潰れた?

誰が?

母さんが、潰れた?

「ああああああああああああああああ

「

悲鳴が、迸ったのにも気づかなかった。おあああっと背中の妹が泣き始めたのにも。

「まっさか人がこっちまで来てるとは思わなかつたけどーん

化け物が、にいつと頬が裂けたかと思うほど口角を吊り上げた。びっしりと並ぶ、真珠の光沢を放つ鋭い歯が。

「ああ、ほんとうに逃げ切ったわね。」

駆け出せたのは、奇跡に近いと思ひ。

狂ったような嘲笑がどこまでも追いかけてくる。

(こやあああああああああああああああああああああああああああ)

母さん

母さん

もういない！殺された！あいつら元殺された！

高蘭

私
もう駄目なの！？

足が傷だらけになるのにも構わずがむしゃらに走る。妹が泣いている。

死ぬ！

死ぬ！

今度こそ死んでしまつー

もう、もう逃げられない！

私死ぬわ！－！－！

死んでしまつー

「いやああああああああああああ
ツツ！－！」

虚空に絶叫を放つ。

追跡するは悦楽に睛を潤ませた異形の娘達。

「もつと逃げてえええええ」

「あたし達を愉しませてよえええええ」

足がもつれ、つんのめりそうになりながら、それでも走った。

（助けて、助けて、助けて、助けて！－！－！）

背の赤子が石のように重い。

（早く、走れないつ）

泪を滲ませながら、咆哮した。

小翠は重かつた。赤子の癖にやたら重かつた。

どんどん重みを増していくよひすら思われる。

ど二をどう走つたものか、獸道に突つ込んだ思風は、奇跡的にも妖女達を振り切つた。

「ひいッ ひいッ ひいイッ」

限界の悲鳴を上げる心臓と呼吸器官、思風はひしやげた息を繰り返す。

(か、隠れなきやッ 隠れなきやッ)

ぎりついた睛で辺りをきょりと見回した。

直ぐ追いつかれる。

茂みに、隠れてじつと息を潜めなければ。

その時、妹が真赤になつてむせ返りながら泣いているのを氣づいた。

(止めてッ 泣かないでええつ)

氣づかれる。氣づかれてしまつ

「ああああああああああああああああああああああああ」

震えて言う事の聞かない手で妹を縛りつけた紐を解いていく。何度も何度も手が滑った。

焦りの為に結び目が解けない。

(お願い！ お願い！ お願い！)

しゃがみ込んで作業する思嵐は滝の如く流れ落ちる汗でびしょびしょ濡れていた。

手を上げるのですらままならず、指先なぞ痺れきつている。

(二三)

何故こんなに泣くのだ。泣けば助かるの？ 助からない。余計に危険が増すだけだ！

(どうしてそれが分からぬのつ)

思嵐はあまりに泣きすぎて死んでしまうのではないかとすら思われる妹に、今初めて殺意を覚えていた。

(解けたつ)
ほど

ずるりと妹を降ろして、急ぎ胸に抱えた。小翠は咽過ぎて顔が真赤になつて膨れ上がつていった。

それと同時に。

「」の辺かな ん」

(ひつ)

思風は悲鳴を呑み込み、咄嗟に妹の口を掌で押さへつけた。

「んッ　んぐッ　んウウッ　んッ」

小翠は小刻みに痙攣する。

(お願いつ静かにしてええええーー)

「いないわねええ」

「弱つたわねえ」

がさがさと動き回る音。

不意に、ぱや、と羽音がした。飛翔したのだらつ。

「あつちを探しましょお」

「やうすつかあああ

思風は息を止めていた。

十秒。二十秒。三十秒。たつぱり時間が過ぎた後で、は、と息を吐き出す。

(た、助かつた)

(

するつと脱力する。

尻を濡れた土に滑れらせるのと同時に、どつと泪が溢れた。

(助かつた

! - !)

もう、動けない。

(たすか)

つた。

ふと、頭上に影が落ちた。

雲が通過しているのか？

「え？」

思嵐はぐびり、と変な音を聞いた。自分の笑みが凍りついて、咽が鳴ったのだと、後で気づいた。

「見いいつけたああああああああ

娘達が異様に発達した犬歯を剥き出しにして、思嵐を覗き込んでいた。口腔は血塗れで、粘り氣のある糸を引きながら、異様なまでに真つ赤ない、ら……を……

「…………あ、あ、あ」

声が、出なかつた。馬鹿みたいに「あ」を繰り返す。

「あんた結構優秀ねえ、追いかけっこ^{たんのこ}堪能^{たんのう}したわよお」

讃められても、嬉しくない。ちつとも嬉しくない。

「でも、もうおしま いーってあら?」

異形の娘が興味深そうに思風の手元を、赤子を見た。

「いいもの持つてるじゃ なああこ」

思風は硬直したまま娘達を仰ぐ。

彼女達はくすくすと示し合わせたが如く笑い始めた。

「ちよつと見てみなよつ」

「笑えるひつ」

意味が、分からぬ。夜行遊女は子供の柔らかい肉を好むと言つ
が、まさか、妹を食べる気なのか。

妹を差し出せば、私は助かるだろ?つか。

ぽんやり麻痺した頭でそづ思つ。

片方の化け物が目尻に涙を滲ませながら、

「ねえ、あんたさあ。自分の手元見てご覧よ」

思風は言われるまま、やはりほんやりと抱きかかえた妹を見た。

見て、
瞠目した。^{どうもく}

「あせはッ あんた 一体どヽを押されてゐるのをあああい」

小翠はぐりんと田中を剥いていた。思風の手は、妹の口を押さえたままだつた。ずっとずっと押さえたままだつた。口も、鼻も。

あんなに妹は痙攣^{けいれん}していたではないか。妙な呻き声を間断なく漏らしていたではないか。無視したのは自分だ。追い詰められて、無視したのは。

わたし
だ。

「あ、
ひ」

恐る恐る口許から手を外した思嵐は、妹が息を吹き返すまいかと期待し、がくんと仰け反つた彼女に、

「うそをつくのは嫌だなあ。うそをつくのがうまい人間には、うそをつかない人がうらやましい。」

恐慌に妹を取り落とした。とさり、と彼女の顔は地面に埋まる。しかし、乱暴な扱いを受けても、彼女はびくりとも反応しなかつた。

たちまち人外の娘達が手を叩き、身を捩って場違いな笑いを炸裂させた。

「いやーん、妹殺しよおおお

「助けるつもりで殺しちゃったのおおおおお」

「それともその」「あんたの娘なのおおおおお?」

「どつちこせよ、」「ーろした、」「ーろしたつ」

「窒息死があわせひやつたあああああ」

ぴょんぴょん跳ね回って悦び叫ぶ。

「よーっし、その非人間的な振る舞いの」「褒美につけなーんと、百秒も時間を上げちゃうつ」

「もつー回逃げなさ いこつ」

「モーれついいーか、」「いいいい、」わあわあーーん、しゃい
い

「どつちこ、また立ち上がる奴になつたのだらけ。

浅ましくても、どんな時にも、人間は生きっこりとする事を止められない。生への執着は、消えない。

地べたに座り込んだまま呆然とした面を晒し、ふと自分の膝を見た。本能的に、膝頭が痙攣するように跳ね上がらうとした。同時に、地面についた掌と、二の腕に力を入れた。一度泥に足を取られて、上手く動けずに、ペシャんと尻餅を着く。着物が土塗れになつて、ますます汚らしくなる。それでも地面に手をふんばり、生まれたばかりの小鹿同様、ぶるぶると震えて言つ事を聞かない脚で立ち上がった。

動ける。まだ、動ける。動かなければ、死ぬ。見開いた目で、そ
れだけを考える。

再び走り始めた。

虚無をも抱えて。

走つた。

足の皮が破れて血が吹き出す。転げて、顔を泥だらけにする。

それでも何度も立ち上がる。

רְבָנִים וְרְבָנָתִים בְּבֵית־יְהוָה

あの声が。

生きる。生きる。生き抜け。

逃げる事しか出来ない。反撃すら許されない。文字通り犬死にだ。

何故、これほどまでに力の差が歴然としているのだらう。何故、こんな事が許されるのだらう。

私は何か悪い事をしただらうか。それは、全く罪を犯さなかつたと言えば嘘になるだらう。しかし、こんな目に合わねばならないほど、その罪は重かつただらうか。

妹など、罪を犯すほどその生は長くなかった。

誰が罰を下すと言つのだ？ 神仏か？

では、神とは何？

罰を下される私達とは何？

家畜か。我々は、人ならぬ存在に蹂躪じゅりくされるだけの、家畜か？

(私は、家畜じゃない)

生きたい。死にたくない。

どんなに罪深くても。慘めでも。例え這いつくばってでも。

(……死にたく、ないッ 死にたくないッ……助けてッ 助けてえええええエエエエエ！……！)

ぶわっと空気が、密度を濃くして震撼した。

木も草も、花も、土も、ぐこぎこぎと溶け合ひ。

地面は上下盛んに蠢き、空は蒼から赤へ、赤から黒へ。黒から、再び蒼へ、色を、失う。

自然界の法則が、出鱈田でたらまにた打ち回る。崩壊する。

思嵐が走る先に、蜃氣樓じげりょうと思しき歪みが生じた。

泪で視界の殆んどを失つた思嵐は、起つた怪異にも気づかず、ただ走り続ける。

果てに、先ほどまで存在しなかつた道觀じうかん（道教の寺院）が揺らめきながら姿を現し始めた。

強い想念に引きずられて、暴き立てられた位相の異なる存在である。

思嵐はやがて自分の走る先に佇む道觀に気づいた。

へんがく扁額が掲げられているが、文字の読めない思嵐には何と書かれているのか分からぬ。また例え読めたとしても、それを読み取る余裕は彼女にはなかつただろう。

思嵐は石段を駆け上がり、どんどんと門前を叩いた。

「開けてええええ、開けて下さこいつ助けて下さこいつ」

お願い！ 開けてええええ！――！

拳を打ちつける。幾度も幾度も。血が滲んで、閉ざされた門に血痕がべつたりと付着する。その上を更に叩く。泪に濡れながら、あ

らん限りの声を張り上げて。

願いが通じたのか。

ぎこいいいいいいいいいい

門は、開かれた。

思風をこれまでと全く異なる世界へ導く事になる、運命の門が。

これは、夢だらうか。

薄紅うすべにの花びらが視界中に乱舞らんぶする。

はらはらと。ひらひらと。

それは、夢幻むげんの、幽玄ゆうげんの光景だ。

あまりに平和過ぎる光景に、思嵐はただただ日を見張り、呆然と立ち尽くす。

佇むのは、一本の古木。今を盛りと桃の花が開花し、その芳香を四方へと放っている。

風が花を散らし、散つた花は空中に舞う。

まるで紅い風花。晴れた日に降るといふ、あの雪。

(どして ?)

どうして、今の季節に桃の花が、

あまりにも場違いで、暫し呆然自失となる。

「これはまた珍しい」

はつと仰いだ先に、階えりを降りてくる人の姿があつた。

漆黒の道服を着込んだ、まだ若い道士である。

だが、妙な違和感 あまりに落ち着いた、老成した睛と
その聲音が、若者にしては不相応に思えた。

しかし俗世を離れ、修行に専念する者であるならば、それもまた
何ら不思議な事ではないのかもしれない。

道士は思嵐に向かつて訥々と語りかける。

「（こ）は、そなつのよつな娘子が来る所ではありませぬ。家にお帰
りなされ」

大きな声ではないのに、はつきりと聞き取れる。

だが、思嵐は。皮肉に、顔が嘲笑の形に歪みそうになった。

（い、え ？）

家ですって？

家など、もうない。

もう、ないのだ。

田蓋^{まぶた}と咽がひくひくと痙攣するのを堪えて、思嵐は驚く道士の前
で地に手をつき叩頭した。更に頭を地面へとめり込むように擦りつけた。口の中に血と土の味が広がった。

「お、お願いですッ お願いですから、私をここへ置いて下さい！
追い出さないでつ 追い出さないで下さいー 追い出されたら、
殺されてしま'ッ 死んでしま'ッハハハハハハ」

泪と汗と鼻汁とでぐちゃぐちゃになつた顔で、思嵐はいつそ地
面に顔をめり込ませながら、必至に嘆願した。砂が口に入つてくる
ことなど、全然念頭になかった。

「お願いしますッ 私を追い出さないでー！」

追い出される事は、死に等しい。

道士が瞠目して思嵐を見下ろす氣配がする。逼迫して、娘らしい
恥じらいも、人としての体裁さえも取り繕えない醜態ぶりに、いつ
そう惨めさが増した。

みにくい。わたしは、醜い。泥水を啜つても、鼻汁と泪と汗に塗
れても、砂を口に含んでも、髪を振り乱し、衣を乱し、こんな惨め
極まりない姿でも。

どんな醜態を晒しても。

生きていたい。生き延びたい。こんなにも、こんなにも、人は、
人は、命ある限り、生きていたい。

私は、どうして、こんなにも業深いのか。

何故、高蘭のように、母のように、潔くなれぬのか。高潔ではい
られないのか。

それでも、生きたいと他者の慈悲に縋りつづくのか。

「の狂氣にも酷似した熱は、どこのから競り上がりつて来るといふのか！」

やがて彼は静かに口を開いた。

「何やら、私があずかり知らぬところで、ただならぬ事態が起つてゐる様子。とりあえず中に入りなさい。まだ若い娘さんだといふのこ、体中傷だらけではありますねか」

手当てをしなくては。話はそれからにしましょ。

つむつと若い顔立ちのこ、まるで幾年も降り経たような老熟した雰囲氣でそつと置いて、道士は裾を払い、踵を返した。

(追に出されない)

そう思つた途端、無惨に緊張の糸が切れた。地べたにへたり込んで、力が抜け落ちる。膝下にある土や石の感触はどこか遠く麻痺して、傷だらけの手足の疼痛もほとんど感じなかつた。全身が鉛になつたように重く、脱力感にもはや一步たりとも動けなくなる。

「あ

あ。

「あああああ

両眼から、泪が溢れ出し、止まらない。思嵐は、けだものじみた鳴咽とも咆哮ともつかないうめきを漏らした。それは人語ではなか

つた。勝手に躰の奥底から溢れ出る『こきも』の悲鳴であった。

とめどもなく、両眼から涙が溢れ出し、砂地に吸い込まれてはな
お滑り落ちた。

熱い。この泪は熱い。

火箸を当したよりも、ずっとずっと熱い。痛い。溶解するほどだ。

熱いところは、生きているところ。

私だけが、生きているという事。わたしだけ、いきのこった。皆、
ごめんね。ごめんね。ごめんなさい。ゆるしてください。このおらん。
しゃあない。たお。かあさん。みんなみんなみんな。ゆる、ゆるし
て。ゆるして、ゆるしてください。

「ああああああああああああああああああああああ

天を仰向いて突き上げるまま慟哭する。狂おしい熱が体内で行き
場を失つて、上へ上へと競りあがつて来る。口から、涙腺から、出
口を求めて零れ落ちて行く。焼け付くような痛みが思風を襲う。咽
につかえた熱い塊を吐き出す事さえ容易にならず、ただ獸のよつこ
哭いた。

道士が撫で肩越しに視線を寄越し、地べたに座り込んで動かない
思風を見て、眉を潜めた。

それは、放心する思風に対する苛立ちではなかつた。痛ましい者
に対する、無力な憐憫を読み取らせるものであつた。

「……余程、辛い目に合つたと見える」

それは思嵐の耳には聞こえなかつたけれど。

「さ、私の肩に掴まりなさい」

思嵐はしばらく応えることが出来なかつた。現実拒否を体も頭も望み、外界の感触は全て乖離して、あまりの苦痛に全身が反応してくれなかつた。優しく肩に手を置かれ、その温かさにまた瞠目した。

私は、生きている。そして、安全な場所に辿り付いて、我が身可愛さに一人安堵している。

それでも、それでも。

よつやく、一つ頷いた。それから、馬鹿みたいに、何度も何度も頷いた。首が壊れてしまうのではないかと思うほど、頷き続けた。

頷き、躊躇いがちに道士の肩へと手を伸ばした。道士はしつかりと思嵐の伸ばした不健康な指先を握り返してくれた。

道觀の内に案内され、席を勧められた。

「さあ、お茶でも飲んで躰を温めなさい」

ゆるく翠の顔料を落とし、そのまま溶かしつけたような青磁の碗。日の光に透かされ、茶の水色がまろやかな調和に美しく映える。

差し出された茶杯をおずおずと受け取つて、ふと静かに波紋を描く水色に視線を落とし、覗き込んだ。たちまち、後悔に襲われる。自分の酷い顔が映つて、ぎくりと顔面が強張つた。裂傷だらけの上、憔悴しきつた幽鬼じみた面に、顔の半分を覆つ醜い痣がありますところなく鮮やかに映し出されている。

何を、今更。

「……温かい……」

自嘲する。思嵐は何故か強張つた笑みが口許に浮ぶのを感じながら、目を逸らし、杯に口をつけた。

その、温かさに驚いた。冷え切つた身体中、指先まで熱が染み渡るよつで。

また勝手に泪が零れそつになつて、思嵐は懸命に俯く。

泣いてばかりではないか。

卓の上には、使い込んで艶^{つや}の出た茶器一式が置いてある。それがとても高価なものだらうという事は、お屋敷勤めをしていた思風には容易に分かつた。

しかし、こんなうらぎれた道觀に何故

？

「……あなたは、麓の村落の者でしょ？ 何があつたのですか？」

穏やかに語りかけられて、極彩色の悪夢を脳裏に呼び覚ました瞬間、顔面から血の気が引いた。

「…………あ

句とか応えようとして、無様につめく事しか出来ず、返事に失敗する。

口許に持つていきかけた茶器が、手の震えに合わせて小刻みに揺れ、熱い茶は不安な細波を打つた。それつきり紙のように真っ白な顔色で歯の根が合わず、目を見開いたまま水色を凝視するしか出来ない。他のものを視界に入れたとたん、あの化け物達の影が横切りそうな気がしてたまらなかつた。

「やれ、随分辛い目に合つたようですね。まだこんなに若い娘さんなのに、惨いことです。もう安心しなされ。ここは安全ですよ」

優しい言葉に、じつと睛に泪が溢れる。

「…………ど、し、さま。道士、さま。らが、む、四が

最初は舌が回らず、言葉にならなかつた。だがやがて堰を切つた
よつて思嵐は今日一日に起きた出来事を それはもう惨劇と呼ん
で差し支えないだらう体験を話した。話が終われば、またあの妖魔
たちが現れるといわんばかりに、途切れることなく話し続けた。

道士は同情するでもなく、慰めるでもなく、責めるでもなく、はす
向かいに座つたまま、ただ黙つて聞いてくれた。

三中で夜行遊女に追われたぐだりになると、

「……道士さま、私は、私は、我が身惜しさに妹を！ 殺めま、し
た！ い、いも、妹は、まだアツ まだ！ 赤ん坊だ、に、私がツ
あ……の子のツ は、鼻とお、口を押せ、て、ち、窒息、死させ
た、んです ……！」

咽も裂けよと告白する。

「わ、わた、私は妹、殺しで、す！ あの化け物、どもこもおツ
殺した、殺した……て、は、離子立てら……まし、たツ

妹を殺して、母を、置き、去り……して、こ、高蘭に、お、お、
おと、囮にな……て助け、たすけ、もらつた……！ 私、生きて
いる、価値、な、て、れ、誰よりもなかつたのに、それな、に！
わ、わた、私だけ、生き、残つて……！」

妹殺しが、生き残つて

道士は黙つて思嵐を見据えていた。それは何よりの慈悲であつた。
その指先が、そつと思嵐の額に触れ、張り付いた髪を払つてみせる。

「どうか、娘さん。自分を責めるな、とは言えません。今は己への怒りも生きる糧。ただ、どうか。今は、ゆっくり休んでください。この道觀は、妖怪を一切寄せ付けぬ、一種の隠れ里にして桃源郷です」

ふと道士は視線を丸く窓によつて切り取られた空に転じる。

「己のよつて、外界が妖怪に襲われよつとも、何も変わることのない、業深い別天地。壺中の天とも申します。

それゆえ、己の道觀は戒めに「亜山福地壺天道觀」と称します」

“壺中天地”。別世界、別天地、桃源郷の意である。漢代、費長房という市役所の役人がいた。ある日露天商老翁が夕方になつて店をしまうのを見ていると、その老翁は城壁に懸けてあつた壺の中に消えていった。あの老翁は仙人であつたかと驚き、翌日自分も同行させてくれるよう頼み込んだ。老翁は了承し、一緒に壺の中に連れていつてもらうと、そこは水晶の壜に囲まれて、金殿玉楼が見えた。壺の中の別天地で、一人はともに俗世を忘れて酒を楽しんだ。また、この壺公はその性も名も知られていない。昔は天界の役人だったのが、役目怠慢のお咎めを受けて、人間界に流されたものだと言われる。昔話である。

亜山福地壺天道觀は、このよつて一種荒唐無稽な伝説にあやかつて、名のつけられた道觀であるようだ。

「変化を知らぬ地にて、ゆるり休養されるがよろしい。辿り着ける者は、一握りです。

普段は隠され、見えないはずの「」に辿り着いたのは、恐らく貴女の強い生への執着ゆえ。それは、貴女の業ではなく、この地の業。恥じ入ることなく、生きてゆかれませ」

さて、一つ。礼を失しましたなあ、と道士は春の陽射しを受けて微笑む。

「まだ名乗つておりませなんだ。私めのこととは冥想めいそうとお呼び下され。娘さん、差し支えなければ、貴女の名は？」

「思風、思風、と申します」

「それは、よい名を親御さまに賜りましたなあ

嵐を思つ。

「思風、嵐の後には、全ての浄化と変化が来るものです。さて、寝室にない致しましょう」

臥榻ねつたく代わりの榻牀ながいすに横になり、暗闇の中、じつと漆喰の天井を見

つめてみると。

闇の中に同化して、己が消え去り、何者からも害されず、心安らかにこなれる心地がした。

夜具を胸元に引き寄せ、日尻から額にかかるて汨の筋が逆流した。静かだった。物音一つせず、虫の音さえも聞こえず、静かであった。己の乱れた心も、ひやりとした夜具の冷たさに、空氣の清浄さに触れて、静まって行く。

昂ぶりは突き抜けると、一転して急速に収束して冷えた石ころのような塊となつた。

じうじて。

ぱつんと零れた。

「どうして、こんな事になつた……のかなあ

あたし、何か悪いことしたかなあ。

夜具を巻き込んで、思嵐は日頭を熱くしながら横になつた。ぎゅっと膝を抱き寄せ、丸く胎児の形になる。

何にも、悪いことしてない。

いや。

違うだろお、お前はあ、妹をお、殺したんだろお。

「……ッひ、」

ぐう、と変な音がして。咽が鳴って、思風は嗚咽を噛み殺した。
熱い泪が流れ、息苦しくなる。炎と煙幕に包まれ、呼吸すらまま
ならない、焼け付く空気を思い出す。

おかあさん。おかあさん！

耳鳴りがする。夜行遊女に追いかけられたあの絶大なる死の恐怖
を思い出すとともに、脳裏に蘇る鮮やかな聲音。

『ぐうつて潰れちゃった』

『さやは、潰れ饅頭！』

ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！

耳を、塞ぐ。膝をきつく胸に寄せて。
呪わしい。全てが、全てが呪わしい。
天よ、何故惨い運命をお与えになつたのですか？
呪われるがいい。
呪われよ。全て、呪われよ。

「……ひッ ふ……う、ぐう……ッ」

体の震えが収まる事も、嗚咽が途切れない事もない。ぐぐもつた
声を漏らしながら、一夜を明かした。

平天大聖の黄泉返り

再び、邑。

「大姐ねえさまア、全部ぶつ殺して来たよおおおおお」

「きやはつ 任務しゅうつよ おおおおおおお」

羽音とともに、身をくねらせながら、形ばかり優美な乙女たちその本性は殺戮の女怪が、邑の広場に降り立つ。辺りは濃厚な血の香りと、ぶちまけたような赤、赤、一面の深紅に、今やただの物言わぬ肉怪となつた邑人達の姿。

仰向き、苦悶の形相で絶命した者、顔半分が抉り取られている者、我が子を庇つて背を切り裂かれ、子供を腕に抱いたまま一緒に串刺しにされた母子、胴と脚が捩じ切られた者……坊主が説法に使用するあの地獄絵図に他ならない。夜の闇の帳で覆い隠しても、なお腐臭に満ちたそこに、場違いに美しい少女達がけらけらと笑いながら。一匹、また一匹と集まって来る。

「「」苦勞様。一人残らず、ね？」

とりわけあでやかな立ち姿の美女が、仲間達を労う。今回の襲撃は、夜行遊女の一の姉である月下公主の指揮の元行われた。

「あはん、月下大姐、どうして皆殺しなのおお？ あたし、男を一匹くらい生かしておきたかったのにいい」

「ニヤーン、ジの」「、いーんらーん！　人間の男漁りばっかりやつてんだからあ」

「何よお、あんたたちだつて、しょつかゆい氣に入つたのだけ連れて返つて種馬に生かしておぐじやなあい」

「しづめへべえ」

「わうわう、厭きたり食べちやうしー」

さやせつ　と夜行遊女たひな羽で互いをどつき合こながら、無邪気に笑う。

「何で最近は、適當な男を生け捕りするのもダメなのねえ？　殺しづぱつかりじやあつまんあいよお」

「やあらじここつ」

「あんたもねー！」

「さやせつ」

騒ぐ妹分達に、月下公主は蠱惑的な下唇にまつせつとした指先を当てる

「そつねえ、説明してなかつたわねえ。ビハシよしうかしうへ、おまえ達、『牛魔大王』様をじ存知よねえ？」

「牛馬ちゃん？　誰それ？」

「牛魔ちやんでしょね？」

「知らないわい」

月下公主は「やつぱつ」と眉根を揉む。

「だから説明しなかったのよ。やれやれ、若い娘達はもうかの牛魔大王様をじ存知ないのねえ。世代の溝を感じちゃうわあ」

「年増なのねええん」

「……」

田にも止まらない速さで、月下公主は暴言を吐いた妹分の首を鷲掴みにした。腕から先が妖鳥のそれに変化し、ぎりぎりと締め付ける。

「何ですか？」

張り付いたそれは、綺麗にはいた笑顔である。

「……」め、めん、なきつ ゆ、る、しつ

地面に重い物が落下する音がして、

「一度とやんな台詞を吐くものではないわよ？」

睥睨する冷やかな笑顔に、「へへへ」と激しく頷く。

「えええ

「そこそと妹分達は大姐に歳のことを言つのは禁句だわね、と囁きあつた。

月下公主は何もなかつたことにして、妹達に向かつて語り始めた。

五百年ほど前、東勝神洲とうじょうじゅうじんしゆうは傲来国、花果山福地水簾洞洞天かげさんふくちすいれんどうどうてん、ここに一匹の石猿があつた。その神通広大なことは周辺に轟き渡り、水簾洞は馳せ参じ軍門に下る有象無象の妖怪で溢れた。

やがて石猿はとりわけ妖力甚大なる六の魔王と義兄弟の契りを交わした。石猿を加えてこれを七兄弟とする。兄弟の長兄は『牛魔王』、これを『平天大聖』とも称す

「これがそもそも始まりよ」

「分かんないよお。その魔王七人義兄弟のいつちばん兄貴が牛魔王ちゃんなのでしょおおお？ それがどうかしたの？」

「お馬鹿な子ねえ。ところがこの七人義兄弟の内、行方不明ゆくえしれずがほとんどなのよ。我らが夜行遊女族の父、鵬魔王様ぱうまおうとて、いづこにいらっしゃるのか、所在知れず。ようやく行方がつかめたのが、牛魔王様といふわけでね」

「牛魔王ちゃんどこなの？」

「だから。それを探し申し上げているところなのよ。全く、ビードルもかしこでも好きに襲っているわけじゃないのだから。あらんと羅盤の示す所、法則に従つて村々を襲撃しているのよ」

「何でえええ？」

「法則つてなにいーい？」

「うふふん、どうも牛魔王様は仮初のお姿で つまり、」

円下公主はそこに言葉を切つた。

風の匂いに、濃厚な血臭 そして、もはや夜行遊女を除いて犬一匹人づ子一人動くものないこの地に、

「誰か、いるわね」

途端に姦しく騒いでいた面々はふと無表情になり、血を吸つていやなお赤みを増す唇をにいつと吊り上げた。

「まだまだ、生きている人間がいたのかなあ？」

「しふといわねえ」

白く細い指先に、肉を抉り、骨を断つ鋭い妖爪がびきびきと弾ける音とともに盛り上がりつゝがつて来る。

「やつちやおうかあ」

心弾むよう笑う妹に、

「お待ちー。」

鋭い制止を月下旬公主は放つた。

「いの、けはいは……」

まさか。

期待に、彼女は血も滴らんばかりに妖艶な笑みを浮かべた。

「大当たりだわ」

無造作に積み重ねられ、こそげた肉とごびりついた血で無残な姿を晒している村人達の亡骸。

「ひー！」

妹達の間に悲鳴にも似た音が走る。

死屍累々と横たわる人体の下から、白い手がおいでおいでおいでをするよづに向かつてさし伸ばされていた。

夕日の赤を鮮血でも浴びるようにして、それはゆらりゆらりと頼りなく、しかしどこか不安を搔き立てる不気味さをもつて揺れる。

「生きて、たの？　ぶつ殺した筈なのに」

不満というより、不審そうな声を上げる妹達に、月下公主は「いいえ」と満面の笑みで首を振る。

「死んだのよ。そして、生き返ったの。蘇りを果たされたのよ。

牛魔王様は人間の姿に身をやつして、顕現される。

それは、その人間としての生を受けた地に、血縁者並び近親者並び縁故ある者全ての血を吸わせた後、妖怪の王として黄泉返りを果たされるだろ。まさに、その通りになつたわけね」

お出迎えしなければ、と指示を飛ばす。慌てて駆け寄つて行く者を尻目に、呑氣な妹分が不満そつに尋ねた。

「ねえ、ねえ、どうして一回死ななきゃダメなのお？」

「転換をなさるため」

「何それ？」

「万物は陰陽の氣で出来てゐるわ。天の氣は陽氣、地の氣は陰氣、そして、「人の氣」はこの天と地の氣が混ざり合つもの。

男は陽氣に偏り、女は陰気に偏りこそすれ、完全にどちらかの氣に染まることはありえない。

でも、稀にそうではない者がいる。完全に近い、純然たる陽氣を養う者、陰氣を養う者。これが一片の不純物もないまでに昇華されると神仙や妖怪となる。

そして、生者が陽気に偏るなら、死者は陰気に偏るの。つまり、『死』は氣を逆転させるものなのよ。もし全くの陽気しかもつてない者が死んでしまつたら、全てが完全なまでに陰気になる。つまり、妖怪になるということね

「何か分からぬけれど、なんとなく分かつたかもお

「……」

「つまり、死んでしまうと、それをきっかけに引っ繰り返るんじよ？ ゼええんぶ。良い人は悪い人に、悪い人は良い人に！」

「違うけれど、まあそれでよしとするわ

待ちかねた狂乱の宴、恐怖の夜の始まりよ　夜行遊女は囁つた。

朝方の道觀である。

眠れば、腹がすくものだ。

思嵐は空腹を感じて口を覚ました。口はすでに高い。

上半身を起こして呆然と朝の冷氣を肌で感じた。

おかしい。こんな時でも、体は食べるものを欲求するのだ。これが私の浅ましさだろうか。自嘲の笑みに片頬を歪め、借りた夜具をきちんと綺麗にたたんでから寝床を抜け出した。

清風の吹きぬける石造りの道觀内を歩き、朝餉を持つて来た冥想と廊下でばつたり鉢合わせる。昨日からひくに身づくろいもないしない事に気がつき、慌てて顔を俯かせた。前髪で自分の顔が全部隠れてしまえばいいと願いながら。親切にしてもらつた冥想には、いつそう醜い痣を見られたくなかった。それは酷く恥ずかしく、耐えられない苦痛だった。

「あ……あの、おはようございます。申し訳ありません、遅くまで寝てしまつて……」

咄嗟に謝ると、冥想は面食らつたように口を瞬かせた。

「いえ、事が事ですから、どうかお気になさらず……それより

冥想は思案げにうつ伏せた思慮の面をまじまじと見る。

「あの、何か?」

「いや、まずは腹」しらべをしてからに致しましょ。やうですね、食べながらでもお話をしましょつか」

「……あ……は、はい」

訳が分からぬまま、とりあえず頷いた。

「どうも不思議なのですが、昨日お会いした時は、女性は男性より陰氣に盛んとはいえ、過度に陰氣を帯びていらっしゃった。

むしろ、陽氣が全くないところのが正しい。全てが陰氣であるとは、普通ありえない。

しかし、一夜明けてみれば、発散する氣は全て陽氣になっている。昨日は、大変恐ろしい目に会われて、心と体の均衡が崩れ、たまたま陰氣が盛んになつたとしても、今日のこの変わりようはなんなか。皆日検討つかぬのです」

「あ、あの。それは何か問題があるのでしょつか?」

「普通人は天地の子ですから、陽氣も陰氣も帯びているものです。

男性は外側を陽気で覆い、内側に陰気を包み込む。女性は逆に陰氣で外側を覆い、内側に陽気を包み込みます。このように、互いに陽気が陰気のどちらかが盛んではありますが、完全に一つの気に転ぶことはない。

これが全くどちらかに染まるとなると、それは神仙や妖怪といふことになる。

無論、人の中にも稀にほとんど陽気、ほとんど陰気、という者もいます。しかし、それもほどほどの話です。全てあますところなく完全な陽気、陰気というのは人外の領域ですから……」

思風は必死に話に追いつこうとして、ビックリとか口を開いた。

「一夜にして、陰気と陽気が完全に逆転した、というのも問題なのですよね？」

「はあ、問題というか、不明ではありますなあ。何、ピンしゃんしておられるなら、特に不安に思われることもないでしょう。なるようになります」

「……そ、そうなのですか」

「そうなのですよ」

冥想はカラカラと笑った。つられて、思風の頬にも僅かに笑みがのぼる。

「さて、小難しい話ははさておき、朝餉をゆっくり召し上がるれよ

「ありがとうございます」

思風は胃に優しい朝粥を頂いた。白い米など本当に久しぶりに口にしたので、あやつくまた涙が零れるところであった。

「わあわあ、」かの桃もせひ呑じ上がつて下われ

しきりと勧められて、瑞々しい桃の果実を口に含む。

口腔に清らかな甘味が広がり、思風は驚いて目を瞬かせた。

「」のよつて美味な桃は初めて頂きます

「はは、何これは水蜜桃と申しまして、かつては西王母の蟠桃園（ばんとうえん）蟠桃は仙境になる桃）になっていた桃を、孫悟空なる大妖が貪り食い散らかし、その種を下界に投げ捨てたところ、根を張ったものといういかにもそれらしい伝説を持ったものでして。まあ、そう思つて召し上がれば、なおいつそう風味も品格も増して美味しい頂けるといつものですなあ」

「まあ」

思風は冥想の「冗談に口許を綻ばせた。顔の痣を見せる」とにはどうしても抵抗があり、真っ直ぐ冥想の顔を仰ぐことは出来なかつたが、昨日の今日で笑うことの出来る自分が不思議であった。

人は、痛みを忘れるものなのだ。

ともすれば、すぐ足元に広がる黒々とした闇に足をすくわれそう

になる。だからこそ、思嵐は笑うことでも口の闇から田舎を逸らしていくしかつた。何も、考えたくはなかつた。

「ところで、思嵐。今後の身のふり方はもう考えられましたかな？」

「…………あ……そ、それは」

ぎくりと笑みが強張つた。ここを出て行かと言われても、思嵐は外に一步でも出ることのが恐ろしくてたまらなかつた。何より、邑が壊滅しだらうに、一体どこへ行けばいいのか。冥想の慈悲にいつまでも縋ることは出来ない。かといって、自分は生きていくための技量を何一つもつていない。この顔と体では、春をひきこで生きていくことさえ不可能だらう。

冥想は田尻を緩め、穏やかに微笑んだ。

「もし行く場所がありませなんだら、この道観に止まりなればいいかがですかな？ 無論、ここを仮の宿とする以上は、道観の運営にたずさわり、日々の修養を積んで頂くことがあります」

「ぜひー、ぜひお願ひ致します！」

思嵐は勢い良く頭を下げた。願つてもない言葉だった。膝に置いた手は、由々筋が浮き上がるほど強く前かけを握り締める。

「お世話、なつます……！」

「やあ、そのよつてかじこまうぢ、じつか頭を上ばかりされ

「こいえ、親類縁者一同を亡くし、その上自ら妹の命を殺め、畜生

道に陥つた今、残りの人生は道門に捧げ、罪を悔いとひざります

……！」

「……お気持ちは察して余りあります。とはいって、ここは道觀の形態は取つてはおりますが、仏門の修行も合わせ執り行つている異端の流派です。それでもよろしいか？」

「道教でも仏教でも、妹を、母を、邑の人々をねんじりに呪う」とが出来ましたら、本望でござります」

「相分かり申した。では明日からわざわざ修行に取り掛かりましょう。今日はとにかくゆっくり体を休め、心を平らかになさつて下さい」

「はい、ありがとうございます」

いひして、亜山壇天道觀において、思嵐の修行が始まったのである。

四季の巡りとともに、山々は紅葉し、一度目の秋を迎えた頃。

壇天道觀の前庭に一本植わった桃の樹。思嵐はこの桃の樹が好きだった。

どうしたわけか、水蜜桃を食べる度、思嵐の顔の半分を覆う醜い癌は薄くなつて行き、今やほとんど立たぬようになつていた。師

父は笑つて冗談にされるが、これは本当に仙桃であるに違いないと、思嵐は確信した。きっと思嵐が負担に思わないように、そのように言つて下さつたに違いない。

「日々、感謝致します」

思嵐は唱えて、桃の樹に手を合わせた。

冥想は、恐らく地仙であった。

仙人には、三種類の様態がある。すなわち、天仙、地仙、しがいせん尸解仙である。

人間の姿のままで単に登つたものを天仙といい、天に登らず、地上で意のままに居るものを地仙という。また、人間の姿のままでなく、一度死んだ後、その精靈が身体から抜け出して、精靈だけが仙人になったものを尸解仙と称す。

これはそのまま仙人の位もある。

思嵐は地仙である冥想に師事して、人体の中核である、頭部・心臓・臍下の三か所に住む、老衰や疾病、靈障などをもたらす虫これを三尸虫といつ を駆除するため、米、麦、粟、黍、豆の五穀を断つていた。五穀は形ある身體を維持するものではあるが、同時にその身體を鈍重にし、心氣を濁らせる。しかし五穀を断てば、この三匹の死に至らしめる虫を弱らせることが出来る。こうして五穀を断つことを辟穀へきこくといつ。

清淨な暮らしをしているためだろうか、思嵐は己の身體の内側から清々しく心氣が漲るのを感じていた。何より、癌が薄くなつてい

くことが、本当に嬉しくてならなかつた。真つ直ぐに顔を上げて、人の顔を見ることが出来る。その何と幸福なことだらうか。

一方、穀物を断てば、気は精妙になるが、当然身体は栄養失調になる。そのため、五穀を摂取せずとも生きていけるように身体を作り変える必要がある。五穀に代わつて摂取するものを服餌^{ふくじ}という。思嵐の仕事は、この服餌になるキノコや松の実などの薬石^{やくせき}を集めることだつた。これは仙薬になる。

思嵐は、一つ一つ得られる知識を大切にした。

立ち上がつて裳裾^{すそ}を払い、道觀の結界地にある薬石を取りに行く。裏庭の洞門を出て、軽妙な足取りで細い山道を登れば、田^た當ての薬石はたちどころに見つかり、花や若葉を摘み入れる花筐^{はながたみ}はすぐに必要分でいっぱいになつた。

「ここのぐらいでいいかしら」

五臓六腑を養い、人体を損なうことのない上級な君薬に加工^{かこう}するのは、冥想の仕事である。思嵐はまだまだ修行の戸羽口に立つているだけで、大した手伝いも出来ない。

はやく、もつとお役に立てるようにならなければ。母や、妹や、高蘭や、邑人達を供養するためにも。

そのように思い願いながら、そつと嘆息する。

と、思嵐は突如として、頃から背中に向かつて総毛立つた。

忘れもしない、この邪悪なけはい。たひまぢがりと汗が噴き出る。

「な、こ？」

慌てて周囲を振り仰ぐ。空は高く、空気は清々しい。それなのに、違和感はますます膨れ上がる。

見慣れた景色に、違えようもない異物が混じつている。

「こ？ こなのだ？ こからこのおやましこなこは……

あつた。

雨水を吸つて黒々とした土と濡れた草の間に、埋もれるまつむじてそれはあつた。

「……た、ま、こ……」

赤黒い色彩は、思風にあの地獄の一夜をまだまだと想つて起りあわせた。

「こねは……」

指先を伸ばしかけ、喰らいつかれそうな邪悪なけはいに想つて留まつる。

師父をお呼びしなければ。

わつと口許を真一文に結び、思風は踵を返した。

師父に事と次第を説明して、例の卵を見つけた場所に案内すると、

「これは……」

師父は珍しく氣難しい顔をして黙り込んだ。不安になつた思風は思わず、

「何か不吉な兆しでござりますか？」

「はあ、兆しというより不吉そのものですなあ。これは妖樹の卵です。一度孵化して根を張つてしまつと、もはや撤去することは不可能です。これをどこか遠くへ捨てて来なければ」

「遠くへ？」

「ええ、それこそ海のど真ん中に捨てて来なければなりませぬ。下手につっちゃつては、その土地に根を張つてしましますからね。何、往復、十日ばかり道観を留守にすればよろしくでしょ?」

「十日もー。」

「いえいえ、たつたの十日です。思風、私の留守中の道観の結界守をお願い致します」

「……は、はい」

思風は泣き出しそうになるのを必死で堪えた。

私は、結界地の外に出るのが怖い。

だから、師父が代わりに卵を捨てて来て下さるのだ。せめて留守を預かるくらいはお勤め果たさなければ。

「では、今すぐ出ましょ。これはもつすぐ孵化してしまひ

「は、はー」

師父はほとんど旅支度らしいものもせず、五色雲に乗つて道觀を出た。思風は空を見上げて、師父の乗る五色雲を見送った。

師父、どうかご無事で、帰還下さりますよ。……

近年矮小な妖怪ですら我が物顔で人里に降りて行き、女子供のみならず男達もその猛威に怯え震えているといつ。結界地を出て旅をするようなことがあれば、その出現によつて命を落とすような事態に陥らないとも限らない。

師父ならばきっと大丈夫だろ。きっと。

思風は手を合わせて祈つた。

それから数日もしない内に、事態は最悪の事態を迎る。

思風が出迎えたのは、元気に笑う師父の姿ではなく、鉤裂きにな

つた道服から肉の赤を晒して息も絶え絶えに結界地へと転がり込んだ冥想の姿だつた。

「師父、これは一体！　お体は……」

駆け寄る思嵐に、

「やれ、情けないことになりました。妖樹の卵を捨ててくることは出来ませんでした。あれはすぐに孵化してしまったのです。結界地ももうすぐ破られことになるでしょう。孵化すると同時に、示し合わせたよう妖怪の大群に襲われました。もはや一刻の猶予もありません。奴等はすぐにここまで攻め入つて来るでしょう」

「…」

思嵐は愕然とした。ここも安全な地ではなかつた。ここも、あの邑落のように蹂躪され、私は母のように殺されるのだ。

「……う、あ。あ、師父、師父！　一体どうすれば……」

がちがちと歯の根が合わない思嵐を見て、冥想は柔らかく微笑んだ。

「大丈夫です、今から言つことをようくお聞きなさい。そもそもここに何故道觀を中心とした結界地が敷かれていたのか。それは、この地に天界へ続く道が隠されていたからです。そのため道觀を築いて塞いでおつたのです。妖怪たちは今天界に向かつて侵攻を企んでいます。天界に続くこのような桃源郷はいくらでもあるのですが、番人がいてその侵入を防いでいたのです。お前は今からその道を通り、天界へ行きなさい。そして、援軍を頼んで來るのであります。それ

までは私が妖怪を食い止めます。よろしいか

思嵐は意味が分からず、呆けて何度も頭を縦に振った。

天界へ続く道？ 天界とは本当に存在したのか？ だが、師父は確かに仙術に通じておられる。では。では。では。それは真実？
「裏手に符を張った隧道があつたでしょう。あの符を剥がして、進みなさい。段々道は険しくなり、最後にはほとんど垂直の道を這い登らねばなりません」

はつと師父は天を仰いだ。

思嵐もつられて、

「ひー！」

いた。また、紺碧の中には黒い蟲のようなものが浮かび、段々との黒点は大きさを増して行く。

「急ぎなさい！ 走れ！！！！」

師父の怒声に、思嵐は飛び跳ねるよう立ち上がり、走り出した。

思嵐は汗で滑りながら、どうにか幾重にも張られた符を筆るよるに剥ぎ取つて、洞穴に飛び込んだ。

ごお、と内側から唸るような風が吹きつけた。それは侵入者を威嚇する獣の咆哮に似ていた。

どこまでも続く闇の道は、いつたん呑み込まれたら一度と田の光のもとに帰れるとは思われなかつた。

ପ୍ରକାଶକ ମହିନେ -

再び恐ろしい豪風が吹きつけた。思嵐の頤^{おとがい}を大粒の汗が滑り落ちた。限界まで目を見開き、思嵐は岩肌に手をかけ、竦む足で中を覗き込んだ。

「師父……！」

呟いて、中に飛び込んだ。転げそうになりながら、必死に走った。

いつの間にか脅は脱げ、裸足で洞穴を走る。血が噴出し、泪で両頬は濡れた。

はやく。はやく！　はやく！

一刻も早く、辿り着かねば！

師父をお助けしなければ。

また、私は逃げるのか。一人だけ、逃れるのか！

今度こそ、助けなければ。

死んだ。たくさんの人人が死んだ。殺された。どうか、今度こそ救わせ給え。

天よ、どうか師父を殺さないでくれ！

洞穴はどんどん道幅が狭くなり、急勾配になつて行く。師父のおつしゃつた通り、井戸の底から出口を目指すように垂直の道を這い登る。

まるで、断崖絶壁だわ。

ぼたぼたと汗が滑り落ちた。どうにか岩の突き出た部分を掴み、足の指で尖った壁面を挟み、支えた体を上へと押し上げる。爪が一枚、また一枚と剥がれ、指先がじんじんと熱を発して激痛が走る。汗で髪が頬に額に張り付き、目が酷く痛んだ。

かえりたい。ひきかえし、たい。

逃げるのか。師父のお言葉を口実に私はまた一人安全な場所に逃げるのか。

どうなのだ。

自問自答しながら、両手両足を使って、必死に筋肉を登った。痛みを凌駕する何かが思慮を追い立てた。

時間がどれほど経つたのか、感覚が麻痺して分からなかつた。

ただしんどくて、水が一口でもいいから欲しくてたまらなかつた。水分は失われていく一方で、尿意すらもはや起こらなかつた。

苦しい。辛い。もう厭だ。まだ光は見えない。暗い。真っ暗だ。どこまでも続く永劫の闇。自分も闇に取り込まれる。腕がだるい。全身が鉛のように重い。もう、腕が上がらない。足の指がぬるぬるとして、滑り落ちそうになる。

死ぬのか。今、この機械的に動く手を止めて、力を抜けば、急転直下して底まで転げ落ち、首の骨を折つて楽に死ぬことが出来るだろづ。

安樂な方へと思考が流れる。必死に唇を噛んで、鉄鎧にも似た血の味で正氣づく。

……はつ……はつ……はつ

音が聞こえる。自分の乱れた息の音だとよつやく気がついた。果

たしてまともに呼吸をしているのかも分からぬ。腕が麻痺して毛細血管が破裂したのが分かつた。きっと広範囲な痣だらけだろう。「田と見られない酷いありさまだろう。鋭い岩が思嵐の肌を切り裂き、爪は一枚も残つていなかつた。足の指で切つ先鋭い岩肌を掴んで、右手を上げ、左手で押し上げ、よじ登る。

足の裏を何度も切つた。もうどれだけ血が流れたのか分からない。血塗れだろう。土と血で固まって、また同じ箇所を切る。ずぐずぐと突き抜ける痛みに頭が正氣づき、激痛を感じていた筈なのに、いつの間にかそれすらも感じなくなつていて。完全に神経が麻痺していた。

泪と土埃と汗が混ざつて、目が霞む。体液がどんどん失われて行く。吐き気と眩暈で気が狂う。

もう腕が上がりません。脚ががくがくと震えて、言つ事を聞かないのです。

まだ闇の中。どこまで行つてもどこまで行つても、暗闇が深闊として広がるだけ。出口など、あるの? 本当にここから出られるの? 今更、降りることなど不可能ではないか。進むしかない。だが、手足が、もう言つ事を聞かない。

いつまで行けばいいのだろう。感覚がない。お願い。助けて。苦しいよ。母さん。高蘭。どうして。私ばかり、こんな目に合わなければならぬの? どうして静かに暮らせないの? もう厭だ。も

う厭。助けて。助けて！

師父・・・・・師父！

はつと田を見張った。泪はもう枯れていた。

師父……！

助けなければ。師父のおっしゃるよつ、援軍を呼ばなれば。

静止していた身体が、再び動き出す。思風は妄執と成り果てて、ただひたすら手足を動かし続けた。

暗闇に慣れ、思風の視力は失われていた。

永遠にも近い時間を過ごし、やがてぽつんと針穴のような光の点が見えて来た時にも、思風は咄嗟にそれに気がつくことは出来なかつた。

光。

それは天人の光臨のように溢れ出し、草草の青い匂いが立ち込め、涼やかな清風が一陣洞穴にその芳香を運んだ。

思風の鼻先をその風が掠めた。

ひかりだ。

洪水のように光が溢れる。

眩しくて眩しくて、田を開けてはいられなかつた。

思嵐の左手が、宙をあおいだ。掘むものがなかつた。

慌てて右手は周囲を彷徨い、濡れた何かを掘んだ。

黒土と草。

出口だつた。

終着点、だつた。

思嵐の田に、枯れた筈の泪が溢れた。

草原か、それとも花畠か。

萎えた力を振り絞つて、思嵐は穴から外へ這い出した。

「これは。

一面の花畠、草の瑞々しい青。

本当に、天界だろうか。

ついに自分は辿り着いたのだ。

「まだ……」

まだ、駄目だ。

唾すら出でこなくなつた口腔は、ひゅーといつ掠れた音を漏らし、声にはならなかつた。

血塗れの手足で、思風は再び立つた。木立の向こうに、水晶で囲まれた塀が見えた。

いかなければ。

あそこまで、辿り着かなれば。援軍を、呼ばなければ。

思風は狂人めいたきらきらと暗く光る眼で、足を引きずつて歩き出した。その後には、点々と血の痕が残された。

今にも崩れ落ちて、倒れ伏してしまいそうだ。一度地面に膝をついたら、一度と起き上がりがないだろうと思嵐は本能的に心得ていた。それゆえ、決して歩みを止めるつもりはなかつた。倒れ伏した時は、自分が短い生涯を閉じる時だと。

その時、思嵐という、あまり幸福ではない人生を送った少女その体の奥に燃え盛る命の青い炎は本来すでに燃え尽きていたのかもしれない。暗闇の中を延々と、それこそ永劫に思われる時間を経て断崖絶壁を登りつめた。爪は剥がれち、足の裏はずたずたに切り裂かれた。人間の限界を超えた運動量は、思嵐から全ての生命力を奪い、その姿を狂人めいた異形のものに貶めていた。筋肉は断裂して、毛細血管の破裂のため、全身薄青く腫れあがるまでになり、血のこびり付いた乱れ髪はもはや白髪と化した。

思嵐を動かしていたのは狂氣から滴り落ちる涙執だった。今までの理不尽な人生に対するやり場のない憤怒と、自分を救ってくれた師を、今度はお助けしなければならないという確かな使命感が思嵐の木偶の坊じみた瘦身をひたすら前へと突き動かして止まなかつた。

血痕を残しながら、思嵐はほとんど視力が失われ、明暗しか感知出来ない眼を見開き、いつ事切れてもおかしくないばらの体で歩き続けた。かすかな芳香が風に乗つて思嵐の鼻腔をくすぐつた。きっとここは貴いお方の果樹園なのだろうと思い、不法侵入している自分を酷く惨めで取り返しよのない愚物のように感じた。それでもいい。何でもいいからと見えない視界を手探りで歩き続ける。初めて日の光を目にした土竜同然に、深い穴蔵から出て来た時、思

嵐の視力はすっかり奪われ、むしろ失われていた。しかし最後、網膜にしかと焼きついた、あの水晶宮に辿り着かなければならぬ。あそこには辿り着けば、きっと何となる。それだけの思いでもう一歩も歩けないと思つ足を、前へ前へと押しやる。自分の命を削るようにして、あの水晶宮を手指す。

そのような幽鬼じみた思嵐の姿を目にした者が、妖怪と見誤つて悲鳴を上げたのは当然の成り行きであつたかもしれない。

「ひ」とかすかな女の悲鳴に、思嵐の鼓膜はぶるりと震動し、驚きのあまり足がその場に縫い付けられた。

「あれは一体」

「妖怪か！」

戦く声は複数。思嵐の方が恐慌状態に陥り、よつてたかつて暴行を受けるのではないかという恐怖に身が竦んだ。

「ものが、よくみえない。」

何をされても、抵抗など出来る筈もない。乳色に白濁した視界の上、体力の限界を感じていた。腕一本上がらないだろう。どうしたらいいのか分からなかつた。恐ろしさのあまり、進むことも退くことも出来ずに、思嵐はただ呆然と立ち尽くして相手の出方を伺つた。

「いいえ、違います」

清風に乗る凜とした聲音に、声の聞こえて来た方向に首を巡らした。木々の間にぼんやりとした人影が見えた。赤い着物を着ている

ようになれた。赤の塊にしか見えなかつた。

その人は裳裾をさつと払い、しなやかな中にも堂々とした足取りで近づいて来る。

「その娘は妖怪ではないでしょ。尋常ではない身なりですが、下界の人間のようですね。そなたは、一体どこから参つたのです？」

とても逆らひの出来そうにない詰問口調に思風は瞠目したまま返事をすることが出来なかつた。どんなに頑張つても声が出ないのだった。韁帯が剥がれ落ちてしまつたのではないかと自分でも疑つた。もづ自分は声すら出ないのか。どうしてそれで助けを求められようか。口惜しさ、不甲斐無さに焦燥感ばかりが募る。

相手は思風が黙秘したと思つたのか、じろじろと值踏みするけはいがあつた。

「何ゆえ天界に？ そなたは仙の修行をしていませんね。どのようにしてここまで登つて」

女は言葉を止めた。思風が必死に声を絞り出そうとして、ひゅうひゅうと空氣の漏れる音しか出ないことに気がついたのだ。その上、命の炎はもはや風前の灯火であつた。何故この娘がまだ生きて動いているのか、その方が不思議だと高位の女仙は眉を潜める。

「仕方ありません。西王母様のお達しで緒神・諸仏を招く『蟠桃勝会』のために積んでいたのですが、これを一つそなたに授けて上げましょ。」

せこおつぎ。

信仰の対象でありながら、現実の存在としてほゞ遠てその確かな名前に、思嵐は田を見開いた。

同時に瑞々しい芳香が立ち上り、思嵐の鱗割れた唇に冷たくて甘い何かが押し付けられた。

「お食べなさい」

言われるまでもなかつた。思嵐は与えられたものを貪り食つた。すぐに效能は現れた。体の芯に火が灯り、血汐は熱く脈打ち、盲田の世界から色の奔流が押し寄せた。

「……ひ……あ……」

「無理に声を出す」とはあつません。事情はおこおこ聞きましょう」

女仙は遮つたが、思嵐には血を吐いてもいいから、今伝えなければならぬことがあつた。

「…………う、か、せこおつぼ、さま、こ、おつたえ、くださ、い。こでん、どうかん、が、ようかい、こ、おそわれ、まし、た」

どうか、お助け下せ。援軍を

それだけ伝えきつたか分からぬ内に、思嵐の意識は容易く暗黒に呑まれた。

体を蝕む悪夢。じくじくと痛む指先を見ると、爪が全部剥がれ落ちて赤い血がこびりついている。ふと泣き声が聞こえて背後を振り返れば、闇色の中に白い布に包まれた何かが埋もれていた。

おぎやあ、おぎやああ、おぎやあああ。

耳鳴りのする薄氣味悪いそれは、神経を逆撫でして止まず、いつも黒々と胸を塞いで吐き氣のする色に塗り潰す。

ああ、わたしは、これを知っている。

裸足のまま歩き出す。声は大きくなる。鼓膜を揺さぶり、悪夢を呼び覚ます。

足がずぶりと地面にのめり込んだ。

「ひつ」

足首を誰かが掴んでいる。血塗れた腕がたくさん地面から突き出して、怨みがましく揺れる。お前だけ、助かった。お前だけ、助かつた。一人だけ。

『めんなさい、許して下さい。

赤子の声がいつそう大きくなり、むせたように時折引つ繰り返りながら狂ったみたいに泣き叫ぶ。もう、許して。しゃおすい、あん

たを故意に死なせたわけじゃないのよ！

絶叫して耳を塞ぎ、つぶれ悲鳴を遮断するよつ膝をついて縮こまる。

はたり、と羽ばたきがして、長い影が落ちた。

『それ以上。壁に呂めつたたり』

『ぐちゅって潰れちゃつた！』

『今度は、あなたの番ね！』

『逃げろ』

『うーん、うーん、うーん』

悲鳴とともに、がばっと上半身を起こした。

「……はあ、はあ」

忙しない息を吐きながら、自分が強く掛け布団を握り締めていることに気がついた。

「いは……？」

そこは見たこともない白い美しい室^{へや}だった。丸窓から日の光が差し込む。臥櫈に寝かされ、思嵐はぼんやりとした面持ちで、いつの間にか目^の摘んだ薄縄に着替えさせられていることに気づき、驚いて襟元を引っ張った。

「お気づきになられましたか？」

涼やかな聲音に、指先が固まる。慌てて振り仰ぐと、そこには貴人に仕える侍女のような格好をした女性がいて、弦首の水差しを持つたまま優しく微笑んでいた。

「あ、あの」

「咽が渴いていらっしゃるでしょう？　お水はいりませんか？」

言われて、酷く咽が乾いていることに気づき、次の瞬間には色と音の奔流が怒濤のうねりとなつて決壊した。

「ま、待ってください　　いは、いは天界ですか　　！？」

侍女の女性は睛を瞬かせ、思嵐は余程自分が氣狂いじみた台詞を口走つたと後悔に襲われた。

天界　　。馬鹿げているにも程がある。

しかし、侍女は小首を傾げて、

「確かにここは天界です。西王母さまの管理なれる崑崙の一角です
が」

全ての空白が今ぴたりと埋め合わされた。思嵐は髪を振り乱して、侍女に取り縋つた。

「お、お願ひです！ 地上の壇天道觀が妖怪の大群に襲われたのです！ どうか、援軍を、援軍を送つて下さい！ 師父が 師父が殺されてしまつ！」

「さや、ま、待ちなさい。私にそのようなことを言われても困ります！」

「ではどなたに申し上げたらよこのですか？」

必死の形相で取り縋り、思嵐は、はたと思いつ出した。

「そうだ、西王母さま 西王母さまに会わせて下さって お願ひします、お願ひします！」

「何を……西王母さまは早々下界の者があ会い出来るお方では、

侍女が言いかけたのを、「お待ちなさい」と聞き覚えのある声が遮つた。

「あ、九天玄女さま」

赤い表衣に、凜とした聲音 思嵐はこの九天玄女と呼ばれた女

仙が、妖怪と間違われた自分を助けてくれた方だと気づいた。

「その者の田が覚めたらすぐに報告せよと申し付けたでしょ」

「申し訳ありません」

「よりしご、下界から来た少女よ、そなたの願いを聞き届けましょう。西王母さまがお会いになるそうです。ついて来なさい」

「あ……はい、ありがとうございます」

思風が慌てて寝台を降りると、せめて身なりをきちんと整えなさいといわれ、侍女が着替えを手伝ってくれた。急く心を押さえて、思風は一時死にかけたのが嘘のように足取りもしっかりと九天玄女と呼ばれた女仙の後をついていった。

宮殿楼閣に張り巡らされた回廊や復道（二階建ての回廊）を通り抜け、ようやく辿りついた先が謁見の間であった。

額の真ん中から左右に分けた髪に、真珠を幾重にも垂らした髪飾り、黄金の腕輪、耳飾り。首から長く赤い布を垂らし、竜や瑞兆の絵柄を丹念に縫い取った豪奢な表衣を着込んだ女性が羽毛扇を持ち、

ゆつたりと玉座に腰掛けていた。

柔らかに微笑むその類稀なる母性の象徴、神聖の零れ落ちる姿は、誰に聞かずとも天界の西を治める西王母と知れた。呆然と見上げていた思嵐は、

「聞きましたよ、そなたの身に何があつたのか」

鈴を転がしたような美声に思わず雷打たれたかの如くその場にひれ伏していた。

がちがちと体が震えて止まず、天上の御方とはこれほどまでに下界の人間とは異なるのかとひたすら額を床になすりつけた。

「これ、そのようにしていては何も物が言えぬでしょう」

「お待ちなさい、そのように責めたてたものではありません。娘よ、どうか顔を上げてちょうだい。そなたは下界に援軍を求めたそうですね。何があつたのか、教えてはくれませんか?」

慈愛そのものを感じさせる聲音に、思嵐は恐れ戦きながらようやく面を上げた。震える声で奏上を始め、何故援軍を求めたのか、その訳を切々と訴えた。

全てを聞き終えた西王母と九天玄女は互いに顔を見合させ、かすかに痛ましげな、それでいて諦観を漂わせる嘆息をした。

「全て分かりました　しかし、そなたの願いを聞き届けることは敵いません」

「な、何故ですか……！？」

一瞬不敬も忘れて思嵐は悲鳴じみた抗議の声を上げた。これには九天玄女が答えた。

「下界と天界では時の流れが違います。そなたには酷なようですが、そなたが道観を出たのがおよそ数日前と感じているのなら、それは大きな勘違いです。おそらく、隧道を登り始めてから、およそ十年以上の歳月が過ぎているでしょう。もはや援軍を出しても無駄です」

「そんな、馬鹿な……」

思嵐も隧道を登りながら、永遠に近い時間を感じてはいたが、それは暗闇のなせる業で、せいぜい数日るものと思い込んでいた。でなければ、飲まず食わずの強行軍で、思嵐はとっくに死んでいたはずである。

「そなたが登つたのは、ただの隧道ではありません。そなたは、知らずして巌滄山の内部を登つて來たのです」

「巌滄山……！？」

「そうです。巌滄山は、三層、あるいは九層からなる靈山です。これを登れば神祕的な力を授かり、頂上にまで登れば仙人として天下界に迎え入れられる資格を得ることが出来るのです」

九天玄女は思嵐の驚愕した顔を見て、もう少し詳しく説明しますようと言つた。

「巌滄山は、下部は大きな丘で、涼風の山と称し、この太丘に登つ

ただけでも不死を得ることが出来ます。太丘の中心には、天に通ずる九層の城楼が聳え立ち、その高さ一万一千余丈で、天柱とも称します。この太丘より倍の高さの位置を県圃と称し、さらにその倍の高さの所が天庭で、天神の住まつてゐる所です。天帝の下都があり、仙女を統べる西王母さまが住まわれ、天神地神が祀り事を行つ場所なのです

「あ、あの、それでは、私は……」

「更に言つのはそなたにとつて酷な話ですが、眞実を告げましよう。そなたはもう死んでいるのです」

何を、と思嵐の咽は奇妙な具合に貼りついて声を出す」とが出来なかつた。

「多少空間を歪めた上で短縮されていたとはいへ、崑崙山内部を登るのは、修行を積んだ道士でも非常に困難を極めます。そなたは崑崙山を登る内に、限界まで酷使した肉体を脱ぎ捨て、魂魄だけの姿となつて頂上まで達したのです。一度死んだ後で、人間の姿ではなく、魂魄が抜け出して、魂魄だけが仙人になつたものを尸解仙しかいせんといふのですが、そなたの場合これに当てはまるようですね」

淡々と事実を告げられ、思嵐は恐慌の内に激しく頭を回転させた。

「死んだ　？　私が　？」

そんな、馬鹿な。だつて、私は生きているのに。こんなにも、こんなにも、苦しくて辛くて痛くていつそ死んでしまいたいと涙も枯れ果てて、それでもなお生き延びたいと浅ましく爪を立ててここまで登つて來たのに。

それでも、もう、死んでいるといふのか、この女仙は 。

「では、では……下界の壺天道觀はどうなつたとおっしゃるのですか……もう、十年以上も経つていただなんて、それでは……それは、師父はどうなつたというのですか……」

尋ねながら、次第に思風は体の震えが止まなくなつて來た。

違う、私はこんなこと聞きたいわけじゃない。十年以上も月日が過ぎて、あの切迫した状況でその後どうなつたかなど、誰にでも分かることではないか。

「残念ですが……そなたが氣を失つた後、調べさせましたが、壺天道觀とやらは現在荒廃して誰も棲んではおらぬようです……そもそも、あのような隧道は、一人しか通れぬようにしてありましたし、そなたが入つた後自動的に再び封鎖されました。そなたの師が妖怪の大群に襲われたというのなら、おそらく……」

「……隧道は、一人、しか、通れない……？」

は、と九天玄女は口を噤んだが、もはや遅かつた。

「お待ち下さい。それでは、師父は、私を逃がさなければ、師父は……お一人で、天界に逃れる事が出来たのですか……」

限界まで田を見開き、真っ白になつた唇を戦慄かせた。

「私は、また……」

また、人に助けられた。人の命を踏み台にして、また助かつた。
ぱたぱたと冷たい床に滴が滑り落ち、耐え切れなくなつて膝をがくんとついた。

一体自分は何を泣いているのだろう。泣けば許されるともいうのだろうか。人の同情を買う気か。それとも、泣く事で自分に贖罪を強いて許された気持ちになりたいだけか。

また、助かるべき人が、助からなかつた……

あんなにも必死で隧道を登りつめたが、全部無駄だつた。私は、生かされただけだつた。

今度こそ、助けたかつた。

私が。

私が。

私が。

私が、人を、恩人を、師父を助けたかつたのだ。

それなのに、再び助けられたのは、私だつた。

号泣することなど、許せなかつた。もういい加減にしたかつた。

「娘よ、そなたはこれからどうしますか？」

西王母が柔らかに問い合わせる。

「天界に留まり、そなたの師父とやらの代わりに、天界で地上の人々を守る仕事をしてはみませぬか？ それだけの力を、そなたは崑崙山を這い登ることで得たのですよ。それは、誇りに思つてよいのですよ」

天界で、人々を守護する役目に就く その言葉に、思風は強く頷いていた。

助けられなかつた人々の代わりに、今度こそ誰かを救いたかつた。いいえ、違う……救われるのは、自分自身だ。

「娘よ、そなたの名前は ？」

聞かれて、思風は咄嗟に押し黙り、次の瞬間には面を上げてこう答えていた。

「 高蘭」

「高蘭、です

何故そのように答えたのか分からなかつた。しかし、すぐに気がついた。高蘭の名前には勇気が宿つているのだ。自分のような者が貴女の名前を詐称するなど、とてもおこがましくて、笑ってしまうけれど……お願いです。

力を貸して、高蘭。

名前に縋つて、これから生き方を変えたい。だから、『めんなさい』。この行為を許して下さい。

その時より、思風は高蘭となつた。

ナタク三太子

崑崙山より百万里は離れた地、その上空に豆粒を並べたかのように黒い大軍があつた。天界の編成した天軍統帥府より、今回の戦いには二十八宿の内、北方の玄武七宿の星君が派遣された他、かつて孫悟空なる大妖が天界を荒らした折、玉帝に、降魔大元帥、に命じられた托塔李天王の三男、ナタク三太子とそつそつたる顔ぶれである。相対するるのは空中の戦闘を得意とする妖怪の軍団。

両軍は数刻前から互いの得物を交えてぶつかり、いまや敵味方入り乱れて戦況は麻の如く混迷していた。

その中に、思嵐の姿はあつた。思嵐は高蘭と名乗つてより、玉綴りの鎧を着込み、好んで戦場に出た。

今も腰に下げた刀を右手に抜き放ち、妖怪の一の腕を容赦無く一刀の元に斬り下げる。妖怪のくせに赤いしぶきが宙に大輪の花を咲かせ、斬り捨てられた腕は鮮やかな放物線を描いて、瞬く間に交戦する両軍の間に見えなくなる。片腕を失つたまま、断末魔の悲鳴を上げて下界に落ちて行く妖怪の姿に、思嵐は冷やかな一瞥を投げ、すぐに別の獲物を見つけては急降下した。

あれは。

視線を上げ、空中に留まつて目を眇めた。艶やな女人の背中に生やされた翼は、かつて生家のあつた邑を黒い炎舞の一夜に天を覆い尽くした異形のもの。夜行遊女である。思嵐の胸中に戦慄にも似た、冷たく昂揚する何かがざわざわと蟲のように這い登る。激怒

のあまり、血肉が沸騰するのが分かった。

まさか、このよつたな戦場で見えるとは……かつての無力に逃げ回った自分ではない。

思風はざわらざわと憎悪に濡れた睛で壯絶な笑みに口角を歪めた。

串刺しにして焼き鳥にしてやる。

回じようじに、ぐぢゃぐぢゃにしてやる。

暗い悦びに、知らず思風は笑っていた。

比礼を清風たなびかせ、隙だらけとも見える思風に、別の妖怪が三四連携し好機とばかり襲いかかる。

思風は振り返りもせず、抜き身の引っさげた血刀を、手首を返して斜め後ろに突き刺した。確かな手応えとともに、反り返つて刀ごと落ちて行くのを惜しむこともなく、まずは一匹と數え上げる。今度は間合いを取つて、一端長得物で妖怪どもを薙ぎ払う。陣形が崩れたところで前方の妖怪めがけて錫杖の九環を鳴らして脳天を打ち据え、頭蓋骨を脳漿が紺碧にぶちまけるよう粉々に碎く。

「それで一匹。」

笑いが止まらない。全身返り血を浴びるのも頓着せず、更にはそのまま背後に錫杖の先端部を突き出し、三四連の胴を貫いて串刺しこする。

するりと肉を巻き込んで抜き出すと、絶叫が尾を引くのも無視し

て、思嵐は味方の陣を離れ、夜行遊女を目指した。

「待て！」

肩口を引いたものがあり、思嵐は肘を突き出して跳ね上げ、躊躇いもせず顎を碎いた。

「ぐああっ」

「馬鹿者、味方相手に何をするー！」

落下しかけた天兵を別の者が慌てて拾い上げ、抗議の声を上げた。

「邪魔をするからだ」

憎々しげに吐き捨てて、夜行遊女を追おうとする思嵐を、今度は一兵卒とは違う、将軍格の者が前に飛び出して、仙力甚大なる降妖杵をさつと水平に渡した。

「勝手は許さん！　陣に戻れ！」

托塔李天王が第三子、ナタク太子である。少年の姿でありながら、瘦身に不似合いな六種の武器をまとい、五百年前には天界を乱した孫悟空なる大妖相手に父の托塔李天王とともに三壇海会大神として討伐に赴いた戦闘神であった。

思嵐は少年の姿をした戦闘神を射殺しかねない勢いで睨み据えた。

「何ゆえ邪魔立てをなさるか」

「天軍の規律を乱すことはまかりならん！
深追いはせず、所属部隊に戻れ！」

それは「

思嵐は音もなく九環の錫杖を空気に切つて下げ、戦意喪失の構えを見せて、

「わけませんなあつ」

爆発的な力で錫杖を払つて突き入れ、ナタク太子の脇を否妻のような素早さで抜けた。

背後で呼び縋る声がしたが、完全に無視した。目指すは前方の夜行遊女のみ。

斬り殺してやる。

目も眩む怒りと興奮で、思嵐の息は荒くなつた。敵討ちだ。どんな妖怪を血祭りにあげるより、夜行遊女の方がずっといい。羽根を赤で染め上げるほど胸のすくものはない。あの女怪どもを皆殺しそなれば、私は救われない。

待てつ

ナタク太子は両足に装備した火輪を飛ばして思風に追い縋り、斬
妖剣を突きつけた。

「待たぬか、この馬鹿者めがつ」

「邪魔立てするかあああああああああああああつ」

振り向きざまに見境なく錫杖を振るつた思嵐の脇腹を、ナタク太子は降妖杵で打ち据えた。手加減したとはいえ、戦闘神である少年の一撃をまともにくらつて、思嵐は息をつめた。

「少しは冷静にならんか！　お前の身勝手な行動が、仲間を危険に晒すのだ！　そのようなことも分からんのか、下界上がりの道理も弁えぬ女が！」

怒声を浴びせられ、思嵐は咽元に込み上げた熱い塊を無理矢理飲み下した。

うねれらに、何が分かる。

視界が真っ白に焼け付くほどの怒りを、お前は知っているのか。無力の絶望を知っているのか。狩人に追われる野兎なら、まだ逃げる足も持つているだろう。しかし、私達、下界の人間が、妖怪相手に何を抵抗出来るというのか。地べたに這いつくばつて、命乞いして、それでも簡単に殺されて、爆笑交じりに頭を踏みつけられて、壁に叩きつけられ、潰され、食われ、逃げても逃げても、遊びにもならないと追われて翻り殺される。

その絶大なる恐怖を知っているのか。

大事な人も見殺しにして、それでもなお自分の命だけは助かりたいと思う浅ましい心を知っているのか。どれほど、どれほど、下界の人間が、命をただつなぐために自尊心も倫理も投げ出し、踏み躡

つてでも生き延びたいと願い、その羞恥に嘆ぐのか。

勇ましく戦つて命散ることすら、かつての私には許されなかつた。私は、戦う手段を何一つ持つていなかつたのだ。石を投げることしか出来ない。それでなければ、ただ逃げるだけ。

それが、どんなに惨めで悔しくて、恐ろしいのか。

恐くて。恐くて。本当に恐ろしくて。

どれほど、惨めだつたか。

今でも、思い出すだけで、涙が勝手に滲んで、目の奥が熱くなる。

お前達、天界の者は生まれながら特別な力に恵まれて、その恩恵を恩恵とも思わず、ただ安然に過ごして。

手ぬるい。

「手ぬるいのですよ、ナタク太子」

「何を」

思風は得物を下げ、皮肉めいた薄ら笑いを浮かべた。

「妖怪など、天界の大軍を出して、さつもと根絶してしまえばよいのです。道理やら倫理やら振りかざして、天上の御方のやり方ときたら手ぬる過ぎて反吐が出る。一匹でも妖怪を殺さねば、何も抵抗する術を持たぬ下界の者がその数十倍死ぬのですよ……何の痛みも知らないで、ああだこうだとまともな理屈ばかりの貴方がたには正

直失望致しました」

「だから、お前が暴走して奴等を殺すというのか」

「ええ、『J覧の通りです』

「お前は規律を乱し、必要以上に血を被り過ぎる」

「はー、必要以上とおっしゃいますか」

思わず咽が引き攣れて、冷たい大気に哄笑が爆発する。

何という、溝なのだ。

下界の者と、天界の者では、『J』まで認識の差異があるのか。

これでは、我々が救われるわけなどないではないか。

「何を笑う」

「日々妖怪に殺戮される下界の者からすれば、必要以上も以下もありませんよ。だから貴方がたは手ぬるいと申し上げたのです。天が地を管理するというのなら、がたがた抜かさず、一匹でも妖怪を殺したいががです……」

戦闘神のくせに矛盾する理屈をこねるナタク太子がおかしくて、皮肉げに咽を鳴らすと、彼は短く嘆息して指を鳴らした。

「虚星君、壁星君、直ちにこの女仙を拘禁し、天界に送還せよ」

「承りました」

「お任せを」

北斗七星君の内、虚星君と壁星君が進み出て、嘲笑を浮かべたままの思嵐を束縛した。そのまま鹿嶺山へと連行する。

それを見送つて、少年神は武将の面持ちを崩し、疲労氣味に頭をがりがりとかいた。

「全く、最近軍を乱す女仙の噂を聞いてはいたが…………あれか…………そ
う言えば、名前を聞いていなかつたな…………」

「うーん、何とか、らん、といつ名前だつたよ……まあ、どう
でもいいか。」

ナタク太子は咳いて、背後から忍び寄つた妖怪を切妖剣で紙人形でも破り裂くように斬り捨て、その動きを止めずに考え込みながら別の妖怪の頭部をざん、と薙ぎ払つた。赤い切り口を晒した首級は子供が放り投げたお手玉のように高く空中に舞い上がり、どこぞの下界へと落ちて行く。

「全く、あの無法者ぶりは、五百年前の石猿めを思い出すぞ…………」

あれは、石から生まれた妖怪のくせに、斎天大聖を名乗つた匹夫であつたが、と零して、瞬く間にナタク太子は両手にいっぱいの妖怪を屠つていった。

「そう、あれは孫悟空といった」

今は、釈迦の計らいで両界山に封じられているところが……

もう少しで独房に入れられるところを、九天玄女の取り成しで、仮処分までに少しほとぎすをせよ、と自宅軟禁扱いを受けた思風は、籬の椅子に腰かけ、ぼんやりと水墨画のように滲む外の風景に見蕩れていた。

鳴淵山の頂上に当たる、玉帝のしろしめす天庭、西の一角である。

鳴淵山は、思風が必死に内部を這い登つて来たように、大地から雲天までの位相を天柱でつないでいる。あくまで下界と天界は延長上有つてつながっているのに、どうしてこれほどまでに何もかもが全くといっていいくらい違うのだろうか。城楼も樹木も水も全て澄んで渡り、金銀宝石類で出来ているが、地上のものと何ら形が変わるものではない。どこぞの地上かもしれないと思いながら、決定的に違うのは、その空氣の色だ。こんなにも天界は平和で、思風の嗅ぎなれた恐怖と血臭は全くしない。ここは、下界ではありえない

あの下界の泥臭い絶望の色も音もどこにもなくて、生きている気がしない。

憎しみが薄れて行くのを、思風は何より畏れて、戦場に出た。相変わらず異形のものたちへ恐怖を覚えながら、同時に妖怪を血祭りに上げれば、天界で浄化された指先が再び血の色で汚されれば、むしろ自分の罪は洗い落とされて行くような気がした。新たな業を背負つことを知りながら、戦場の戦慄は何より思風の乱れた心を慰撫して止まなかつた。

ああ、また桃の香り……

桃の芳香に思風は目を眇めた。今、桃の香りは今宮殿中に満ち満ちてゐる……

今年も、例年通り『蟠桃勝会』が催される。

天界では毎年諸神・諸仏を招いて『蟠桃勝会』といつ夏が催される慣わしであるが、これに使用される蟠桃は王母管理下の蟠桃園にある。

あれは、昨年だったか。

思風が天庭に辿りつき、蟠桃園をさ迷い歩いて九天玄女に保護されたのは……

ぱたぱたと軽い音がして、思風の室の前で止まった。

「高蘭!」

口から額の眩しい少女の顔がのぞいて、物思にて泣んでいた思風は面を上げた。

高蘭。

私の名前ではない。

その名前は、当初の目的を違え、勇氣よりも、贖罪を思い起した。

偽りの名前で償わなければならない。忘れないために。生かされたために。

「太真王夫人」

夫人、というより、やはり娘子むすめと呼んだ方が良さそうな可愛らし
い少女である。西王母が目に入れても痛くないほど可愛がり、天界
の仙女たち誰もが慈しんだ王母の末娘であった。まだ髪を結い上げ
ることもせず、梳つたまま背に流しており、永遠の少女性に、無垢
の象徴を感じさせる。それは、かつて高蘭、と呼んだあの少女を思
い起させた。

「また戦に出たのですってね」

「ええ。無茶をしましたので、自宅軟禁です。自宅おじやといつても、王
母さまに宮殿の一角をお貸し頂いているだけですが」

「ひっすら笑うと、太真是にこりと無邪氣に微笑んだ。

「まあ、高蘭はもうわたくしたちの身内も同然なのよ。遠慮は無用
です。ねえ、高蘭はどうしてあのような恐ろしい妖怪相手に戦うの
？ わたくしは、高蘭が恐ろしい目にあうのも、痛い目にあうのも
嫌です。次はもう出ていかないで」

「それは無理です。私は、天界を守護する役目に就いておりますか
ら……」

何より、思嵐は天界の清浄さを嫌忌していた。血塗れた自分には、
居心地が悪い。いいえ、吐き気すらする。この、太真のよつこ

「やつぱり、お願ひしても駄目なのね……」

下を向いて唇を噛み締めてしまつた太真に、思嵐は作り笑いを浮かべた。

「とんでもありません。太真王夫人にご心配頂いて、高蘭は大変うれしゅうござりますよ」

「本当?」

ぱつと笑顔になつて、頬を紅潮させる太真に、思嵐は不当圧迫のよみに吐き気が込み上げるのを堪えた。

「ええ、太真王夫人に気にかけていたくなんて、大変なことですもの。どうか、高蘭めのことはご心配なさらず。私の武運は太真王夫人に授かっているのですから」

よく言つ、この舌が……

太真のお願いなら、どんな厳しい女仙でも聞き入れてしまつ。無邪気なまゝ数百年という日月を過ごして行くだろう少女。

苛々する。何も知らず、追い掛け回されて斃り殺されるかもしれない恐怖も、涙が枯れ果てるほどの絶望も、燻りつづける憎悪の在り処も知らないまま、安寧に包まれて生きて行くのだ。

天界の中でも、一等安全で美しい場所にいる人。

泥水を啜つてでも生き延びたいという強烈な衝動を知らないで、何をせずとも与えられた永遠の時間を生きて行くひと。

誰か、死ぬほど傷つけてやればいいのに。

「あ、誰か来るわ……」

「ええ

回廊を渡るその足音は、柔らかな絹音ではなく、聞きなれた軍靴の音だった。

「失礼する」

は、と思風は田を見張った。

「ナタク三太子」

「まあ、ナタクさま」

思風と太真は同時に少年神の名を口にしていた。

わざわざ、ナタク三太子が一兵卒のもとに足を運ぶとは何事か、と思風は眉間に皺を寄せた。

ナタク太子はじりり、と幼い面立ちに似合わない苦味走った一警をくれ、多少決まり悪そうに手にした書状を広げた。

「お前の正式な処分が決まった。本来なら独房にぶち込むところだが、ある貴い方のお取り成しによつて、それは取り止めになつた。これからお前は受戒し、仏門に帰依して心根を改めよ。今から勿体無くも觀世音菩薩さまの預かりとなる」

「は、何を」「

觀世音菩薩といえれば、普陀落伽山に住む神通広大な処女神で、菩薩といつのは血の語りを遅らせて衆生を救わんとする慈悲の者である。

「口答えは許さん。すでに決定である」

「お待ちください、ナタクわま。高蘭は、どこかへ連れて行かれるのですか?」

泣き出しそうな太真の言葉に、ナタクはこの柔らかな少女が苦手なのか、う、と息をつめた。

「な、あー、うん。ええー、と、あれだ」

何のことかさっぱり要領を得ない。思嵐は内心、このナタク太子とやらは、五百年以上生きても、その少年の姿に意識を左右されるのだな、と呆れた。実際、老人の姿をしたものは老成しており、歳若い姿をしたものは、それ相応に未熟が多い。仙人や神と言えども、己の姿形に囚われ、惑わされるものらしい。

「つづり、つまり、王母さまの催される例の宴 蟠桃勝会に、觀世音菩薩さまもご招待されているのだ。その間、菩薩さまの後をついてその薰陶を受け、少しほ道理を身につけよ、といつことである」

「まあ」

太真は安堵に笑み綻んだ。

「よかつた、高蘭は諸仏・諸菩薩の住まわれるはるか西方浄土に連れて行かれるわけではないのですね。本当によかつた」

「あーうん、まあその通りである」

「高蘭、良かつたわね。觀世音菩薩をまと言えれば、大変お優しい、お美しい方で、ナタクさまの兄君であらせられる木叉さまが師事しているつしゃるそうです」

「う、うむ」

「ナタクさまの父上であらせられる托塔李天王さまは、『子息一人を仏門に帰依なさつて』いるのですわ。

『長男の金タクさまは釈迦如来の前部護法としてお仕えになり、次男の木叉さまは菩薩さまの高弟として恵岸行者といつあだ名を頂いたそうです』

「あー、まあ、兄上一人は、そういうことである」

「じゃあ、お前はどうなんだ。

思風はナタクを無遠慮に眺めた。兄一人は仏の高弟で、お前は戦場に赴く戦闘神か。ずいぶんな違いではないか。父・托塔李天王の名前の元となつた、その手に頂く五行の塔は、父に対するナタク太子の復讐心をおさめたものと詮づが……ビームまでが眞実なのやう。

「とにかく、高蘭とやら、お前は私について参れ。兄上の所まで案内、致す」

「觀世音菩薩さまにお仕えになる恵岸行者でいらっしゃいますか」

「そうである」

ナタク太子は一刻も早く太真の側から離れたいのか、挨拶もそこに踵を返した。

「では、失礼致します」

思嵐は残して行く太真を尊んで頭を下げ、ナタク太子の後を追つた。

額に月を頂いた知恵と機知に溢れる沙門姿の男こそ、ナタク三太子の次兄、木叉　またのあだ名を觀世音菩薩より頂いた、恵岸行者と言づ。

「よつじや、おいで下さった」

恵岸行者は涼やかに笑つて、弟ナタク三太子と思嵐を出迎えた。

「私は、ナタクの兄、木叉と申します。法名は恵岸行者を頂いております。あなたが高蘭殿ですね？」

「はい」

言葉少なに応えて、思嵐は辺りを見回す。丹水の流れる一角を与えられ、美しく整えられた部屋は奥に御簾が垂れ下がり、今は人のけはいはしない。

「觀世音菩薩さまは　？」

恵岸行者はふと笑み崩れた。

「もういらしていません」

「！？」

気づけば、無人のはずの御簾に、人影が映っていた。いや、人影というのは間違いだろう。光臨が御簾に映つていた、というのが正しい。

すると御簾が巻き上げられ、処女神觀世音菩薩が姿を現した。慈悲を垂れる菩薩の名の通り、柔軟に微笑んでいるが、西王母のような暖かな母性ではなく、あくまでほつそりとした流線美を描き、柳腰に蓮の花を携え、どこまでも透明性を称えている。西王母が大抵なら、觀世音菩薩は水そのものを感じさせた。

觀世音、菩薩……

瞠目し、思嵐はその尊い姿を呆然と見つめた。

白い薄絹の衣をまとい、条帛を垂らし、首や手足に金環をいくつも身につけたその姿は、衆生に祟められるに相応しい神々しさを内から放つ。

「の觀世音菩薩について、龜茲國は鳩摩羅什の訳した『法華經』に、觀音經の趣意をとつて、このようにある。

『善男子、もし無量百千万億の衆生あつて、もろもろの苦惱を受けんに、この觀世音菩薩の名を聞いて一心に名を称せば、觀世音菩薩、即座にその音声を観じ、皆解脱することを得せしめん』

「善男子」、とは釈迦如來がこのように觀音に呼びかけたのであるが、その姿は、三十三変化身に説かれるよつて性別変化自在とされる。

更にこの觀世音、とは「世の音を觀る」という意味で、衆生の声をよく観じ聞き、救濟の手を差し伸べる、大慈悲を表わしている。

思風はそつと心の内に唱えた。

一切諸法を觀察するに無礙自在で、一切衆生界を觀察してよくその苦を救うことが自在である……

一切の衆生の苦難を見抜かれ、その救濟は自在なる菩薩である。

「お呼びだしてしまいましたね……高蘭、あなたを待つていまし
た」

伏せていた睫毛が震え、切れ長の眼がすつと見開いた。悟りを得るもののは。静かに透明なそれは青睛の淨眼である。

「これが、菩薩！」

全て莊嚴。思風の内を水が流れる。菩薩の目とは、このよつとも

のなんか！

仙人とは全く異なる、別存在だと思風は慌てて膝をつき、頭を垂れた。

「顔をおあげなさい」

威圧するところはなく、思風は戦きながら面を上げる。しなやかな指先が思風の前髪を分けて額に触れ、つと何かを探り当たた。

「『穴』、『点』がありますね……」

思風はどうしたらよいのか分からず、その場に固まっていた。

「『点』は『穴』に転じ、『穴』は世界觀『空』を生ず。『穴』から抜け出なさい。赤い花びらのような印があります……そして、依り糸……」

正直、思風には何を言われているものやら、さっぱり分からなかつた。菩薩は更に何かを探り、清らかな溜息を吐いた。

「間違いありません、この者でしょ？」

「では、觀世音菩薩をね」

恵岸行者が心得たよつて頷いた。

「高蘭殿、少し話が込み入ります。ざつか、楽にお座り下さー」

「い、いえ、私は……」

「よろしいのです。ナタク、お前はもう帰りなさい」

振り返つて弟に促し、「い、嫌です、兄上、私も」とナタクが顔色を変えたので、觀世音菩薩は静かに優美な手を上げた。

「よろしくでしよう、ナタクにも自ずから関わりのある」と……全ては釈迦如来の導き……」

釈迦如来……？

思風は全ての仏の頂点にあるその名前を聞き、何ゆえか心ざわめいた。敷物の上に武人らしく胡座を搔いて座り、それぞれが楽な姿勢を取る。

惠岸行者は頷き、三千世界に渡る、時空を超える物語を始めた

遠く未来、人々の慕情と熱情をかき立てるその物語。正史には『大唐西域記』あるいは逸話となつた『西遊記』。

一人の僧が經典の解釈に疑問を抱き、その原典を求めるなど法に自分を忘れ、出国禁止の掟を破り、遠く天竺を目指した。西安（長安）からローマまで、約一万三千キロメートルを超えるシルクロード（絹の道）はあまりに危険なため、皇帝は中国人の出国を許可しなかつたのである。しかし、僧は密かに国境の玉門關を出て、足を踏み入れれば再びは生きて出られないとされるタクラマカン砂漠へとたち、僅かな供を引き連れて取經の旅に出る。

流砂を越え、弱水を渡り、異国の風に吹かれて朝に白い尾根を歩き、夜に氷の壁を宿とし、荒涼たる旅路の果てに、僧は取経の旅を果たす。

これ、法名玄奘、その雅号を『西遊記』においては三藏なり。

「我聞く。西域に玄奘三藏あり」

一天四海

惠岸行者は袈裟の懷より取り出した巻物を宙に投げて紐解いた。誰に支えられることもなく、解けた巻物は空中に固定されたまま、黄ばんだ絹布の白を晒している。一体、と息を呑んで見守る思嵐に、惠岸行者は心得た笑顔でするりと口ずさんだ。

「世界の中心に聖山・須弥山しゆみせんがあり、これは仏の住まう高嶺である」言葉尻に合わせて、白布の中央に、墨絵の山脈が滲むように浮かび上がった。須弥山、と流麗に書きつけてある。誰が筆を走らせたわけでもなく、それは絹布から炙り出されたが如く浮かび上がったのだ。

一体、と思嵐は愕然とした面持ちで、突然現れ出でた須弥山の絵に目を奪われる。続いてその須弥山の周りに惠岸行者の話す速度に合わせて次々と影が浮かび上がって行く。

「この須弥山を塩海が取り囲む」

須弥山の周囲の絹布が大海を模して波打つた。これは塩海。
「塩海の四方に地があり、これは一天四海。人間の住む東勝神州、
西牛賀州、南瞻部州、北鉢蘆州の四大部州に別れる」

とうとうと流れる東西南北の名を冠する州の名前、口ずさむ」とに東西南北大陸の影が現れ、達筆な字が浮かび上がる。

須弥山。牛賀州。南瞻部州。北鉢蘆州。

須弥山を中心に、塩海を隔てて、東西南北に四の大陸、すなわち四大部州が浮かんでいる。

思嵐は聞いたこともない大陸の名前だ。では、私はあのどこか一

つに住んでいたのだろうか……

「西牛賀州は諸仏が依つて留まる地であり、衆生も仏法に楽しみ、決して不殺、貪らず、戒を守ること純潔である。

また東勝神州は人々の心根も清らかに温和なこと美しく、天地一切を崇め、恬淡として争いを好まない」

何と夢のような国々ではないか。しかし、恵岸行者の説明は安穩に留まらなかつた。

「一方南瞻部州は中華の民の住まうところ、人々は淫を貪り、殺生を好んで耽り、世の戦事・争いが絶えず、衆は災いに楽しみ、地は乱れるに任せらる。

北鉢蘆州もまた仏の道を知らず、淫と殺生を楽しむ」

ぎよっとしたが、それはまさに自分の生きていた場所そのもののことだつた。表情が固くなるのを感じたが、巻物の変化にはつとした。

巻物に墨で描かれた須弥山を取り囲む四の大陸。その墨が溶け落ちて、中央に集まり始める。そしてぐるぐると渦を描きながら、やがて陰陽を形取つては崩れ、また再び円を作つた。そして壊れる。「これは観念の世界。世界はさに非す。実在の土地ではない。しかし、よつて『在る』。人々の争いは絶えず、災いに楽しみ、戒の乱れる南瞻部州、北鉢蘆州はいづこにもある。いかような形であれ、世の亂れを正し、福縁薄い衆生をなんとしても救い上げたい」

厳しさを帶びて語調が変わり、恵岸行者は輪王座して片手を上げた。

「如来は靈山大雷音寺に諸仏をお集めになり、御心のままに申されました」

『わたくしのところに三蔵の真經（三の蔵にいっぱいという意味）があるが、法力のあるものを選んで、東土に一人の善男を求めさせ、なんとかしてそのものに艱難辛苦をつぶさに舐めさせて、わがもとにきたらせ、三蔵の真經を取らせて、ながく南瞻部州は東土・大唐

帝国にこの三蔵を伝え、多くの人々を教化したいものじゃが、たれか参るものはないか』

「『』の御心に叶うよう、我が師觀世音菩薩が東土に赴いて、取經の者を探して参るお役目をお引き受けになつたのです」

蓮華座を組んでいた觀世音菩薩がつ、と空中に、蓮華を携えていた指を滑らせた。水のさざめきにも似て、天衣がゆるゆると流れ落ちる。地図は再び一天四海を取り戻し、金色の筋が右から左に横切る。惠岸行者が再び説明のため口を開く。

「これが指示示すのは、求法の道です」

東西を結ぶ、一筋の細い細い金の道。何万里の。何十万里の。果てのない道。

「南贍部州、東土・唐帝国より、如来のまします西牛賀州、天竺三国は靈山、大雷音寺まで、選ばれた一人の法僧が天の道を通らず、一步步下界の地を踏みしめ、八十一の艱難辛苦を乗り越えて、三蔵の真経を求め至る」

金の光は確かに乱の世から如来の元までを結んで細く雅やかに煌いていた。

「西天にある三蔵みくらりの経にちなんで、取經の者を『三蔵』と呼びましょ。この『三蔵』がこれまでに八人、砂漠に倒れ、弱水に溺れ、極寒の氷の壁に凍死し、あるいは妖魔の類に貪り喰われ、災禍のため天命をまつとうせぬままに無念の横死を遂げました」

惠岸行者が言葉を切る。そして、觀世音菩薩が『月型の眉根と曰を思風に向けた。

「そなたには、下界落ちして、九人目の三蔵法師となつてもらいたいのです」

な、何を莫迦なことを

「何を莫迦なことをおつしやる！――！」

声を荒げたのは、腰を浮かせかけた思嵐ではなかつた。顔を真つ赤にした少年神・ナタク三太子である。敵を前に抜刀せんばかりの勢いで、激しく彼は中座した。

「そのような大役、この無法者には任せられませぬ！」

そもそも、取經の者とは、下界において功德・法力・人品に優れ、求法の熱意に見合う知性と風格、体力、何よりその時代においてもつとも傑出した法僧でなければなりませぬ！――

唾を飛ばしての弁は、觀世音菩薩の御前であることも、怒髪天を衝く怒りの前に、忘却の彼方へと押しやられているために現れたものらしい。思嵐の方がいつそあっけに取られて、少年神の罵声をただ見上げて耳通していた。

「これなるは仏法に帰依して、性根を改めんと推薦された粗忽者でござります！ しかも、出自は下界上がりの屍解仙しかいせんどころか、巖廻倒しのただの道姑（女仙の修行者）―― 根本、穢れた女の身で三藏の真経を求める資格はない！」

田を見張った思嵐は、知らず脣が震えた。抗弁の言葉は出て来なかつた。汗が噴出すような、それとも引っ込むような悪寒に俯いて、じつと我が手に見入つた。

「問題は性別だけではない。現在中華にあることごとくの經典を熱心に研究し尽くしてその奥義に通じた者が、解釈において陰に陽に異なつた点を正し、原典を求めたいと法に我を忘れ、遠く天竺てんしゆを焦がれる、それが第一の資格ではありまぬか！？ この者のどこにその資格があると仰せか！？ その上、三藏とは、」

勢い任せて言いかけたナタクは、砂利を食んだように、はつと口

を噤んだ。みるみる血の氣を引いて、その場に片膝をつく。やがて
らと、室を取り巻く丹水の音が音楽的に響いている。

「も、申し訳ありません。出すべきだ真似を致しました……！」

恐縮を通り越して青ざめる弟に、惠岸行者は微苦笑を湛えて、
「気持ち、分からぬでもない。ナタの言うように、三藏の役目は
重要だからね。指摘されたように、如来は東土に一人の善男をお求
めになつてゐる。高蘭殿は、どこをどう見ても善女であつて、善男
にはなれはしまい」

「ならば」

「うん、これは一つの呪法でね。いや、一重三重の呪、大呪法なの
だよ」

高蘭殿、と惠岸行者は底の読めない笑みを向けた。

「三藏の真経を求めるることは、人の身にとつて千辛万苦の辛い道行
です。地理的には熱砂の砂漠や氷壁の高山、人為の裏切りや妨害、
飢餓や高熱・下痢・嘔吐をもたらす疾病・病魔、妖魔夜行といった
あらゆる災いが降りかかり、血の汗を流して、なお尽きかけた精気
を振りし絞つて、地を這いながら征かねばならない。どこまでもど
こまでも……この、求法の道をなぞる金の筋を見て下さい。縮図の
上では、とても卑近に見えます。その通り、我らなら、十日もかか
らず、天の道を雲行してゆけばよいのです。しかし、それでは何の
意味もないのです」

思風は見えない糸に惹かれて垂れていた頭を上げた。

「人が、人の仔が、この長い長い道程を、一步一歩足跡を残し、多
くの災いを潜り抜いて、入竺求法の苦行を成し遂げなければならな
い。求めたことに意味がある。通つて来た道に意味がある。そういう
呪なのです」

「……分かりません……」

思風は拳を膝上に握り込んだ。思い切り顔面を歪め、泣きたくな
つた。分からない。分からない。ありがたい経典に何の意味がある。
経典が人を救うのか。読経が人を救うのか。化物どもを一掃してく

れるのか。お前たち、天上の偉い仙人や諸仏ですら救つてくれないのに、三蔵の真経なら我らを救つてくれるとでもいうのか。ありがた過ぎて、涙が出てくる。ああ、小難い呪文が我らの力になるとでもいうのか。必要ない。本當なら、お前たちが助けてくれればいい。でも、お前たちはそうしないではないか。何故力在る者が、非力な人に更に苦行を強いるのだ。ただ一人の多少優れているらしい僧に、無名の万人の未来を託すのだ。そうせよ、とお前たちはいとも簡単に言うのだ。

私たちは、一人一人、必死に生きている。明日をも知らず、その日を必死に生き抜いている者たちに、お前らはこう言うのか。顔も知らないどこかの僧侶に、その必死の自分たちを託さなければならないと。

自分で自分を救うことすらお前たちの筋書きでは許されないのか。私は私を自分で救う可能性すらないのか。我々は、我々を救うこともお前たちの中では許されないのか。たつた一人の双肩に中華の民の生死がかかる。その者も人でしかない。三蔵に意図的な艱難辛苦を舐めさせるという。多くの人々の未来を託された者に、ただでさえ困難な道のりを更に苦しみ抜いて西へ征けと言ひ。

どうして託せよう。どうしてそんなことを簡単に言うのだろう。分かってください。私たちは、本当に弱いのです。弱いのです。簡単に死んでしまうのです。西域は、天竺は、三蔵は、とても遠くて気が遠くなるのです。

思嵐はただ拳を膝上に握り込むしか出来ず、じっと俯いていた。

我々は、一人一人では、本当に非力で、何の力もなくて、簡単に死んでしまう弱い生き物なのに……

「ただ一人、三蔵全てに重荷を背負つてもらおうとは思いません。だから、貴女にお願いしたいのです」

恵岸行者の声はどこか遠くから聞こえて来た。

「ご存知ですか、三千大世界の仏教的宇宙觀を……大仏の座する蓮華台座を取り囲む千枚の蓮華、その蓮華弁の一枚一枚ずつが一世界

(須弥山世界)を成す。一弁の中には、百億の須弥山世界、百億の月日があり、百億の釈迦が菩提樹の下に座している……延々の繰り返し、気の遠くなるような無限の宇宙の連なりです。どの世界にも、世を憂いて、遠く西域は天竺国まで旅する三藏たちが存在しているのです。

今もどこかの須弥山世界では、三藏の号を得ることなく、無名の三藏が砂漠を越え、大河を渡り、道半ばにして無念の横死を遂げている。彼らの灯した火はまた別の三藏が引き継ぎ、多くの、無名の、三藏たちがまた求法の道を征くのです

恵岸行者は姿勢を崩さないまま、穏やかに尋ねる。

「これは無駄なことでしょうか？ 何故三藏は生命を賭して無謀な旅路に向かうのでしょうか？ ただ經典を人ならざる我らが携えて彼らに与えればそれでよいのでしょうか？ その真髓は果たしてそれで人々に伝わり、その道行きを照らすのでしょうか。三藏の真經が伝えるのはただの文字ではない。多くの者たちの、熱望と願いと、それらが渾然となつて、大呪法が完成するのです」

「……分かりません、私には、分かりません……」

「九人目の三藏には意味がある。仏の道において、九という数字は聖なる意味を持ちます。九×九＝八十一の艱難辛苦を乗り越えることで、呪は完成する。貴女は何を思つて此処にいるのですか？ 復讐ですか？ それとも衆生を救うことにより意味を見出しますか？ ならば、九人目となる、表の玄奘三藏を助けなさい」

「……表の、玄奘三藏……？」

頭が混乱した。ついてけない。表といえば、裏があるのか？ 恵岸行者の弁舌は流水のそれであつて、一箇所に留まらない。

「世界には陰があつて陽がある。それは^{リヤンメイ}両面です」

元氣、というものがある。天地が分かれる以前の一元の気のことである。混沌とした元氣は、万物生成の根源の氣であり、これを「太極」とも呼ぶ。

「太極」は原初の混沌の氣、万物生成の源となる「一元の氣」、

つまり先述した「元氣」である。

一の元氣から、生滅する運動（道・タオ）を通じて、二の「両儀」すなわち天地、陰陽が生成される。更に両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ずるといふことである。更に両儀は四象を生じ、四象が生まれ、互いに混じり合いながら、万物が化生する。これらを図式化したものが、「太極図」である。

「呪です。陰陽二氣は孤立しません。互いにつかず離れず、混じり合って、影響を及ぼし合っている。

三千大世界においては、結末は一つと限らない。全ての三蔵が天竺に辿り着くわけではない。未来は未定、白紙です。

この一つの須弥山世界にも、表があつて裏がある。表と裏は互いに影響し合い、つながっている。

表の三蔵は、諱はキ、字は玄奘、俗姓は陳といいます。
表を補完するには、裏の三蔵が必要です。貴女が彼を助けなさい。苦難の道のりは、一人ではない。裏の貴女と表の彼が一人で一人、互いに交わらずとも表裏一体、一緒に道程を征きなさい」

九人目

思風は俯いていた。かつて、自分の顔には醜い痣があつた。前髪を簾のようなくして、他人に不快感を与えないよう、いや、人々の顔に嘲笑がのぼることが怖くて、いつもいつも俯いていたわたしは。

また、俯いている。昔から。ずっと。今も。何も変わらない。何一つ、変わらないではないか。

田まぐるしく、自分が命の踏み台にした人々の顔がまぶたの裏を過ぎつては消えた。

唇を噛み締め、勝手に目頭が熱くなるのを必死に堪えていた。恵岸行者は座したまま何も言わない。御簾を巻き上げた上座の觀世音菩薩に至つては、けはいすら感じさせない。まるで丹水の流れる音に同化して、どこにもいない。

下座に控えたナタク三太子だけは、苛立ちも露に怒気をあからさまにしていた。率直過ぎて、逆に分かりやすい。分からるのは、恵岸行者行者たちの思惑だ。

何故。分からぬ。どうして私なのか。私など……

釣り香炉に焚かれた白檀の清新な香りが、しつとりと身に染み込んで行く。かすかなはずのそれが息苦しい。

脇腹がじつとり汗をかいていた。苦痛だった。

元来、私は頭がよくないのに。難しいことばかり言われる。難しい決断ばかり迫られる。

三千大世界とは、自分の住む、このような世界がいくつもいくつも複数に、無限に、存在しているということなのか。

そんなことが可能なのか。

世界はたつた一つだ。仏教觀における須弥山世界。聖山・須弥山を中心に、塩海があつて、四大部洲がある。そうした教義的架空の世界觀があるのは、まだ分かる。

だが、その須弥山世界が、たつた一つではないなんて。大仏を支える蓮華台、その一枚一枚の蓮弁の中に百億を数えて、なお無限に存在し続けるなんて。

それではまるで、無限の三千大世界は仏に呑みつくされているかのようではないか。

どの世界にも、悟りを得る菩提樹の下に釈迦しゃかが座すのと同じく、三千大世界の一つ一つにまた取經の者も存在するという。そして、無名の彼らは旅の途中に倒れ、また別の三藏が、求法の意志を継いで天竺へ向かう。その情熱は、誰かの心に火を灯し、連なり続けるのだという。

しかし、彼らのうち、誰かが必ず取經に成功することは限らない。三千大世界においては、世界の数だけ、未来も複数。どの世界の未来も定まっておらず、未来は白紙だと惠岸行者はいつた。

そして、一つの須弥山世界には、物事には陰と陽の両儀があるよう、両面があるのだと。表があつて、裏がある。表と裏は連動している。

これは呪法だと。

裏の思嵐が東土・大唐帝国より天竺^二国まで旅を完遂させれば、それは強固な陰陽のつながりによって、表の三藏もまた取經の旅をやり遂げる呪になるのだ。

貴女には、その裏の三藏となる資格があるのだと、惠岸行者行者は穏やかな語調を崩さずに言った。どんな資格なのか、思嵐にはさっぱり分からぬけれど、それがあるのだと。

九人目の三藏には意味がある。九人目こそ必ず成功させなければならぬ。それもまた呪なのである。

複雜にして単純な式にのつとつた、こじつけのようなそれらは、絡み合つて相互作用し、いくつもいくつもの呪が運動して仏教伝播の大呪法となる。

最終的には、人々を教化することで、乱れた世界の気を整え、凝つた陰気の化生である妖怪の類をいっそし、悲嘆にくれる者たち

も救われる。

それには、絶対の何かが、必要なのだ。

ああ、つまり。

思嵐は唐突に理解した。

頭に立ち込めていたもやが清風に払われ、事の全容が見えた時、思嵐はたちまち全身の毛穴^{ひつがた}が開いた。ぎゅ、と拳を膝の上に握り締めて、背中を汗が流れる。

そうか。

これは、身代わりか。

こういうことは裕福な家ではままある。百害の疾病や事故から子供を守り、災いを払うために、定期的に災厄を一身に受ける身代わり人形を川に流したり、家に守りとして置いたりする。あるいは同じ日に生まれた者を、本来守りたい子供に「見立てて」、全ての害を引き受けでもらつ身代わり人形にしてしまうこともある。

同じことだ。

私は、仏の秘蔵仔である九人目の三蔵・玄奘法師の旅を、間違いのないものにするために、彼に降りかかる災厄を引き受ける身代わりの人形となるのだ。

一心同体とは、そういうことか。違はあるまい。

二人で一人、そして九×九の八十一難を分かち合つ。おそらく、最大にして最悪の災厄……玄奘法師そのものの死は、思嵐が引き受けることになるのだろう。

無論、それは表の三蔵・玄奘法師が死亡した場合だろうが。綺麗な言葉で濁しても、そういうことだろう。

身代わりだ。

だが。白く筋の浮かんだ拳を凝視した。無骨な手だと思う。骨ばつて、血豆や剣ダコがこんなにもたくさん。笑つてしまつ。何のために。そうだ。

構わない、と思った。

九人目の取經の者。玄奘法師、彼が本当の三蔵。

彼の、露払いになろう。

彼に降りかかる災いは、全て私が引き受けよう。

なぜなら、私に降りかかった災禍は、全て別の者が命と引き換えに取り扱ってくれた。何度も、何度も、価値のない私は高潔な他人に救われた。

どうして生き延びたのか、分からなかつた。私などより、彼らこそ命をつなぐべき人々だつたのに。何度も後悔したか知れず、同時に生き延びた自分の命を後生大事に抱え込んで、死の遠ざかる足音に泣きたいほど安堵していた。

死は恐怖だつた。死にたくなかつた。どんなにおためごかししても、思嵐は死ぬことが怖かつた。死に伴う苦痛、恐怖、それらを克服することなど不可能だつた。惨めに這いつくばつて、泥水を啜つてでも生き延びたいと思う自分がいた。誰かを突き飛ばし、自分だけでも助かりたい、一人だけでも安全な場所に逃げ込みたいと思う己を殺すことは決して出来なかつた。

綺麗ごとだけでは、生きていけない。ずっと思嵐は、がちがちと震えながら蹲つて、死の恐怖にただ怯えているだけだつた。自分の運命を呪い、他人や神仏を罵つて、動かないでじつとしていた。その間に、本当に強い誰かが自分を助けてくれるのだった。それを、無意識に知つていたのではないか。

卑怯で臆病で勇気のない自分。ああ、そのどこが悪いのだ。人ならば、人ならば、仕方ないではないか。自分の命を惜しんで、一体何が悪いのか。

皆そうしているではないか。普通なら、そうではないか。我だけではない。我だけでは。

何度も何度も、自分に言い訳した。自分自身を正当化しなければ、明るい日差しの下を平氣な顔をして生きて行けなかつた。

そこが自分のどうしようもなさだつた。開き直りすら出来なかつた。

常に後ろめたかつた。

内なる恐怖に打ち勝つ人々は、そんな自分を、身を賭して庇ってくれた。迷うことなく我が身を投げ打つて、助けてくれたのに。

母は、高蘭は、師は。彼らの最期は、いつも不思議と静かな笑顔で彩られている。

どの顔も、どの顔も、思嵐を助けてくれた最期の時、笑っている。彼らは別れの最期、無音で笑っていた。思嵐を叱咤し、突き飛ばし、あるいは怒声を上げて、行け、といった。指差す。行け、と、彼らは指差す。

どこまでも強い意志。他人を己の命で生かそうとする鋼の意志だ。本当は、知っていた。彼らは死を覚悟して、思嵐を送り出したのだと。そうした悲壮な決意が彼らの表情を凧いだような笑顔たらしめていたのだと。

どうして笑えるの。貴方たちが助けた者は、何の価値もないのに。どうして迷いもなく、そうやって笑って送り出せるの。

私では、代価が釣り合わない。貴方たちの命に釣り合わない。惨めで悔しくて、それはあまりに残酷な真実だった。

それでも、思嵐は、彼らの代わりに、その時、その場所で、死ぬことなんて出来なかつた。あの恐怖の前に、思嵐は圧倒的に氣おされ、ただ無力でしかなかつた。何度時が戻つても、変わらない絶対の事実だ。震えたままじつとしているしか出来なかつた。目の前を、自分でない誰かを生贊にして、死の災厄が通り過ぎるのを目も耳も塞いで、息をつめたままけはいを殺して待つしか出来なかつた。

でも、私が生き延び、生かされたことに意味があるとしたら。それは、今をおいてない。

そのために生かされたとすれば、価値のない自分は、彼らの死に少しでも報いることが出来るのだろうか。

玄奘法師は、中華の民を救う者だという。彼の双肩に、万人の未来が託されているのだという。その彼の重荷を、私だけが一緒に背負つても許されるのだと。

ならば、意味がありますか

私が彼らの命を代償にこうして生きている。そのことを、赦されるだろうか。

思嵐は、声にならない声で、もつぞりにもこない恩人たちに尋ねた。

応える声など、無論なかつた。

思嵐は頭を垂れ、両手を床について跪礼した。

「謹んで、拝命お受けします」

ナタク三太子が何か言いかけるのを制し、恵岸行者が、ほつと笑み崩れ、肩の力を抜いた。

「そうですか、受けて頂けますか……」

「はい、力及ばずとも、取経の者である玄奘三蔵の影として、陰に陽にその助けになりたいと思います」

蛾灯でいい。

暗がりに浮かぶ灯火に、大小の蛾は群がるだらう。引き寄せたそれらを、自分は炎のままに焼けばいいだけだ。

恵岸行者は拱手して感謝を示した。

「裏の三蔵が呪法を紡ぐ限り、玄奘法師は陽の世界のみに現れる。彼の存在は、陰の世界にある妖怪から一切見えなくなりましょう。存在が隠されてしまうのです。

妖怪たちの目には、貴女が三蔵として映り、また貴女は紛れもなく三蔵としてあります。陰の世界に妖怪を一手に引き受け、陽の玄奘三蔵を護法する辛い役目になります。それでも、よろしいか？　お覚悟はありますか？」

「もとより玄奘三蔵の露払いになるつもりで承知しております」

「……ですか。これは失礼しました」

「あ、兄上……！」

我慢も限界に来たのか、ナタク三太子が声を上げるが、恵岸行者は流石に海千山千の貫禄でつかみどころのない論法で弟神を煙に巻いている。

天数が傾く。

思風はひしひしと肌に痛いほど感じた。

喧々諤々と兄弟たちが騒ぐ中、御簾はいつの間にか降りていて、沈黙を金としていた観世音菩薩が杏仁型の切れ長な眦をすつと見開き、不思議な微笑を口元に湛えた。

-前置き-

玄奘三蔵、というと我々はどういった人物を想像するだろうか。まず思い浮かぶのは、『西遊記』における猿、豚、河童の妖怪を仏弟子として西方の大雷恩寺に取經の旅に赴いた文字通り『徳の高い』僧の姿かもしれない。

またこの物語りの中で、三蔵は、妖怪にとつてはその肉がまたとない美味、力を授けるものであるとされた。

結果、行く手行く手に珍味を欲する怪物乱神から、悪漢どもがこれでもかと控え、罠を張り、道中並み居る妖怪どもに狙われる羽目に陥る。

妖怪に攫われては暴れ猿を筆頭とした弟子に救われ、またお人よしがたたつて攫われる、の繰り返しの三蔵であるが、そこから想起される姿は決して猛々しい男性像ではない。彼は『守る』側より、常に『守られる』側に位置しており、弱々しさを称えたむしろ女性的印象を与えるのではないだろうか。

しかし弱々しいとはいっても、現実に即していようがいまいが不傷、つけず不殺生こころさずを唱え続ける頑固者的一面も持つている。

あくまで仏の教えを守ろうとする彼と、弟子の現実的だがいささか乱暴な殺生推奨の主張とは平行線をたどる。

その不仲の隙を突き、師匠の誘拐騒ぎに毎度発展する恒例のパターンは、バー・チャップス滑稽である。

しかしながら。

弱弱しい頑固者、妖怪を弟子に取經の旅を敢行した玄奘三蔵は、大衆小説の登場人物、あくまで架空の存在である。

語るべきは、

なのである。

果たして、想像していただきたい。

科学的装備もなく、中国からインドまでの往路の旅路とはいかな
るものか。まして、当時の中国では、皇帝の命により、出国は禁じ
られている。

唐代の知識層インテリであつた玄奘が、何故わざわざ出国の禁を犯してま
で、インドを目指したのか。リスクばかり高く、見返りどころか、
文字通り『往死』もありえたのである。

そこまでして、玄奘を西域に駆り立てたものはいったいなんだつ
たのか。

理想か。名誉欲か。

理想だけではたどり着けなかつただろう。

欲だけでは、過酷な往路、決して耐えられなかつただろう。
ならばいったい。

ともあれ、歴史を鑑みるに、彼は帰国後まで含め、皇帝の勅許を得て大規模な經典の翻訳作業を行うなど大成功をおさめた。

玄奘の西域行きの真相は果たして美辞麗句に糊塗された彼の伝記からでは想像するよりないが、ひとつだけ言えることがある。

彼は幼少から青年期にかけ、隋が天下の統一を失い、唐へと時代が変節する激動の時に生きた人物だ。

暴漢が林のごとく表れ出でて、白骨が転がり、竈の火も途絶える有様に、その多感な時期、何を思い耽つたのか。

時の権力者に自己を強烈にアピールし、またパトロンとし、言語を自在に操り、唐とインド間を往復するだけの体力気力をもつたそ
の男。

『西遊記』に見られる弱々しい『玄奘三蔵』像とは、まったくもつてかけ離れた

したたかさ

を隠していた筈だ。

その時、『西遊記』の玄奘とは異なる、腹に一物もつた侮れぬ人

物像が浮かび上がつてくるのである。

「もう少し」

呼び止められて、玄奘は背後を振り返った。

みずぼらしい身なりをした二人のこじき僧がにやにやと笑い、その手にぼろ布で包んだ長い棒状のものとふるしきをひとつ携えている。

「はて、私に何か御用でしょうか？」

「ひひ、はい。我らは中華各地のあまねく高僧を訪ね歩いております。皆様一芸に秀でた方ばかりでしたが、しかしいまだ思う方に巡り合えぬのでござります」

「はて、いかような」

玄奘が応ずると、「じき僧一人かわるがわる変幻自在に喋りだした。

「ひひ、あなたさまも感じれおられるはずですぞ」

「各地の高僧を訪ね、つぶさにその説を聞いても、詳しく述べの釈義を考えてみますと、みな自説を欲しいままにして居に過ぎませぬ」「經典を紐解きましても、陰に陽に異なった点があり、どうもはつきりとしない」

「中華ではその研究をしつくすことはできませぬぞ」

「原典をお求めなされ」

「遠く如来の御心に沿うには、天竺へ」

「もろもろの疑義を正しますには天竺へ」

二人のこじき僧の言葉に、玄奘は瞠目し、口を開いた。

「それは私も以前から考えていましたこと。かつて西方まで赴いて、もうもうの疑問を正そうとした法顯のように、私もその偉業の足跡

を辿りたいと望んでおります。しかし、求法のために上表しても、国外への旅行は許さぬとの詔が下り、人々は皆諦めてしまつてゐるのです

「ほほ、異なことを申される」

「あなたさまこそ」

「益州におられる時、ことごとく經典を研究しつゝしたので、今度は長安へゆきたいと考えられたもの」

「條式（法律）に妨げられ、兄上には止められ、足止めされていたものを」

「ひそかに商人と誼を結んで、揚子江をくだり長安の都へおいでになつたのではありませんか」

は、と玄奘は瞳を閃かせ、警戒の色を浮かべたが、二人のこじき僧はどどまることがなかつた。

「經典の奥義を極めたいと」

「その情熱は何ものにも妨げられず」

「何ものよりも強い」

「あなたこそ仏門千里の駒よ」

口々に言い募ると、はらりとぼろ布が解けて、目にも彩なたぐいまれなる品々が一一つ光を放つた。

「これは金襴の袈裟」

「これは九環の錫杖」

「受け取りなされ」

「なんと」

玄奘が慨嘆のうめきを漏らすと、ひらりとみすぼらしい袈裟が落ち、二人の姿は搔き消えていた。

不意に玄奘は雜踏の中に放り出され、目をしばたいた。呼びの子売り声に、子供の泣き声、土ぼこりに馬糞の匂い。

白昼夢であつたのか。

いや。

その手にはしっかりと、九環の錫杖が握られ、いつの間にか風呂

敷包みをひとつ携えており、開かずとも中身が玄奘にはわかるのであつた。

思わず呟いた言葉は何事が起つたのか、まさに一言で表すものであつた。

「南無觀世音菩薩」

その晩、玄奘は大海に浮かぶスマーレ山（世界の中心にあるとする山）の夢を見た。

登らねばならぬ。

そう決心して、足を踏み出さうとすれば、怒涛が沸きかえつて進むことを許さない。

しかし心に念仏を唱えると、どこからともなく

「恐れる必要はありません」

という声が聞こえ、水に入ると、たちまち石の蓮華があらわれ、足を踏むところに次々と生じた。

振り返れば、足元の蓮華は足に従つて消えさせていく。歩きながら、玄奘はふと背後、もしくはとなりに誰か見えない人のけはいを感じた。決して悪いものではなく、寄り添い、何か玄奘にあれば手を貸そうとするような守護するそれであった。

やがて山のふもとに達すると、いかにもその威容は断崖絶壁で、とても登れそうにない。

すると、また不思議なけはいがして、下方よりかぐわしい突風が吹き出でて、玄奘を天に吹き上げた。

頂上についた玄奘は周囲を見回すことをせず、尋ねた。

「あなたは誰か」

けはいは沈黙した。

「どうか姿をお見せください」

再び懇願すれば、ただ一言。

「私はあなたの露払い。どうか憂いを捨て、ひたすら天竺を田指さ

れませ」

玄奘は質問しようとしたが、そこで田を覚ました。

今度こそ夢であった。布団の中で田を覚まし、玄奘はひとつ思案した。

「時が来たか」

その時、玄奘は26歳（異説あり）。この吉兆を得て、いよいよ国外旅行許さぬ禁令を破り、西方を田指すことにした。

ここに、西遊記の始まりである。

「あんれ、お坊様、馬子もつけずにお一人でどこさ行かれますだ？」
野良着姿の農民の男が、鍬を肩にかけ、道半ばすれ違おうとした僧に声をかけた。

僧は九環の錫杖を打ち鳴らす手を止め、口元だけで静かに微笑し、すいと行く先を指した。

「あの山に用があります」

「……へえ、そいつはまた……は？　え、お坊様、まさかあの山つて、あの山だか！？」

腰を抜かさんばかりに驚嘆の声を上げ、男が指差したのは隆と天を五指の峰で突くそれである。

「両界山」

僧はひやりと刺す聲音で、誰に聞かせるでもない風に呴いた。

「ひえっ」

聞き咎めた農夫の背中をたちまちおぞけが駆け上がる。このお坊様はなーんも知らないんだべ、教えて差し上げねば。農夫は顔色を変え、身振り手振りでどれほど無謀で恐ろしいことか言い聞かせた。
「とんでもないだよ！　あの山は、五つの峰から五行山ともいつて、それはおつそろしい山だべ！」

それから辺りを憚るよつ急に声を潜め、縮み上がりながら説明する。

「いつも大体、曇ぐれになると、これまたおつそろしい、雷様が鳴る音か、それとも岩が大量に転がり落ちてくるみてえな大音響がするべ。きっと化物が住みついてるだべや。麓の村じゅもつぱらの噂で、誰も近づかないだよお」

しかし、僧はそれを聞いて笑みを深くすると、農夫の忠告と氣遣いに深く礼を言って会釈し、迷うことなく道を登つて行く。男は僧

をぽかんと見送つて、何とも情けない顔をした。

奇妙な僧は、最後こう言つたのだ。

「その化物にこそ、会いに行くのです」

有髪僧 の姿に身をやつした思嵐は 九環の錫杖をつきながら、足早に五行山こと両界山を登つて行く。日は南中し、途中すれ違つた農夫の忠告どおり、この時刻、雷鳴にも似た腹の底を震わす重音が辺り一帯に響いていた。

不気味な。

思嵐は知らず顎のあたりを手甲でぬぐい、ぐつしょりと汗をかいているのに気づいた。

これは何たる妖氣か。餒えたような臭いが鼻をつく。行き場のない妖氣が何百年も堆積し、倦んで発酵するに任せてい。

これを、一匹の妖怪が発しているのか。

そう思えば、生睡を嚙下し、はやくも両界山を覆う妖氣に呑まれかかっている己に苦笑する。やれ、体は正直だ。

『逃げたがり』の自分は、すでに保身を求めて、脱兎のごとく人里へ駆け込みたがつてゐる。嫌でも死地には敏くなる。本来の自分が深渊から顔を覗かせ、危険から逃れ、安全な場所にいたいとそのことばかりが頭を占める。

あまり変わつてはおらぬようだ。

道姑となつて、得た力に胡坐をかいていたのかもしね。今や、思嵐はただ人だつた。下界落ちさせられるに従い、仙としての全ての力を奪われ、新たな『人間』の肉体に入れられた。普通の人間と変わりない。『痛がり』で『怖がり』で『逃げたがり』。力を剥ぎ取られでは、恐怖に耐えうることなどできない。元の思嵐に逆戻りである。

力の上に寄つて立つ強さであったのなら、私は何も変わっていなかつたのだ。

少なくとも、ただ人の身でありながら、思嵐を助けてくれた高蘭や母、師父の気高さにはとても追いつけない。

とぐろ巻く大妖のけはいに、がくがくと膝頭が笑うが、九環の錫杖を痛いほど握りしめ、一步一歩登つて行く。足を止めるることはない。止めたら弱さに折れてしまう。

歯を食いしばり、瘴気の濃厚な方へとあえて進む内、木立が途切れ、断崖絶壁に面する猫の額ほどの開けた空間に出た。

「よお、坊主」

屈託のない呼び声は、ずいぶん低い位置から聞こえた。

ぎょっとして、地面に視線をやれば、少年　いや、あどけなさを残した青年が手を振っている。

なんともない光景だ。

しかし、尋常でなかつたのは、彼が腰から下を巨大な落石に押し潰されるようにして、地面に這いながら思嵐を見上げていたことによる。

常人なら圧死しかねない状態のはずなのだが、本人は実に晴れ晴れとしたにこやかな表情だ。全く苦にしていない様子がまず普通ではない。また、崖下に下半身を巻き込まれているため、目測でしかないが、かなり身長が低く、ありていに言って小柄だ。しかし、その存在感は並のものでない。着込んでいるのは幼い面立ちに不釣り合いな鎧で、白地に紫の蔓草模様が実に見事な一品である。莊麗な武人の姿でありながら、ほとんど少年のような無邪氣さな笑みは悪寒を伴う違和感を増大させる。

あまりに非現実的、不釣り合いな視覚情報を一挙に叩き込まれて、思嵐の頭は一瞬虚を突かれる。

なんだこれは。

その一瞬の空白は愚かの一言に死きた。

ここに何がいるのか、分かつていて、来たというのに、見た目に惑わされ、不覚をとつた。子供なのか少年なのか、青年なのか。いかにも面幼な印象のそれは、邪気のない笑みを浮かべる。

「出せ」

言葉は力を帯び、力は圧倒的支配性を持ち、支配力は見えない暴力となつて思蘭に鉄槌を振り下ろす。身の丈に合わない低い声は、表情と声がちぐはぐだ。何より、塗り込められた妖気のうねりに、思嵐はがくりと膝を折つた。九環の錫杖にすがらなければ、膝をつくだけではまず、更に無様を晒しただろう。

ぼとぼと珠のような汗が滴り落ちる。圧倒的強者の前にある時、圧倒的弱者にできることとは一体何だろう。

だが、と思嵐は自分の優位を確信した。
出せ、とは、出られぬ、と同意なのだ。

「よひ、クソ坊主。出してくれよ」

な、と両手を拝みあわせ、懇願する姿はどうかひょうひょうとしていて憎めない雰囲気があつた。

「なあ、これ見てくれよ。背中の岩つていうか、山そのものな」
天を指差し、少年は深々と嘆かわしいとばかり溜息を吐いた。
「ちょおっと天界で羽目外したからって、如来のおっさんが人のこと問答無用で封印してきてよ。俺、自力では抜けられねえの。法力莫大な坊主でないと封印解けないとありがたーいえげつなーい御心で、この苦行も五百年の歳月だ。なあなあ、氣の毒だろ。かわいそつだろ」

息継ぎもなくまくしたてて、最後につこり笑う。

「だからな、すんげえ簡単なことだから、そ、その上の方のな、札。
ばっちいやつな。こうびりつと破つて捨ててくんねえ?」

「は」

思わず思嵐の喉が震えたのを聞き咎め、少年の容貌をした何かは眉根を顰める。

次の瞬間、思嵐は身体を折り曲げて爆笑していた。

「ふ、つあは……！ あはははは……つー妖怪、貴様ふざけるのも大概にしておけよ」

「やあな感じだな、クソ坊主」

「貴様の犯した数々の罪状を知つて、何故仏弟子である者が封印を解くと？ 五百年で脳味噌まで湧いたようだな」

そこまで告げて、思嵐は不意に表情を消した。

「 齊天大聖孫悟空」

落ちた沈黙は痛いほど肌を刺す。

齊天大聖。

猿の妖怪には過ぎた名だ。自称でもあつたか。

呼ばわった思嵐に、少年もたちまち鼻白んだ面持ちで、しかしすぐにくつくつと肩を揺らした。

「何がおかしい」

「いや、地元の連中が止めただろうに、のこのこやつて来た阿呆な坊主をからかつてやうづかと思ったが なかなかどうして、如来も粋な計らいをする」

「何を」

「確かに俺の脳味噌も鋗ついていたかもしけん。そつか、五百年目だ。如来は約を違えなかつた」

クソ坊主、ようく聞け、と少年の大きく零れおちそうな杏仁型の赤い目が、暗く喜びと期待と嘲笑を織り交ぜて輝いた。

「あんたが俺の封印を解きに来ることは、五百年も前に釈迦如来の筋書きにあつたってことさ」

なあ、玄奘三蔵。

「だから何だ」「

思嵐は吐き捨てた。もはや侮蔑を隠そつともしない。

「御仏の深謀遠慮など猿の妖怪などに分かつてたまるか。私もお前のような妖怪など助けたくないが、菩薩がお前の封印を解けとおっしゃるからそうするまで。例えそれが五百年も前から如来の内でお分かりになつていたとして、何の不思議がある？ 何の問題がある」

三千世界の話を聞かされた後となつては、蓮華の花弁のように並び立つ幾億幾千の世界と月日の中で、玄奘三蔵が何万何千回とこの猿の封印を解いたとしても、ましてそのことを如来がご存じしても、何の疑問があろう。疑問など浮かべてはならない。そんな後ろを振り返り、疑い、迷つていては、この過酷に過ぎる道中どうして耐えられよう。

他にすがるものもないというのに。

そう思つ自分自身が嘲笑的である。

思嵐は基本、常に何かに依存している。もはや体質だ。

こうして何かに依存することで、安寧を得て立とうとしている。危険だと思う。常に絶対的にすがりつけるものを探めてふらついているだけの自分を浅ましいと思うが、理想論だけでは生きてゆかれない。

人には。

希望を託す対象が必要だ。

祈りを捧げる対象が必要だ。

寄りかかる大樹が必要なのだ。

美しくて何の役にも立たない『それ』が必要なのだ。

日々の糧を削つてまで、祖靈や神仏を奉るのは何故だ。

恐ろしいからだ。この広過ぎる世界の中で、狭過ぎる思考の現在

が恐ろしいからだ。

精一杯の自分は『今』に必死で、明日の『未来』も考えられぬからだ。

明日は未知で、未知のものにこそしか託せない。

託して縋りながら救いを求める。

救われようとすることで精神の安定を保つ行為は、自らを救うことに似ている。

神仏といった絶対者に逃避することで、かえつて均衡を取り戻し再度現実に立ち返っていくことと、その絶対的存在に依存しきつて思考を放棄することは別である。

何かに縋らなければ生きてはいけないが、委ねきつて考へることを止めたくない。それでは、『私』は死んでしまうだらう。

その功罪を踏まえ、恵岸行者の、引いては觀世音菩薩のいつことを、信じてみようと思つ。眞田にではなく、信することができると

『私』が判断して信じてみようと思つ。

無論、自分などが果たして『玄奘三蔵』による大呪法のもつ一つの要になつたのかと言えば、胡乱ではある。

だが、これを自分にも何かできるのだと思える機会とどちらえることができるのではないか。あるいは『始まり』ととらえて、前に歩き出せるなら、それは思風にとつて不明瞭で恐れであった『未来』への志向性だ。

生きてゆける。

自分など、と思う苦しみの泥の海を、沈むことなく、何とか一步

一步踏み出していける。

なぜ私が生き延びたのか。なぜ生かされたのか。生きていてもいいのか。

苦しい。苦しい。苦しい。

繰り返し満ちては引く潮のよつた疑問と痛みに、一つの回答を出し、ぎりぎり均衡を保てる。

自己満足かもしれない。贖罪に酔っているのかもしれない。それ

でも、私が私を生きていいいと思えるなら、それは『救い』だ。それが思嵐の信仰の形だ。

信するならば、と思嵐は嘆息した。

取りつくしまもない、冷淡な反応をしていた思嵐の面変わりに、妖怪が興味深そうな表情を差し向け、様子を見守る。

再度心中に唱える。

この道を選ぶ『私』を生かしてくれた人々を信するならば。妖怪を封じるおさえ札を見やれば、『オン・マ・ニ・ハツ・ミ・ウン』と六字の真言が読まれた。

思嵐は如来の法力のほど、まして緻密なまでの封じの結界に感嘆し、震える手で札に手をかける。

私は常に恐れるだろう。私は常に逃げたがるだろう。今だつて死ぬほど怖い。何が正しいのか分からぬ。選択することこそが恐ろしい。

だが、私を生かしてくれた全てを信するならば。

この大妖を恐ろしいとも思うし、全ての妖怪が憎くてたまらないが、まずは 思嵐は札を破り捨てた。

ここから始まるのである。

結果は、非常にあっけないものであった。

岩山と同化し、下半身を押し潰し取り込まれていた妖怪は、岩が泥に変わったかと思われるよう、蛇が這い出るのにも似たするとした動きで抜け出した。

あまりにもけはいがないので、妖怪がすぐ傍に立っていた時には、驚異に思嵐の背中をどつと冷たい汗が流れた。

妖怪は横合いに立ち、凝じつと下界を見下ろしていた。

まるで岩のようであった。

気づけば、辺りに立ち込めていた濃密な妖気は払われ、びゅう、と清風が冷たい空気を孕んで緑の匂いを運んだ。

不意に、妖怪は息を吸い込み、肺をめいっぱい脹らますと、

天を突けと叫んだ。

鼓膜がびりびりし、思風は腰を抜かすかと思った。

何たこいは！

上古の靈す

山岳に木靈する咄咄大笑は
その小さな身体のどこから響いて來
るのかと思つほどであった。

思嵐は目を見開き、気おされていたが、やがて 呼吸が容易くなつてゐることに気づいた。妖怪を中心に淀み沈殿していた五百年分の妖気が、要となる封印を失つて、一掃されたためだつた。

そして、その蓄積した莫大な妖氣だが、風に吹き払われたものこそ一部であつて、ほとんどは再利用された。

7

妖怪は違和感にか、火眼金睛が上目づかいに宙を睨んだ。不思議そうに己の額を触り、異物の感触に顔面を歪める。

何たこれ

尖った爪が、カリカリと金属をひたかく。惠巣行者に聞いていた
とおりだと、半ば驚嘆、半ば安堵の思いで妖怪の額を見つめた。
五百年前、天界を騒がせた罪人を、『一時的』に解放する際に備

えて、安全弁が講じられた。

最初からこの大妖を解き放て際は、本人の堆積するに任せた五百年分の妖気をもつて、枷とするように条件づけされていたのだ。

如来は両界山を一種の巨大な回路に見立て、妖怪自身もその一部とし、同年数これらを天地巡らせ続けることで、強力な法具を作る

士合とつた
せんじ

「緊箍兒」

呪具の名を口にしたことで、妖怪は一瞬の空白の後、殺氣を爆発

的に膨れ上がらせる。

「おいおい、坊さんよ、人の頭に向ひくでもねえ名前のもん勝手に
はめてくれてんだ?」

額を金の輪 緊箍児を外そつと試みて、妖怪の幼さの残る顔が
不愉快げに歪んだ。

「なんだあ? 外れねえじやねえか。あれか、如来のおっさんの
仕業か、おい?」

「その輪は、魔を伏す法具。戒めだ。仏法に背けば観面に頭を締め
付け、酷くなれば頭蓋が潰れるようになつている……」

脳裏に警鐘が最大限鳴るのを自覚しながら、思嵐は無駄と思いつ
つも間合いをとつた。

「改心したかも分からん妖怪を、ただ無策で野放しにすると思つか
?」

「だよなあ……って、納得するわけねえだろ」

笑顔のまま岩肌へと拳をたたきつける。起点から蜘蛛の巣状の罅
割れが走り、中心部は岩壁を深く抉つた。

妖怪にはここにこと無邪気な笑みを浮かべていたが、田の奥は笑
つておらず、背筋の凍るような脅威を感じさせる。

「なあ、ついでにこれも外してくんねえ? 悪いことは言わないか
らさ。でないと、あんたの胴と頭が外れることになるかもなあ」

ゆつくりと思嵐は後ずさる。

「自身で思い当たつたのだう。如来の為されたこと。私にはその
発動の権限はあっても、外すことなどできん」

「……ち

童顔を俯き加減に舌打ちし、一瞬の後に、「あ」と思つ間もなく、
思嵐の肩を親しげに抱いていた。

「なつ」

首を落とされるやも、と緊箍児を発動させる緊箍呪を唱えかけた
思嵐は、この距離では今更間に合わないかもしれない瞬間死を覺
悟した。

きんぐじゅ

妖怪はすい、と顔面を近づけ、口角を上げた。

「まあ、いいや」

「は？」

あつけにとられ、顔面を固める思嵐に、肩を抱いたまま妖怪は芝居がかつて首を左右に振る。

「いいわ。どーせ、あんたも末端だろ。言われるがままの下つ端齧してもどうにもならんねえよな。悪い、悪い。無理難題言つたな」
妖怪は自己完結し、さも同情と理解に及んだとばかり、うんうんと頷いている。

「このけりは如来のおっさんにつけさせるからよ。ともあれ、まあ、動けるようになつただけでもすげえありがたいのは事実だしな」
ただし、と細まる赤い目は、思嵐の心臓を凍りつかせるには充分な酷薄さを孕んでいた。

「その、今唱えよつとした呪文がなんかな、使ひビンタつてえのを考えた方がいいぜ」

思嵐はのけぞったまま目を見開き、妖怪の言わんといふを察した。
この呪の効果は絶対であるが、もう刃の剣となる。

妖怪は、緊箍児を使用するならば、死を覚悟して使えと釘を刺したのだ。

妖怪の反射神經を思えば、唱えるより先に首を落とされる可能性が高く、一方距離をとつていれば、思嵐に有利。

また、妖怪が思嵐の殺傷に及べば、少なくとも無罪放免とはいかず、再び両界山に封印されることが考えられる。

妖怪自身が言うように、額の輪で行動を制限されるのと、山を重石に一切身動きが取れないとでは、天と地の差があらう。

多少なりとも頭が回るのであれば、緊箍児の使用者を殺すことでも得られる一時の開放感と引き換えに、仮初の自由まで手放しますい。

すなわち、妖怪は緊箍児という強力な法具で直接にだけでなく、背後に控える再封印の危険性によって、一重の意味で縛られている。

「」から導き出される結論は、面白いことだが、緊箍咒は本来使用を目的としていない。

緊箍咒を唱える者を殺害することによって、この妖怪の明確な造反をたちどころに知ることができる、それこそが最大の目的であり、また牽制なのだ。

妖怪にとり、最も恐れるべきは、思嵐を殺すことによって、天界引いては如来に対し、一心あり、と取られるあるいは、その口実を与えることである。

つまり、警鐘である緊箍咒を鳴らさなければ、馬鹿でないならば行動には注意を払わざるを得ない。

この一重の構造こそ、最大の抑止力であり、如来の観智であった。もしくは、奸智とも言えるか。

「まあ、お互い如来に振り回される同士、仲良くしようぜ、おつしじょーさん？」

「ほんほん、と肩を叩かれ、思嵐の顎が落ちた。かに思えた。

「お師匠さん？」

「あれ、聞いてねえの？　まあ、ちょっとそこ座つて聞いてくださいよ」

妖怪は急に口調をしおらしく改め、岩の腰かけに促したが、不愉快なにやにやとした笑いは引っ込めようとしてしない。

「俺はですね、五百年の長きに渡り、如来のおっさんの命で、山神や土地神に管理されておりました。飢えた時には鉄丸てつがんを食らわれ、かわいた時には、銅汁を飲ませて、その日その日の飢餓をしのいでいたわけなんですよ」

なんとも凄まじい五百年の歳月である。

「さすがの俺も心弱くなつて日がな一日誰か解放してくれねえものかと切々思つていたところに、如来の手先もとい、南海の觀世音菩薩が通りすがり、俺を見舞つていつたわけですが、俺がひたすらに修行いたしましたので、大慈を垂れたまえと言えば、例の『そなたが心を入れ替えて仏門に帰依するならば』と一説ぶつてですね。来る

るべき日に取經の者を遣わし、そいつに俺を救わせるから、その者の弟子になつてはどうじやと言われたわけです。ああ、それに何より、五百年前の去り際、如来のおっさんが俺の世話を任せた山神、土地神におっしゃることには、『こうして罪の果てる日の来るのを待てば、おのずから人あつて彼を救うであろう』と俺に予言をくれたまわつたわけで。長々とお粗末さまでした

「……そのような

魂を人の身体に移すにあたつて、恵岸行者に、言われたのは、次のことである。

『下界に降りますは。

如来の五指を五つの連山と化した五行山　今は名を改め、両界山に向かい、封印せられし化け猿を解放せしめよ』

『化け猿は、五百年より昔、天宮を騒がせた大妖なれば、法具『緊縛呪』を授ける故、場合によつてはこれを使うための『緊縛呪』を唱え、伏するがよい』

『化け猿をどう扱うもそなたの自由ぞ』

すなわち思嵐の胸先三寸に任されたわけであり、仮の師弟関係を結ぶなどとは一言も聞いていない。

とはいゝ、正直、これから艱難辛苦を眞に嘗めさせられよう道程において、ただ人である思嵐には、供の一人もおりずでは、先行きがあまりにも不安であつた。

思嵐がただ人である以上、守り手もただ人であつては困る。

これから相手にするのは、病魔疾病、流砂に氷壁といった悪環境だけではない。人外のものを一手に引き受けるのが役目。

毒をもつて毒を制するというわけか。

「あい分かつた。これより、お前のことは我が弟子と思づ。法名は

『

「あー、なんだ、法名はけつこひ。俺には、孫悟空といふ素敵な名前があるんでね」

「悟空　悟空行者か。西方までの道行、よろしく頼みますぞ」

思嵐もまた口調を改めた。

この妖怪、化け猿の胸中を思えば、油断ならぬ、と思えばこそであった。

「はつは、中々楽しい道程になりそうですね、おっしゃうせまー。小馬鹿にした笑いを弾けさせ、互いに腹に一物隠しながら、こうして仮初の師弟は対面を済ませ、五つの連山を頂く両界山を後にしたのである。

西を目指して。

洞府の奥深く、闇の濃淡に濡れるような黒い髪も衣も溶かして、白い指先と面ばかりが玲瓏と青い燐光に浮かび上がる。

足元には、我こそはと集い馳せ参じた妖怪が膝をつき、または額づいていたが、その大妖は疎んじるというより無関心であり、無気力でもあった。

恐るべきことに、かの両界山に堆積するに任せた妖氣と『同等』のそれも倦んで久しく、洞穴を飽和状態にしている。

玉座に肘をついて何もかもに飽いているかのように、居並ぶ配下を睥睨するでもなく、いずれか遠くを見るようであつた大妖が、ふと、その白い面を上げた。

「いかがされました？」

近侍の高位な妖怪が、氣鬱の解けぬ主の僅かな変容に、何事かと氣色を窺つたが、妖怪自身主君より返事があるとは期待していなかつた。

しかし、大妖は予想を裏切り、抑揚を欠いた酷く冷淡な聲音の中、僅かに驚きを滲ませ、独り言のように呟いた。

「五行山が動いたか……」

五行山？ と配下は眉根を寄せ、次の瞬間驚愕に息を呑んだ。

「で、では、齊天大聖の封印が解かれた、と ？」

大妖は最早興味が失せたとばかり、沈黙と静寂に再び身を沈めたが、配下は拱手して、さつと身を翻した。

「ふふ……ほほほ！ 面白いことになつてきたわ！」

耐え切れず紅い唇から零れて反響する笑いに、控えていた妹々たちが軽口を叩いた。

「大姐、ごつ機嫌だねー、きやは！」

「ほほほ！ ここにいたり、天数が動くようじや！ まずは、誰か、両界山に急ぎ行って、様子を見てまいれ！」

「ういうこさー、まつかせてえ！」

きやは、きやはは！ と甲高い笑い声を立てながら羽音とともに飛び立つ妹たちを見送つて、妖怪こと月下公主はお抱えの妖術師の下へと足を急がせた。

「そう、まずは。まずは、我らが大兄の封印が解かれしは、奇瑞か、それとも 確かめることじや……」

道程

日が落ち、ぱちぱちと焚き火の音が爆ぜる中、平らかな岩に腰を下ろし、思風は手元の地図に視線を滑らせた。

玄奘は長安を出たか。

とすれば、まずは、

長安

唐の首都出て、と指先が西を辿る。絹の道の東の起点はこの長安である。ここから黄河と交差する、

蘭州

これを過ぎて、黄河以西を河西地方と呼ぶ。北に砂漠、南に祁連山脈に挟まれた細長い東西地域が結び、

涼州、

甘州、

肅州、

瓜州、

沙州

これら主要なオアシス都市を右下から左上へと斜めに抜けていく。このオアシスは祁連山脈の雪解け水が湧き上がつて形成したものである。更に西、

玉門関（敦煌）

これまでを、『黄河の西（河西）』をゆくといふので、『河西回廊』と呼ばれるものである。なお、この河西回廊の西端にある、

酒泉、

これは酒が湧いたと伝わる泉や、後の唐代詩人「王翰」が謡い込んだ夜光杯で有名な「涼州詞」で知られる。

葡萄美酒夜光杯 欲飲琵琶馬上催
醉臥沙場君莫笑 古來征戰幾人回

葡萄の美酒 夜光の杯

飲まんと欲すれば 琵琶馬上に催す

酔うて沙上に臥す 君笑うことなけれ

古来 征戦 幾人か 回るかえ

葡萄の美酒を、夜光杯で飲もうとしているが、
誰かが馬上で琵琶の音色を鳴り響かせ、
早く飲めよと催促する
たとえ酒に酔いつぶれ 砂漠の戦場に倒れ伏してしまおうとも
どうか 笑わないでくれ。
昔から 戰に行つて いつたい
何人の者が 無事故郷へ 帰つて來ただろうか。

辺境の地で、明日をも知れぬ悲哀を謡つたものであり、現在の思
嵐にも奇妙に合致するものであった。

さて、玄奘の出国時に戻れば、唐朝の行政は始まつたばかりで、
西域まで国境支配が及んでいない。

その為、國民は外国への旅行を国法により禁じられていた。

おそらく出国の禁を犯した彼には、行く先々に捕縛の知らせがか
かっているはず。そちらは、俗世のこと、玄奘の才覚で切り抜けて
もらうよりない。しかし、跋扈する化け物達は、思嵐の領分である。
火を見つめたまま、またも、無様を晒すかもしれないな、と口端が
歪んだ。

「悟空」

仮初めの同行者の名を呼べば、闇の静寂に「応」とこたえる声は
なかつた。ちよつくら腹に入れるもの探して来ますと飛び出してい
つたきりだ。もしやそのまま逃亡したのではないか。疑念が気泡の
ようにふつふつと水面に浮かび上がつて来るが、あの喰えない猿が、
逃げた場合に被る不利益を看過するとは思えない。それとも、天秤

にかけて、逃亡する益が勝ると判断した可能性も否定はできないか。あらかじめ集めておいた枯れ枝を一本拾い、薪に投げ入れようとした思嵐は、かがんだ際に、足の爪先の延長戦上にいるものと『目が合つた』。

女の生首。

地面から斜めに横顔が生えている。

半ば大地に埋まつた女の目が、弓なりに弧を描いた。嗤つて**わ**いる。目が合う。

一瞬の空白の後、

足下から脳天まで、ざわつと鳥肌がはい上つた。

悲鳴を飲み下したのは、身体が凍り付いた為であり、また怪異に對して、大声を上げてはならぬという『経験則』の為でもあつた。動と静、現実と非日常の拮抗する境においては、投じた一石が容易く均衡を突き崩すことがある。

対峙する異存在に気づいた瞬間から、奇妙な押し合いが生まれた。張り詰めた糸はふつつりと切つて落とされることを前提に存在し続ける。崩壊をこそ思えれば、かえつて蛇に睨まれた蛙のように足下から根が生える。

そして、人間は長時間の緊張に耐えつるよつにはできていない。確實に、場は崩れる。それだけが痛い程に理解できる。

睨み合いは思嵐の一方的な威嚇だつた。怪異は思嵐のあののきなど頓着していない。生首はうつむき加減に顔面半分を土塊に埋まるようにしてありながら、次第に緩慢な動きで大地より迫り出そうとしていた。ほとんど、振り向くような動きで徐々に全貌を露わにしていく様子は、かえつて思嵐の恐怖をあおる。

歪に白い顔面は、頭髪ばかりが濡れ濡れと黒く豊かで、その半分突き出した唇は血を刷いた不吉な赤色だつた。割れ目が僅かに押し開き、白い歯の隙間に見える真つ黒な口腔が見える。

舌先のぞく虚ろから、か細い声が漏れ出した。

猫の仔が鳴くよつな小さな呻きは、「あーあー」という意味をな

さないものだが、怖氣を催させる。嘆きよりも次第に歡喜の割合が滲み増して行き、もの狂いめいた嬌声に変じて行く。不吉という概念、現象が形を取つたらこの生首になるのではないか。

気持ち悪い。強烈な不快感がこみ上げた。思考が重く痺れて行くに従い、疑問が浮かび上がる。

何故こんなものが、目の前に現れる。何故？

答えは一つだ。私が選んだからだ。化け物ども相手に、無力な人の身で囮になりますと、この口が答えたのだ。そう志高く大役引き受けながら、今すでに脳裏を過ぎるのは後悔である。ただ一人きり、闇の中で生首と対峙して、どうして恐れず立ち向かえよう。怖い、逃げ出したいという衝動は、雲霞のことく後から後から沸き上がる。ねじ伏せるのは容易でない。それこそ全身全靈の力を要して、まだなお完全に抑えきれない。恐怖を理性が凌駕するには、あまりにもそれは生存本能に根ざしていた。

しかし思嵐は巖のように動かずに入いる。

思嵐の胆力が恐怖に勝つたわけではない。逃げ出せば化け物相手に背を向けることになり、死ぬかもしれないという直感が、目を反らすことを許さず足を留めさせたに過ぎない。

いつになれば、と思う。いつになれば、たちまち恥じない自分になれるのだろうか。何もかも投げ出して逃げてしまいたい自分を御することができるのか。

そんな日はけつして来ない。思嵐はどこまでも『人』なのだつた。『人』であることを止めれば、彼ら異形と同じものに同化されれば、この思いからも解放されるのだろうか。いつそそうなりたいと願つてしまつ『己』の弱さこそ、恐ろしかつた。

ああう、ああう、となまめかしくも生理的嫌悪をかきたてるむせびが激しくなつていく。

最初斜めに刺さつていた女の生首はほぼ地面から迫り出し、完全に思嵐を振り向ひつとしていた。

いや、だ。

思嵐は絶叫したかつた。

嫌だ。嫌だ。もう嫌だ。

もはや何の力もない。無理だ。怖い。お願い。

ずっと封じて来た筈の悲鳴がこぼれ落ちる。

お願い、たすけて。

ぐしゃり。

女怪の嬌声はぱつりと途切れた。突然訪れた不自然な静寂に、思嵐は事態の把握もままならぬまま呆然と見上げる。

長得物の先で、女怪の頭は高所より腐れ落ちた熟柿のように叩き潰されていた。

知らず、思嵐の喉が鳴る。

「お師さん、こんな薄気味悪いのと熱く見つめ合つて変わった趣味をお持ちですね」

「うう……うう」

得物でぐりぐりと頭部を潰しながら、炎に照り映える悟空の顔は笑っていた。

「それより、お師さん。食い物持つて來たんで、夕飯にしましょうや」

食べるか。

いつそ胃液を吐き出したい。人の身では、何もかもが現実味を帶びて生々しく、血の臭いにも湯気の立つ肉にも耐えられない。

それでも。

食わねばならぬ。
もどしてでも食わねばならぬ。

旅は生やさしくない。

まして、悟空に侮られてはならない。

味方ではないのだ。信を預けてはならない。弱さを見せてはなら

ない。獅子身中の虫も使いようと思わねばならぬ。虚勢も張り続け
ればいずれ真実にならう。それだけの開き直りなくして、どうして
この大妖を従えられる。

「……いただこう」

長時間同じ姿勢でかがんでいたため、動き出すとぱきぱきと身体
の音がする。思嵐は恐慌も憤弱も、血の巡りとともに剥離せよと背
を正して、托鉢の杯を差し出した。

何を考えているものか、悟空はふうんと鼻を鳴らし、

「あれは多分『飛頭蛮』でしたよ」

と世間話でもするように告げた。ああ、そうだろうな、と相づち
を打つ。夜の間、頭が胴体から離れて、自由に飛び回る妖怪である。
悟空は飯をよそいながら、

「飛頭蛮のやつ、明日の朝には頭もない間抜けな身体が一丁上がり
つてわけですね」

「首は身体なくして次の夜を待てぬというが、逆もまた長くは保つ
まい」

「でしような。とにかく

悟空の口元が弧を描く。

「椀、大丈夫ですか？」

何を言つてゐるのかと思つた。そして氣づかれる。椀を握る
手が力タカタを震えている。指摘され、頭がかつとした。

自覚してしまえば、不安定な椀は踊るように手指の間から飛び出
すかに思えた。止めようとするほどに震えが止まらなくなる。悟空
は思嵐が辱めにどう対応するのか、にやにやと見物している。お前
らは、と思嵐の内に何かが頭をもたげた。

それはかつての目も眩む怒りだ。

杯を強く握り、私は、と思い出す。

私は、こいつらの、昆虫の？根を巻り、脚をもいで愉しむにも似
た稚氣を憎悪してきたのだ。

お前達は知らない。知らうとするよりも思つともないだらう。

何の力もないということ。圧倒的強者の蹂躪に、ただ縮こまつてやり過ごすしかできないということ。命など簡単に摘まれてしまう。惨めさ。辛さ。恐ろしさ。五百年の懲罰でさえ、この大妖にそれらを教えることはできなかつたのだろう。

ならば指を指して笑えればいい。

「私は無力な人の身、お前の助けなくば容易に横死しよう」

悟空がおやと手を止め注視するけはいがあった。

「人間の身体はとても脆弱だ。お前達のような存在の気紛れな手出し一つで簡単に絶命する。その上病魔疾病、天災飢饉、戦など数限りない災いに常に脅かされている。だが、人にとっての災いなど、お前達には何の脅威にもならないだろう。お前達の身体は頑強だ。まして神通力広大なお前には想像もつくまい。我ら人の身にはどれひとつとしてままならず、どの災いも死ぬほど恐ろしい。人はその恐ろしさと常に向き合わされる。生まれてから死ぬまで、一瞬たりとも逃れることはできん」

この恐怖は、決して分からぬだろう。生老病死の恐怖を抱えて人は生きていく。不老不死の神仙妖怪には知り得ぬ恐怖だ。お前達が虫けらのように扱う人が誰しも向き合ひ、そのことをもお前達は知らないだろう。

「お前達なら人が向き合つ恐怖に耐えられるだろうか？」

私はそう思えない。だが、無意味な仮定、戯れ言だつたな、といつたん締めくくる。

「最初に言つておこう。私は恐ろしさの前に、これからいざれみつともなく醜態を晒すだろうし、泣いて喚いて逃げ出すかもしれない。これでも前科は山ほどある。だが地べたを這つてでも西へ征く。他の命でつないできた生き汚さだから、簡単に旅が中座するとは思わないことだな」

長台詞に一呼吸置く。

「とはいえ、旅は長く困難は目に見えている。まして私は妖怪の前に無力だ。お前がいなくては困る。必ずお前に譲つてもらう。それ

に不服はないはずだ。お前はすでに承知している。そうだろう?

お前の本当の考えなど私の知ったことではないが、お前も何らか理由があつて同行しているのだろう。利害関係に準じて互いに互いの役目を果たせ。美しい師弟関係など望むべくもない、そんなもの吐き気がする。お前なぞしょせん妖怪、信を置くつもりなどはじめからない。妖怪など皆死ねばいい。だが私の考えなど、それこそお前も知つたことではないだろう。互いに違のことなど知らぬ、連れの片方はお前も含め妖怪は皆死ねばいいと思つてはいる、もう片割れのお前はお前で何か胸三寸があるだろう

それでもともに西へ往く。

異論はあるか?

長々と吐き出して尋ねたが、答えなど求めていない。

「んー、異論はないですよ。俺はあんたを護つて西へ往きましょう。泣こうが喚こうが途中止めたいと言おうが、引きずつても連れていきます。ただ護るにもやりやすさつてものがありますからね、俺の力に信は置いていただきたいのですね」

肩を適当に鳴らし、付け加えた。

「それと、他人をからかうのは俺の性分でしてね。まあ大目に見てもらえるとありがたい。何しろ天帝に釈迦すらおちよくなつたんですからね」

思嵐は首肯し、先程のことだが、と切り出した。

「一つ、礼だけはいつておく」

悟空はきょとんと目を丸くし、次の瞬間には腹を抱えて爆笑した。
「い、いやー、いい具合にねじ曲がつてますね、お師さん! ちょっとだけ好きになりそうですよー」

好きなだけ笑え、と思嵐は酷い気分の中、最初よりは多少ましな気持ちで夕餉を口にした。妖怪は皆憎い、死んでしまえ。だが、悟

空に命を救われたことには変わりない。悟空にとつて大した徒労ではなかつたかもしない。それでもその事実は曲げられず、感謝の気持ちも本物だ。思嵐は他人に何度も救われた。救われた分だけ、命の尊さを多少なりとも知つてゐるつもりだ。その上、彼にはこれから命を預けることになる。文字通り、命綱となろう。だが、造反するかもしれない縄一本に命運をかけるつもりはない。恵岸行者によれば、觀世音菩薩が用意した従者は三。

残り一人は、悟空ほど癡がなければよいが。あまり期待せぬ方がよいだらうなと嘆息する。

同時に思嵐は揺らぐ炎を見つめ、まだ見ぬ玄裝に思いを馳せた。この、同じ星空の下を、かの僧も歩いているのか。

空の下、つながっている。

しかし、母も、高蘭も、師父も。どれほど歩くにしても、脚を棒にして彷徨つても、もつゞこにもいない。生きている限りなのだ。時も隔たれてしまった。

私は、こんな遠いところまできた。

この道程を、彼らが見てゐるわけではない。彼らはどこにもいない。それでも、私が生きていることが彼らの生きた証であるように思える。ならば、彼らに報いるよう、生きなければならぬ。の中に彼らの欠片がある。だから、彼らとともに私はこの道程を往く。

どんなに恐ろしくとも。

ウスガラ国は高老莊。

地理的にはチベットにあたり、高という姓の家が多い村（莊）と思つていただきたい。

思嵐一行は、そこで商家高大公の婿養子 その正体は豚の妖怪とひと悶着を起こすも、それは觀世音菩薩がすでに、

『猪悟能』

の法名を授け、来るべき日、取經の者の弟子となり、西天へともをするべく用意した者であった。

この猪悟能、元は天の川を管理し、八万の軍を指揮する『天蓬元帥（水軍司令官）』であったが、蟠桃会で酒に酔つたとき広寒宮（月の宮殿）に踏み込んで、嫦娥（じょうが）という月の仙女に襲いかかり、玉帝に一千つち打たれた末に天界を追放されたという呆れた経歴の持ち主である。魂を下界に投げ落とされた際、あやまつて雌豚の腹に入り込んでしまい、豚の妖怪と成り果ててしまつたわけだが、かの妖怪に授けられた法名はその姿にあやかつている。

『猪』

とは豚、イノシシのことであり、『猪悟能』は豚の精にちなんで姓を定められたわけだ。

菩薩もしゃれた真似をする、とは悟空の言であった。

「大兄、そりやあひでえよ。俺ア真剣に悩んだんだぜ。天河の天蓬元帥といえば、水も滴るいい男つてんでえ女も男も切らしたこたあなかつたんだからよお。それがいまや豚。あー豚。性欲より食欲が勝るつてんだから」

まあいいけどよおーと耳の穴をほじりながら、身の丈にあわぬ九つの歯のついた馬鍬を担ぐのは、だらしなく着物をはだけた妖美に

中性的な容姿の男で、黒髪を結い上げると女のように頭に簪をざくざくと適当に挿している。興奮すると黒い豚の化けものの本相をあらわすのだが、今は紅でも引いたかのように濡れ濡れと赤い唇もなまめかしい。容姿が艶やであるだけに、言動のだらしなさ、粗はかえつて不思議な不一致の魅力となつていて、女犯をおかして下界に投げ落とされたというの頷ける話ではある。

「八戒」

思嵐は馬上から眉根を寄せて咎めた。この白馬も、ただの馬ではないが、それはまた別の話とする。

さて、この思嵐が呼んだ『八戒』とは、猪悟能の呼び名である。すでに菩薩に法名を頂戴し、更にはその教化でハつの忌みものをしていたと聞き及び、今後も精進を破ることのないよう思嵐が呼び名としたものだ。一種の釘刺しでもある。

「はいはーい、師父、申し訳ありません」

咎められ、八戒は実に軽い返事である。

思嵐は馬上でつぶしたくなつた。この面子の中での唯一気遣いとこゝものを知っている白馬はこころなし、心配そうに白らの背を振り返り、歩を緩めた。なんでもない、と頭を振り、手綱を握りなおす。貴様ら、少しは白馬を見習えと心中ののしつても罰はあるまい。

「お師さま。兄弟子が『悟空』で兄弟子が『悟能』とは、これもまた菩薩も語呂合わせがよいですね。あつはつはつ」

一方兄弟子がわざとらしく皮肉つていたが、思嵐は無視した。付き合いかぎれない。

兄弟子はひょうひょうとした油断ならぬ皮肉屋で、兄弟子は女癖の悪い現在大食漢とは、これいかに。

ため息しか出でこない。

素性はともかく、八戒という弟子を得て、更に黄風嶺こうふうれいを過ぎ、やがて一行は波浪逆巻く大河へと辿り着いた。

「これは・・・・・・」

思嵐は白馬の脚を止めさせ、荒れ狂う波に呆然と呟いた。
難所である。

じつと田を凝らすつか、河の傍にあるひとつ建石に田を奪われた。

文字が大書して彫り付けてある。

『流沙河』

更に石碑を見れば、小さな文字で

落ちたが最後、鳥の羽のかるきすら浮かべず 弱水の流れる

などといった意味あいの、四行句が刻まれていて。

これは下手に強行軍ともいかない。鳥の羽が浮かばないほど浮力の少ない水質では、白馬で無理やり渡ろうとすれば、そのまま水底に沈んで一度と浮かび上がれないだろう。このようなところで溺死するわけにはいかない。

とうとうと流れる大河を前に、立ち尽くす思嵐であったが、その思考を破る明るい声があった。

「よし。豚。いっぱつ行ってこい」

ちょっととその辺までお使いにいってきなさい、といった軽々しさでこれは悟空。

「ええーっ 僕！？ なんでだよー、兄貴がいってくれよ」
指名された八戒はおのれを指差し、不満をあらわにした。

「馬鹿も休み休みにしなさい。この豚野郎。てめーもともと天の川の天蓬元帥（水軍司令官）だろ？が。お前が行かないで誰が行く」
ひらひらと手をふつて、いや狗相手に「しつしつ」とやるような具合で悟空は容赦がない。

「酷いよ。酷いよ。俺が豚だからって豚野郎とか酷いよ」

そこなのか、八戒。などと思嵐は悄然とする弟子の思考回路に疑

問を覚えなくもなかつたが、保身第一で弟子たちの会話に割り込む
氣は起こらなかつた。

割り込んだとて、疲労するだけなのは目に見えている。

八戒はぶつぶついいながら、かつて行李を地面に下ろすと、己の袖を捲り上げた。

「ちくしょう、俺が溺死したらここに立派な石碑を建ててくださいよ。いや、やっぱり嫌だ。言いだしつべの兄貴が行けばいいんだ」

「ほら、とつとと行け」

背後から悟空が蹴りつけた。

派手な水音を立てて、八戒が大河に落ち、あつとう間波浪に呑み込まれる。

そして浮かび上がつてこない。

それきり音沙汰もない。

さすがに思風の背中を冷たい汗が流れた。

「う……悟空……」

さすがに今のはまづくはないか。

師匠の心の声を読み取つたか、悟空はしばしの沈黙の後、不自然に明るい笑顔で振り仰いだ。

「大丈夫です。八戒の尊い犠牲を忘れはしませんよ」

お前が殺したし！！！

その時だ。

大河が身を捩り、その大波の間から『ペツ』という勢いで、人影を吐き出した。

「うぐえつ げほつ げほつ がはつ」

元が水軍の長である割に、思い切り水にむせている八戒である。ぼたぼたと水滴をしたたらせながら膝を地面について、身体を折れ曲がらせ、大地をかきむしって必死に水を吐き出している。

「お前溺れたのか」

呆れを通り越した冷たい眼差しをぐさぐさと刺す悟空に、

「おりやあ、今や肉の体はただの豚なんだよー。昔みたいにいかね

つて、そうじやなくて、氣をつける！ 水底になんかいるぞ……！」
「まだ苦しげに八戒が鋭い警告を放つ。

「……」

流沙河が生き物のようにうねった。

その瞬間。

水流を頭蓋が押し上げ、一匹の水妖が水間に姿をあらわしていた。

「顔色悪っ

悟空が空氣を読まずに遠眼鏡のしぐさで指摘する。

思わず弟子を九環の錫杖で馬上より打ち据えようかと思った思嵐
だが、水妖の顔色を見て、同意せざるを得ないとこりがあった。

青白いというより、青黒い。今にも喀血しそうな血の氣の悪さで
ある。

病弱であった己の母が思い出され、つい水妖に「大丈夫か」と声
をかけたくなつた自分を抑制せねばならなかつたこと自体どうかし
ている思嵐である。

一方水妖は、悟空の失礼な言も無視して、血の巡りの悪い容貌で
おどろおどろしく告げた。

「己の棲家にこのよくな塵を捨てるとは貴様ら許さぬ」

地を這う低音に、塵呼ばわりされた八戒が抗議の声を上げるのを、
ぐしゃりと右足の裏で悟空が地面につつぶさせて、痙攣しながらも
次第に息があがり、「あ、兄貴、もっと」とねだる弟弟子をさらに
ぐりぐり踏みにじる。嫌な悦びの方面に最近目覚めつつある八戒で
あるが、悟空が確信犯的に弟弟子の嗜好を加速させている節に、思
嵐は見てみぬふりをすることにした。正直かかわりあいたくない。

悟空がにやにやと「ならばどうする」と言いの手をいれば、
「己は今虫の居所が悪くてな、貴様らの命で購つてもらおうぞ」
水妖はぬめる瞳で一行を睨み据えた。

「はっ」

悟空が嘲笑とともに吐き捨てた。

「命で購うのはてめえの方だ。泣いて謝つても許してやらねえぞ」

そして足元の芋虫を蹴り上げる。

「この八戒が！！」

「ええっ 僕え！！！？」

腹を蹴られて飛び上がった八戒が涙目で叫ぶ。

この孫悟空行者、極度の面倒くさがりであった。

おちよくなれていると思ったのか、殺氣を垂れ流し始めた水妖に、思嵐はどうにか説得を試みようとしたのだが、すでに時遅く。

水中より躍り上がった水妖は、己の得物である宝杖を振りかざした。

「うお、俺か！ やつてらんね！！」

迎え撃つは八戒。

太上老君より授かつた九齒(きゅうし)の馬鍬で襲い掛かる宝杖を食い込ませる。

「ほう、間抜けな馬鍬のくせに、やるではないか。農作業でもしていたほうが似合いと思うがな」

揶揄し、凶悪に笑う水妖の人相の酷さはたまらない。水に濡れた黒いざんばら髪が青い顔に零れ落ち、瘦身であることもあいまってか、落ち武者のような壮絶さである。

「ただの馬鍬じゃねえつあと、農作業はお手のものだぜつ」

愛用の馬鍬を馬鹿にされ、八戒は自慢にならぬことを言い返した。実際にこの九齒の馬鍬、彼が天蓬元帥に任命された時玉帝から下賜された品なのだが、下界落ちして、農作業に使われていた。

「互角と思うなよ！」

怒りに任せ、まぐわを斜めに構えた八戒が吼える。

気のせいいか、形のよい鼻が次第に醜く突き出し、色しろの肌は黒い産毛へと覆われ始めていた。気のせいではない。比ゆではなく、その面貌は豚のそれへと変化していく。いや、変化が溶けてゆくといつたほうが正しいか。一見色男ではあるが、その本相は豚。興奮のあまり、術が解けて、元の姿が浮かび上がってきたのだった。

「貴様、豚の妖怪か！！」

「ようぶつ

「しゃらぐせえつ 豚で悪いかこのやうひーー 僕を豚豚ののしつ
ていいのは兄貴と師父だけだあああ」

とんでもない台詞が混じっていたようだが、思嵐は聞かなかつた
ことにした。

さても一匹は岸辺で十合以上打ち合い、両者実力が拮抗している
のか決着がつかない。

焚きつけた悟空といえば、先ほどのハ戒のよつて耳の穴に指を差
し込んで完全に傍観する態である。

これでは日が暮れる。

思嵐は今度こそ本腰を入れて仲裁しようと、はっとその目を水
妖の胸元に釘付けにされた。

首飾りだ。

せらせらと白い……氣づいて、思嵐は口元を咄嗟に覆つ。
あれは。

ざわ、と全身が泡立つた。
あれは、骸骨の首飾りだ。

111のつの

じゅずづなぎの

されこひべ

田の前に赤い紗がかかる。

鈍器で後頭部を殴られたかと思つほど衝撃に、思嵐の時間が止
まる。

頭が激しく痛む。

何かが脳裏に閃こいつとしている。

不意に、菩薩に引き合わされたあの日、額を指差され、何事か囁
かれたことが思い出された。

九つの数珠繫ぎにされた頭蓋骨。

それを水妖は胸元に下げていた。

九つの

人骨

流沙

旅人

僧

九人の

僧

旅

取経

流沙

天剣

水妖

飢え

激しい飢え

私は

私は

私は

私は

私は

私は

私は

私は

食われた

九回

九度とも

食われた

九つの頭蓋骨

あの、九つの骸骨は あれは、『私』ではないか！！

それは、雷打たれたがごとき天啓だった。

胸をかきむしる何かが重たげに頭ももたげゆく。

頭がい骨の中で焦燥を搔き立てる銅羅の音が、がんがんと多重奏に響き渡る。

九回だ。九回とも食われた。

私は。

彼は。

あれは。

あれらは。

僧だった。

前も、その前も、その前も前も前も！

『私』は取経の僧だった。

遠い昔。

それとも前世。

あるいは仏法の掌たなじこゑ、無限に連なる三三世界のどこかで。

一人の僧が天竺をを目指し、旅に出た。難所を越え、足を棒にして歩き、やがてとうとうと流れる大河に出た。その大河の名を『流沙河』。幅広は遠く、水底は深きこと極まり、鳥の羽根のかかるきす

ら浮かべず、葦の花の流るる。稀に見る弱水の川である。困り果てた旅の僧侶は、流沙河に一匹の水妖を見た。

あ、と息を呑んだ瞬間、僧侶の前に、蒼穹よりひと振りの天剣、

稻妻の「」とき速さで飛来し、水妖の腹を貫く。

驚き打たれる僧に、腹から天剣を引き抜き、水妖は口を開いた。

「驚いたか、旅の僧よ」

「はい、驚きました。貴方はいったい、そしてその剣はいったい「知りたいか。ならば語ろう。己は、今はこのような醜惡ななりではあるが、はじめから妖魔であったわけではない。その前身は天神であつた」

「なんと。その天神が何故いまそのような姿に」

「元は天界の捲簾大將ゝケンレンタイシヨウ（玉帝の御簾を巻き上げるお側仕え）であつたが、蟠桃会の際、玉帝の宝である玻璃の杯さかづきを不注意で割つてしまつた罪で、その怒りにふれ、八百回鞭で打ちれた末に下界へ追放されたのだ」

そのまま骨ばった指の鉤爪が天を指さす。

「更には、こうして七日に一度天より鋭い剣が飛来して、己の脇腹を貫く。この責め苦をもう何年も何十年も何百年も繰り返してある」僧はあまりの惨たらしい罰に同情したが、いかな仏弟子とはいえ、ただ人の自分にできることもない。

「己は天神の魂まで失つたつもりはなかつたが、七日ごとにふつてくれる飛劍の苦しさ耐えがたく、その上飢えになんでは、人を取り食らうようになったのだ。己は餓えておる。餓えておるのだ、旅の僧よ」

水妖は声を荒げたわけではない。静かに淡々と告げた。であるがゆえに、その魂の慟哭は、胸揺さぶる重苦しい絶望を、暗い悔恨を、骨身まで刺す凍えた悲鳴を、ありありと伝えるものであつた。

「今や天神の誇りも地まで落ち、飢えと渴きを癒すため、通りがかる旅の者をとつて食らう妖仙と成り果てた。もう何十人殺したか、それとも何百人食ろうたか、数も忘れ、はては数えることさえも止

めた。殺して食ひうた骸は、この鳥の羽すら浮かばぬ流沙河に沈めたが、不思議なことに、八つのそれこうべだけは沈めても沈めても浮かび上がってきた。この河は弱水ゆえ、されこうべなど浮かび上がってくるはずもあるまいに、何故かこの八つだけが沈まぬ

水妖は後半ほどんど独り言のように咳き、暗く鈍く光る眼で『私』を見た。

「さて、旅の僧よ。身の上話もこれまで。そなたの肉は甘いか。そなたの血潮は温かいか。そなたのそれこうべは流沙に沈むであろうか、それとも」

遠く、粘りつくような熱を帯びた声が大声でもないのに鼓膜を揺らした。

名も知らぬ鳥が天高く鳴く。

『私』の足は、縫いつけられたよつこ一歩も動かなかつた。

まだ。

まだ西天にはいたらぬ。

ここはまだ旅の途中。

志半ばにして、膝を折り、妖魔の類に食り喰らわれるのか。

何も私は成し遂げておらぬ。私はまだ何者でもない。

こんなところで無残に屍を晒し、流沙に沈められることをよしとしようものか。

いいや沈まぬ。

身体は喰らわれ、水底に捨てられようとも、この志まで沈むものではない。

この肉体が妖魔の血肉となり、骨は流沙河に沈もうとも、我が心は、一條光となつて西天を目指そつ。

それがならぬなら、どうか御仏よ、聞き届けさせたまえ。

我が遺志を誰か次代につなげさせたまえ。

地を這い、人の難にあい、氷壁の寒風に吹かれ、白い熱砂に飢え
乾き、狐狸野党妖魔の類に我が身晒され、疾病病魔に苦しみながら、
それでも一歩一歩、西へ。西へゆこうぞ。

願わくば、二人同行我が魂を運びたまえ。

我が志は、この弱水にも沈まぬゆえ。

我が智の宿りしれこうべもまた。

⋮⋮⋮

⋮⋮⋮ちがう

思風は叫んだ。絶叫した。そうではない。『私』は、わたしは、
彼は、私は、そうじやない。

肉体が死のうとも志は西天へ？

違うだろう。そうじやないだろう。

次代へ託す？

違う。違う。違う。

そうではない。

わたしは。

塗金が剥がれおち、ぐしゃぐしゃの本音が顔を覗かせて産声を上げる。

げる。

本当は。

死にたくない。

怖い。

生きながらにして食われるなど、そんな死に方があるか。怖い。
厭だ。恐ろしい。何故私が。他に誰でもいいではないか、死んだ方
がよい愚物など世にあふれておるというのに、何故この私が妖魔の
餌食にならねばならぬ！！！ ひい、厭だ。怖い、厭だ、いや、止
めてくれ、痛いつ ひいいい、止めてくれ止めてやめてやめてや
め、

あああああ
ぎやああああつ
たす、
ひ、あが、
げ、ああああああああああ

だ
や
だ
れ
だ
れ
か
だ
れ
か
だ
れ
か
だ
れ
か

お願いだと激痛に失せる理性のかけら、喉も裂けようと血を吐く
ように絶叫した。

たすけて

「せこや」

と安請け合いする返答があつた。とたん、激痛は霧散し、思嵐は闇の底から光の中へと引きずり出された。視界は白濁とし、身体も真綿のようにぐんにゃりと弛緩して感覚を失つていたが、次第に五感がもどつてくると、思嵐は己の現在の態勢にぎょっとした。

「「」悟空！」

舌がもつれた思風に、覗き込む姿勢で悟空はうすら笑いを浮かべた。

「ああ、いきなり落馬したんで、」「、不肖の弟子は師父をお助けしたわけですよ。いやあ、自発的にお師さまを助けるなんて、俺もちゃんと弟子らしくしているじゃないですか。我ながら感心します」白馬の傍り、悟空は片膝を地面につき、師の体を横抱きにして間近にぐっと顔を寄せた。天界荒らしの罰に太上老君の八卦炉でいぶされたという燃えるように真っ紅な火眼金睛の迫力に思わず、ひいと喉が鳴りそうになるのをなんとかこらえる。

「しかし、お師さまのんきというか阿呆というか間抜けというか。弟子が戦っているというのに、乗馬したまま寝こけるたあ、この悟空、師父の図太さ、いや肝の太さに恐れ入りました。白昼夢で馬鹿でかい悲鳴を上げて転げ落ちてきた時には、こんな頭のおかしな人はこのまま大地と仲良くなつていただこうかと一瞬愚考した次第ですが、一応身辺警護が俺の仕事なんでどうせ受け止ませていただきましたけれどもねえ」

敬つているのかけなしているのか、いや後者であるのは明白なのが、もって回った言い方は止めろと思つ。

「……」「寧に説明をどつも」

「いやなに、このくらい。どうせに身体を受け止める」と比べれば全然

どこまでも引きずる。

「それで、お師さま。怖い夢でも見ましたかね？」

からかう口調の悟空に、一瞬思風は無言となり、

「……ああ」

「おやまあ、存外素直にお認めですね」

「もういい、離せ」

「へいへい」

九環の錫杖にすがり、ふらつく足で立ち上ると、今更ながら滝

のような汗でぐっしょり衣を濡らしていくことに気づき、大きく嘆息する。そのまま思嵐は岸部で打ち合つ八戒と水妖に視線を戻した。

恐ろしい夢か。

考えてみれば、いつも悪夢を見ているようなものだ。
「己が生き汚さの。

そしてそれがもたらす結果を。

「妖気にでも当たられましたかね」

仮初の弟子がどうでもよさそうに呟く声が聞こえた。

ぐつぐつと脳が煮え立つような痛みがある。

田の奥の疼痛を堪え、思嵐は悟空を押しのけると、前後にふりつく身体でなんとか立ち上がった。

背後、弟子が師のやせ我慢と意地を失笑するけはいを感じたが、捨て置く。

じゅりんつ

流沙河の岸辺に、九環の錫杖を打ちつけるよつとして突きたてた。

「各々、武器を、おさめい！」

腹を震わす大音声で呼びかける。

水妖、一番弟子とともに、河岸に仁王立ちする人間の姿に手を止め、注視する。

交差せんとした互いの宝杖と九齒のまぐわは、宙に浮いた形だ。いわゆる奇襲戦法、猫騙しのようなものである。

思嵐は、今が機会とばかりたたみかけた。

「水妖よ、貴殿の住処を騒がしたことは謝ろつ。我らに他意はなく、ただこの渡河不能の流沙河を前に試行錯誤の末、不幸な水難の事故にあつたに過ぎない」

不幸な事故ねえ、との創出原因である悟空が後ろでなにやら茶

々を入れるが、完全に無視する。

「我らはただここを往きて通りすぎたいだけだ。願わくば、妨げではなく、貴殿の助力を請いたいが、何もただでとはいわぬ。法の力を込めたこの『ふくべ』と交換条件ではどうか」

懷より赤い夕顔の実を取り出すと、水妖によく見えるようさげもつてみせた。

これは出立の折、恵岸行者より、選別代わりにもらつたもので、水難の折にこそ役立つであろうと意味深な言葉を付して渡されたのを今こそその『水難』なのではないかと思つたゆえの行動だった。どちらかというと、恵岸行者の先見に不気味なものを感じる部分もあるが、実利は容易にそれを凌ぐ。

原理など分からなくとも、得体が知れずとも、現在を朽ちずに、明日へ進むことができるのなら、構わない。

思嵐には今が精一杯だ。

一方、水妖は凝じつと赤いふくべを見つめている。

「おうい

得物を差し向けたまま、身の置き所がなくなつたのか、八戒が呼びかけるが、水妖は意に介さない。

不意に、水妖は宝杖をおろした。

文字通り、武器をおさめたのである。

「一つ聞こう」

水妖は顔色も悪く、ゆつくりと思嵐の目を見つめた。

「貴方は、身なりは唐僧のようだが、ただ人ではあるまい。そのふくべ、菩薩に直接勧化を受けた者か」

ふくべを見て、何故察したものか。だが、問題はそこではない。

「そうだといつたらどうする?」

「・・・・・」

沈黙でもつて応じる水妖に、思嵐は駆け引きを投げることにした。これは、馬鹿正直でまじめな手合いだと、同類に近いと本能で察したからである。こうした相手には、何より正道が近道となることを、

思嵐は口に照らし合わせて心得ていた。

「菩薩にお申通りしたことはある。だが、仏弟子として教化いただいたわけではない。一種の取引があつた。それまでだ」

「取引とは

「理由は私事ゆえ話さぬ。だが、内容については話せる。取教のため、天竺まで行く。西へ。西へ往く旅だ」

水妖の塗り潰したような虚ろな眼窓に何かが過ぎつた。

光か。熱か。それとも。

「・・・・・なるほど。色々と、合点がいった」

ふと水妖は自嘲めいた不器用な笑いで口元を僅かに戦慄かせた。

「吾は、いや私は『沙悟浄』といふ」

その名を聞き及ぶや、思嵐もまた目を見張り、

「その法名 観世音菩薩か」

菩薩の張り巡らした糸に息をつめた。菩薩は碁の名手、盤上はすでにいくつもの布石が敷かれ、最後まで見通されているのではない

か。

悟空。悟能。悟浄。

法名は、それぞれ『悟』を織り交ぜ、菩薩が用意した三の布石が揃つたのである。

「いかにも。私もまた取引を受け入れた。取經の者の保護をつかまつる。とはいへ、これまで私がこの手にかけ、腸はらわたを瞬つた九人の取經者のされこうべは、この首にかけておりますが」

急に口調を改めた悟浄は馬鹿正直だ。

菩薩との取引がなければ、貴方もこうなつていた、というのだから。わざわざそれを口にする意図は、

「それゆえ、このされこうべはここにあり、また法の船となる」
そのためだった。

ふくべより、しゅるしゅると蔓が吹き上がり、たちまち九つのさ
れこうべを縦横に結び上げる。何事かと見守る前で、虚空を望むど
くろの眼窓より

ぼつ
一つ、

ぼつ

また一つと、青い炎が噴き出していく。

揺らめく紗のような炎は天へ伸び上がり、濃淡を緩やかに調節し
ながら、次第に某かの形をとっていく。それはあたかも白い骨が青
い燐により受肉していくかに見えた。やがて点と点は線に結びつき、
線は立体の辺となり、九つのどくろを基点に、一艘の小舟がどうど
ろと姿を現した。忍び寄る夕闇に燐光を吹き零す浮き上がる姿は幽
玄でありながら、この世のものではない不気味さを感じさせる。

波浪は嘘のように静まり返っている。固唾をのんと見守る先で、
赤いふくべの灯籠をかかげた小舟は、音もなく水辺へと滑り出した。
漆黒の鏡のような水面に、青色の炎を弾き、まさに『幽靈舟』は無
人のままじつと何者かの乗船を待つてゐるのだった。

その虚ろでありながら容易ならぬ存在感、確かにそれは人為及ば
ぬ『法の舟』であった。

「この『法の舟』ならば、流沙河の渡航も可能でありましょう」
側に控えていた悟浄の言葉に、思風は小舟の威容へと呑まれてい
た己に気づかされた。

青く、水と空気に解けていきそうな舟は、美しく、そして哀しか

つた。何をこうまで揺さぶられるのかといえば、それは死者の舟であるからだつた。

そして、その死者を、踏みつけてゆかねばならぬ。

捻りも何もない。皮肉でもない。言葉の通りである。他者を犠牲に、踏み台に、己の命を購い、困難を回避し、急死に一生を得るは、思嵐のいわば得意であつた。それを嫌惡しながらも拒みきれない。助けられたことに誰よりも安堵し、脅威に立ち向かおうと思つはしから、何を振り捨てでも逃げたいと願う自分がいる。他者を踏みにじつてでも、生き延びたい。いや、生きたいのではない。死にたくないのだ。死に纏わる、痛み、恐怖、絶望、恐ろしいものからひたすら身を隠し、縮こまつて脅威が去つていいくのを待つてゐる。その課程で、こちらに災いが降りかかるぬよう、己以外の命が摘み取られることを消極的に願つてさえいる。

あさましいと思う。だが、浅ましい自分を嫌惡するより、他者を犠牲にする罪悪感よりもなお、何よりももつと強く、『恐れ』がある。

思嵐の自己嫌惡も、罪悪感も、矮小なものだと嘲笑するより、恐怖は遙かに全てを凌駕していく。誰かを失うよりも、恐ろしい。犠牲にするよりも、恐ろしい。恐ろしくて恐ろしくて堪らない。その己の有様のなんと惨めなことよ。同時に、己を憐れむような真似をしたくないとあがく自分がいる。それこそ、惨めに過ぎる。くだらない自尊心、だが歯を食いしばつて最後の堤を守らねば、本当の底無しに陥るだろう。自己憐憫は己を容易に食い尽くす怪物だ。目を反らさず、絶えず対峙し続けなければ、捕つて食われ、二度と立ち上がりなくなる。そのことを、痛いほど知つてゐる。そして痛いほど、必死に対峙する自分の足が震え、逃げたがつてゐることも知つてゐる。思嵐は振り子だ。あるいは針の先の断崖に立つており、一風吹けば、容易く折れ、右にも左にも振れ、正にも邪にも倒れるのだ。だから必死に立つてゐるのだ。その必死さを笑いたくば笑えばいいのだ。

私は何でもする。どれほど惨めで無様だらうと、かつこつを氣にしていられるほど余裕などない。
死者を踏みつけることも、本意ではないが、やらねばならぬのならやうう。

水面にけはいもなく青白い炎に包まれた小舟が浮かぶ。

思嵐は合掌した。

自然と頭が垂れた。

私も、先達のあなた方の一人であつたかもしれぬ。そして一人であつたと幻視し、それは真実か虚実かも分からぬことです。名も知らない。私であつたかもしれぬ先達の方々よ。あなた方を踏み台にしてゆきます。私は崇高な目的に身を捧げることはできず、私怨と私心のために西へ行くのです。私のような者のために、主が死に、母が死に、師が死にました。哀しく、辛く、苦しい。それでもまだ私は死にたくないと思い、そんな自分が惨めで仕方ありません。高潔でいられぬ自分が、高潔な人を踏みつけて生きてゆかれることが辛くて仕方ありません。辛さに耐えられぬ私は、そんな風に生きていたくないのです。死にたくない以上に、そう望むのです。いえ、死にたくないという気持ちはいつも私を脅かしています。常に揺れているのです。折れぬ為に、がむしゃらにひたすら進むよりないです。進むために、私はなんとしても西へ征きます。どうか、お力お貸しください。あなた方も西へ往こうとした。どんな理由かは今となつては分からぬ。それでも行こうとしたあなた方は、こんなところで道絶たれ、どれほど無念であつただろう。叶うなら、あなた方を連れて行きたい。あなた方の痛みを苦しみを知つたことで、無性にそう思う。どうか許してくれませんか。無力で愚かで無様でどうしようもない。そんな私でも、私は生きてゆきたい。胸はつて生きるために、ここで無念に留まるあなた達の力を借りることを、どうか許してはくれませんか。

思風は合掌したまま、垂れた頭をゆづくつと上げ、田蓋を開いた。

ゆるやれない……

茫洋と虚空を見つめる瞳からは光が失われる。

違ひ、許されたくなどない……

じみ上げてきた熱い塊が、涙となつて滑り落ちる。

私は、許されたくな。許して欲しくなどない。
私が私を許せない。

お母さん。師父。高蘭。

知つていろのよ。死者は何も云わない。許さない。怒りもしない。
だつてどこにもいない。

どこにもいないのだ。

残された生者だけが、死者の気持ちを狂つたように推し量るのだ。
許しを請うのは私。

許せないのも私。

全て私のよ……

勝手に贖罪して、私が私に許されたいだけ。

そして、生きるために口実^{くわい}・代償^{だいじょう}へに、いつまでも許されたくな
どないの。

そうすれば、罰を受け続ける自分に酔つていられるから。
死者の皮を被つた己に己自身を捧げ続ける。

自己陶醉という酩酊の海に溺れ続けていれば、私は生きていける
から。

でもやつぱり「まかせないの。

そもそもしないと、生きていけない自分に気づかれててしまつ。

どうか怨んで欲しい。浅ましいと怒つて欲しい。

一度と会えない。そんなこと気づきたくない。

盲目のままでいたせて欲しい。

許されたら、もう一步も進めない。

だから。

ナツシで、ナツシで、許して欲しくなったのよ……

「あら、これはこれは、三藏法師御一行様

場違いな甘い女の声。

ゆづくと、思嵐は時間が停止したかのような倦怠感の中振り返る。

忘れもしない、かつての悪夢が女の形をとる。女の背中に翼がある。女の顔に見覚えがある。

『壁に呪きつけたらぐちゅって』

『さやは、潰れ饅頭！』

お母さん。

思嵐は一瞬の思考の空白の後、視界を真っ赤に染めた。
目も眩む怒りによつて、視覚が色を変えるとは、知らなかつた。
指先の感覚がない。血が止つているのか、どくどくと脈打つてい
るのか、全く分からぬ。
気がつけば、思嵐は絶叫していた。

気に食わない

風が蕭々と吹いている。

河面は平らかに静まっている。

吉川元春

各も知らぬ鳥が天高く鳴き 羽音が思風の耳を打つた
ぶつり、と何かの糸が切れる音を思風は確かに聞いた。

たちまち時は動きだし、己が喉も裂けよと絶叫していることに気づく。

この女

ああこの女た

第六章 情報セキュリティ

と囁し立てた。

「おおお」と強風の音がする。思風の内を真っ黒な憎悪の化
物が荒てばら、ゴロ。

憎い！
許せぬ。

朱に染まる視界で、問う声がある。

奴らが、殺した。

奴らが、のうのうと生きてこぬ」とが。

「どうして許せる。どうして生きてゆける。喉元を突き上げる怒りに、憎しみに、言葉が刃となつて奴らを貫けばよいと願う。それほど舌鋒の鋭さをもつて、その罪状をたたきつけてやれればと思うのに、思嵐の舌はもつれ、意味のある言葉を発することすらできなかつた。

悔しい。

己の無様が悔しい。

指がぶるぶると震え、錫杖を握ることすらままならない。今や武において力なく、言葉においてもまた無力なのか。熱塊が氣道を塞ぐかのように、喉が引きつれる。

あまりの感情の昂ぶりに、言葉に詰まる思嵐を無視して、柳腰の女は大仰な仕草で悟空に拱手してみせた。

「ほほ、大兄は斎天大聖とお見受けする」

いかにも、と悟空が億劫げに顎をしゃくれば、

「お初にお申もじ仕る。鳳魔一族が末席、白雪バイシユと申します。大兄

の」「無事の」「復活、一族よりお祝い申し上げます」

「そりやどうも」

やる気のない悟空の応答に白雪は拱手を解き、

「さても不思議なこと、何故法師殿に、これほど怒りを買いましたか、妾には理由が分からぬゆえ、ご縁をお聞かせ願いたいが」

そのまま口元に白い指先をあてがい艶笑を向ける。

「まあ、たかが卑しい人間風情のこと、どうでもよろしいですわね」
その弓なりに弧を描く目つきは、虫蠅を見るような嘲りに満ちている。いや、嘲りですらない。無関心なのだ。

人の生き死になど、この女にとつて、興味関心の埒外なのだ。

それが私にとつての全てであつたとしても、この化け物にとつてはどうでもよいこと。

だから、簡単に私の全てを奪つて行つた。そして簡単に忘れてしまつ。ああ、その時、気に留めてさえいないことを、どうして覚えておける。

許せない。

絶対に許せない。

畜生。

畜生。

知らずして、思嵐の歯は呪詛を吐き出していた。

羽を開閉し、白雪が「まあ嫌だ」と眉根を寄せる。

「経文の代わりに呪詛とは、とんだ生臭坊主です」と。なああああ
にが許せないのかしら? あらあら、妾つてばどこかで貴方の恨み
でも買つていたのかしらああああああ? 見覚えがあああ、あるよ
うなああ、なにようなあああああ

女の声は粘着質に間延びする。それは、かつての女達の狂乱を思
い起させた。

『あのババア弱くてつまんなかつたよねえええ

『壁に叩き付けたら、ぐちゅって潰れちゃつたあああん

『きやはつ 潰れ饅頭まんじゅうつ』

『ここここさえええりおおおおおおおおおおおおおおおお

耳鳴りが。

「おおおおと耳鳴りがする。

吹き上げる風。

真っ暗にあきとを開けた隧道。

それは思嵐の恐怖の記憶であり、憎悪の咆哮の音もある。

「……ま」

切れ切れに口を衝いて出した言葉に、白雪が「はあ?」とことわし
げに聞き返す。

「貴様。殺してやる

決して大きな声ではなかつた。

先ほどの絶叫が嘘のように、恬淡とした聲音でもあつた。

あまりにも強い感情は、かえつて厭のなまきような平静をもたらす。

だが、無理矢理抑圧されたそれは、高温に溶解し、じろじろと渦

卷いて、その主にも制御ができない。

全身が心臓になつてしまつたかのような鼓動の音に突き動かされ、

思風は前に一步踏み出そつとした。

そう、踏み出そつとしたのだ。

しかし、実際には、一步も前に進めなかつた。

見えない壁が目前に立ちふさがるかのよう、思風はその場から動けずについた。

妖術ではない。

気圧されたわけでもない。

思風を足止めし、呪縛したのは 思風自身であった。

動けない。記憶が、恐怖が、思風を縛る。締め上げてなお、呼吸すらさせないばかりに縛り上げる。何もかも、危惧していく通りの茶番劇だ。

必死の怒りも、全ては誤魔化し。自分の卑しさを覆い隠すためのもの。

思風は憎悪よりも、恐怖が上回ることを何より恐れていたかもしれない。

現実に、あの化け物たちと対峙した時、己がどう振舞うのか、眠れぬ夜を数えて、何度も夢想した。

憎しみに囚われて、ハつ裂きにせよと打つてかかるか。憤怒のあまり、声すら出ぬか。いっそ捨て鉢に石でも投げるのか。

許さない、憎い、と恨み辛みの声がする。殺せ、仇を討て、と声は命じる。

奴らを想像の中に何度も殺した。

化け物たちに剣や徒手で、あるいは身一つに、計算一つすりできぬほどの激情のまま食つてかかる自分は容易に想像できた。

だがそれ以上に、拳一つ振り上げられない、一步も動くことのできない自分の姿を描くことは、更に容易であった。

思風は動けなかつた。

あの日、主人の屋敷の廊下で、へたり込み、動けなかつた。

あの日、高蘭に屋内へと突き飛ばされ、身を隠したまま動けなかつた。

あの日、逃げろと言ひ母を説得する時間を惜しみ、彼女を置き去りにした。

た。――――――――――――――――――――

あの日、師父を化け物どもの化にすることをわかつていて、私は

何にも

何にも変わっていないじゃないか。

何で命が惜しい。惜しくて当たり前だ。

でも、ビックリして拳一つ振り上げられない。右ひとつ投げられない。

いるのだろう。

口讀じくて、參めで、悔じくて、それなのに、思風は動くじが
できない。

錫杖をぎりぎりと握り締め、爪を立てる思嵐の手の内から、血が
伝つ。

急に白雪が身をよじり、頭をかきむしった。とつさに、思嵐はびくり、と肩を揺らし、後退しかける。そうしかけた自分に吐き気とめまいを催す。全身が桶の水をかぶつたかのように汗を噴出し、頭を打ち付ける狂ったような痛みに倒れてしまいそうになる。

ただ人の身に、膨れ上がる妖気は質量を持つた毒でしかない。耐えられない、と今にも逃げ出しそうな自分を抑えるだけで必死だ。

い。怖い。怖いよ、母さん。震えが止まらないよ。あの田から、ずっと怖くて怖くて仕方ないのよ。こんな自分が嫌だ。

嫌なのに、逃げてしまいたい。救われない。今逃げてしまつたら、もう一度と、立ち上がれない。

「なああああにい、こつちが下手に出でていれば、人間」ときがああ、腹が立つてしましましたわあ」

間延びした声が次第に殺氣を帶びていく。

「大兄の前ではしたない真似をするのはと思つてたけれどおお、お前、潰してしまおうか、ええ？ 潰れ饅頭にしてやろうかねえ、ええ？ あはは！ あ、あら。あれあれあれ！ 思い出した。珍しいこと。お前、亜山で牛魔王様が……」

女怪は何か言いかけたのだろう。

しかし、一度とその先を紡ぐことはなかつた。

「あば？」

自分の身に何が起きたのか分からぬ。そんな顔だつた。

「お前なあ、うるさいわ」

耳の穴をほじりながら、誠やる氣のない態で、悟空が如意棒をその頭蓋に一閃させるや、女怪は殴打の形に陥没していた。

ただ一つの肉塊と成り果てた女に、

「俺、女の金切り声が嫌いなんだわ。とにかくで、今牛魔王がビツのつて、あ、もう聞こえてねえか」

しまつたしまつた、俺つてばうつかりーとのどかにのたまう。脳漿にまみれた鉄棒を八戒の衣服で拭うと、抗議の罵声もビンふく風に、すたすたと思嵐の眼前まで歩み寄る、

「すんません、腹あ立つたもんで、ぶつ殺しちゃいましたあ。慈心不殺つて難しいもんですねえ」

わざわざ腰をかがめ、下から顔を覗き込んだ。

「で、聞いてますー？ お師さん、そこはあ、不肖の弟子に、仏法を説いてこじぞどばかり説教かますといりでしょ。まあ、その状態じやあ、無理つてもんですかねえ」

思嵐は顔面蒼白のままに、ただ立ち竦くしていた。

「『』……悟空、お前……」

「の大妖の意図がわからない。その不気味さが思嵐を混乱と恐怖の淵に追いやる。

「まあまあ、落ち着いて。とりあえずですねえ、勝手に喧嘩売らないでくれませんかね？ 僕がいくら優秀な護衛だからって、自ら相手の怒りを買つたんじゃないでしょう。僕、割とざるなんで、うつかりつてことがあるかもしれないじゃないですか。ちつとばかし見物決め込むつもりが、魔が差して見殺しにしちゃうかもしないし、そうすると具合が悪いでしょう、お互に」「

何を、どこわばった唇がかろうじて零すのをも無視して、悟空はペラペラと実に軽快に喋った。

「お師さまってば、本当に非力で紙装甲で、ぶつたたかれても刺されても簡単に死んでしまいますじゃないですか。うわあ、怖い怖い。俺の蚤の心臓にあんまり負担かけないでくださいや。消極的な自殺なんぞ止めてくださいよお。その気がなくても、その気があるとみなして死なない程度に痛めつけるのも俺はやぶさかじやあないんですけど、面倒くさいからやらないけれど」

錫杖を握り締めたまま、固まつてしまつて解けない思嵐の指を、一本一本引き剥がしながら、悟空は暗く赤と金に揺らめくその瞳に滴り落ちる血の色を映すと、ぞつとするような笑みを浮かべた。

「自傷行為とか、本当に引きますねえ。いいですか、俺の前で、一度とやんないでくださいよ。基本的に面倒くさいのは嫌いなんですが、ええ、死なない程度に痛めつけることもやぶさかではないので」「同じ言い回しを二回繰り返して、釘を刺すと、本当に晴れやかに

笑つた。

「おいおい、この人、氣絶してると、俺けっここうこうと言つてる最中だつたよな？」

笑顔ではあるが、額に血管が浮いているを見咎めて、八戒は服の汚れを叩き落としながらぶつぶつ文句を言つのをやめて、

「そりや、兄貴。錫無理やり放させたから、緊張が切れたんでしょうや。あと、そんだけ妖氣ぶつ放してたら、俺でも気絶してえよ」

「おひ、悪いな兄弟」

ぐにやりと弛緩した師を腰元を腕一本で抱えて、悟空はいかにも心のこもらぬ返答だ。

「ところで兄貴。今さつき、そのおばはんから、なんか俺やーな單語聞いた氣がするんですが、あれって空耳？ それとも兄貴口封じ？」

「空耳でもなけりや、口封じでもねえよ。俺だつて最後まで聞いた方がよかつたかなつてちょっと後悔してるところだ。どうも穩やかじゃねえな。天数傾くというか、元に戻り始めたといつべきか、どうせろくでもねえ御仏のお導きならぬ陰謀といつべきか。少なくとも……」

この変節の集中は偶然じやねえな、と飲み込む。

不自然には、人為ならぬ天意がある。何がしかの意図が働いていふるとみるべきか。

しばし考え込む風の悟空であつたが、腕の中の體にこまさら意識を向けると、再度腹が立つたものか、

「とりあえず、こいつは流沙河に捨てていくか！」

「ちょっと止めてください。兄貴それは鬼畜の仕業です」

どこまで本気かわからぬ悟空の言葉に、半ば本気のハ戒の命いの手が入る。

存在を忘れ去られた水妖がのつそりと近寄つて「口はどうしたら……」と尋ね、すげなく兄弟子たちにされるのは思風が田覚めるほんの少し前のことであつた。

玄奘三蔵2（前書き）

史実をモデルにしたフィクションです。

ところ変わって、玄奘三蔵である。

吉兆を得て、唐を密出国した後、玄奘は現在唐の西境の関門たる玉門關を目前とするに至っていた。

国境付近ではこの高僧の出奔にあたつて次々と捕縛の手がかかり、危つきを逃れたのではあるが、次なる難が玄奘を待ち構えていた。これまで乗つて来た馬が死に、仕方なく新しい馬を購入してはみたものの、今後の道中の馬子（馬を曳く人）が見つからずにいたのである。

玄奘は仏の道や語学に堪能であるが、砂漠を横断するに当たっては、直接的にそれらは役に立たない。だが、己の手札を駆使して、道中に詳しい水先案内人を雇うことで問題は解決した。はずであつた。

この案内人は日によく焼けた胡人ソグドであつたが、砂漠の往路をよく知つているという。玄奘は砂漠越えには、若く美しい馬の方がよいのではないかと思ったが、彼の紹介してくれた老胡人が何度も砂漠を往復したことのある年老いた馬がよいと助言をくれるに従い、そういうものかとその言葉に従つた。

経験則というものは、馬鹿にできないことを玄奘はよく知つていた。むろん、経験則ががちがちにかたまり、根拠を失つて暴走すれば、理性を欠いた悪習と成りはてる危険性もいやといふほど熟知していた。

昨今の中華における仏法の混迷、各々が諸説をほしゝままにする有様は、その惡習の近しい親戚といふところであろう。

玄奘は濁つた池の水底で宝探しをするかのような閉塞感に悩まされていた。中華では玄奘の搜し物は見つからなかつた。ならば、天竺に原本を求めよ。濁つた池を決壊させるべく、一度河の源流を引き入れて、すべてを洗い流してしまわねばなるまいとの過激な思いもある。それが全ての動機ではないが、少なくともその一端はある。

その高邁なのか傲慢なのか分からぬ思想も、やはり役には立たない。

玄奘は億劫そうに嘆息した。

己が喉元に鋭い刀が突きつけられているのを見るにつけ、実にやるせない気持ちに包まれながら。

玄奘に刀を突きつけているのは、かの砂漠の案内人だったのである。

「一つ疑問なのですが」

刺激せぬよう、ゆっくりと言葉を選ぶ。

「何故このような凶行を？ 何か私は気に障ることでもしましたか？」

顔面がつるりとしていて、喜怒哀樂がどうも曖昧模糊であり、半ば解脱氣味、飄々とものらりくらりとも形容される玄奘である。この問い合わせ、実は挑発行為ととられても仕方のない真正面ざつくりな内容ではあつたが、その半分外したようなとぼけた調子でもつて、刃傷沙汰を起こそうとしている案内人の気を削がせることに成功していた。これを人徳というのは中々得難いことであろう。

とはいへ、玄奘の氣質と加害者のそれがうまくぴたりとはまつたのだろう、元々案内人も凶行に及んでおきながら、どこか気の進まぬ風情であった。いかにもいたしかたなし、という思いがその浅黒い日焼けした面にありありと表れていたのである。

しかし、いかに気が進まぬ風であつても、實際ぐさりとやられてはたまらない。現実に鋭い刀は玄奘の喉元にあるのである。

「師よ。玉門関は中華と西域の境。これを見て、ここから先は西

域となります。更に西北へは、五烽（烽火台）があり、その北は砂漠です。水は五烽の下でしか得られず、しかし夜に水を盗もうとすればたちまち見張りの兵に見つかって殺されるでしょう。私にも家族があります。これ以上進むことはできません。師もどうか引き返してください」

切々と訴える若い胡人に、玄奘は首を横にふった。

「出国が禁じられているのは元より分かつてのこと。行く先々で、朝廷より私を捕らえるよう通牒がありました。しかし、朝廷の命に背いて通達を廃棄し、あるいは私を守つて西へゆかせ、詔に逆らう死にも値するような援助をしてくれた人々もいました」

この通牒は、「玄奘という僧がいる。彼は西蕃せいばんに赴こうと欲している。各地の州県はよろしく警戒を厳しくして捉えよ」との内容であつた。当時隋から唐へと行政が変わり、まだその支配が遠く西域に及ばぬにあたつて、国民の出国を厳しく禁じるがゆえであつた。

矢のよじな捕縛の諜文が行く手に回り、昼に潜んで夜に動く中、涼州の惠威法師やその遣わした弟子達、瓜州刺史の独孤達、州吏の李昌など、多くの人々が玄奘に同情し、また共感して、彼を西へ旅立たせてくれたのである。

「受けた恩義のためにも、今更引き返すことはできません」

彼らの犯した危険に報いなければならない。そして、それ以上に玄奘は諸説乱立の混迷の泥を雪いで、「己の疑問を解き明かしたい熱夢のじ」とき衝動につかれていたのである。

まだ道半ばすら至らず、どうして東へとつて引き返せよう。

死ぬ時は、一步でも西へ進んでみせる。それが真理へ一步でも近づくことであれば、命を対価にすることなど、どれほどのものか。それほどの対価を捧げねば、得られぬと知っている。捧げても、何一つかえつてこないかもしない。失うだけかもしない。

だが、ただでは死なぬ。死ぬならば、得てこそ死ぬ。ならば得るまでは死なぬ。

惜しいのは命ではない。惜しいのは時間だ。命尽きるまでの有限

の時間、一秒たりとも無駄にはできぬ。

人の命は儻い。それを玄奘は目にしてきた。彼は隋が統一を失い、末期に乱れて新たに唐へと王朝が代わる変動の時代に、多感な幼少時を過ごした。

命は、誠にあつさりと突如として失われる。天災、飢饉、病魔疾病、人心の乱れによる災い、戦。

天下は乱れ、人民は斬殺された。

全ては怒濤のようだ。そして己は濁流にくるくると回る一枚の木の葉であり、川の流れに抗うこともできるはずがない。いや、己の命など、生成消滅流転する宇宙においては比して砂粒ほどの価値もない。幼い玄奘は、己もまたその生滅の法からは例外なく逃れ得ぬことを知り、一つの解法としてやがては仏門に入った。だがその仏門すらも、諸説千々に乱れて誰一人明晰に読みほどけぬ現状に解法たり得ぬを悟つて、天竺に原点を求める決意を決したのである。

苦難の道であろう。皇帝に逆らうことになる。

だがどこにいても、何をしていても、人はいつ死ぬかは分からない。いつでも人は死ぬ。

何かを成そうとすれば、命はあまりに短い。そのぎりぎりまで己が望む様に生きて、生きた証を残せば。

その命は果たして短いと言えようか。

比して矮小の命は、思ひは、後の世につながっていくのではない

か。

玄奘という一個人ではない。仏教という有形無形の集合体の中で、その構成の一つでありながら、個が群体く全てゝに影響を及ぼす。

それが可能であれば、体は朽ちても私は死なぬ。

そして、私は、ただ、知りたい・・・・・

いかな供養にも溺れず、命をかけて仏門に尽くす無私の高僧。

しかし、その野心、まさに広大

胡人は、玄奘の穏和な容貌とは裏腹に獰猛ともいえる熱量のうねりを本能で感じたものか、気圧されたようにやや後ずさった。

「師よ、あなたのお気持ちは立派です。しかしどうか聞き届けてください。ここから先は監視兵だけではない」

彼ら以外いないにも関わらず、辺りの『誰か』の耳目を恐れるよ

うに声を潜め、胡人は大柄な身体を縮めた。

「五烽と伊吾國の間に広がる莫賀延磧には、妖魔惡鬼の類が出ると
いいます。どうか思いとどまつてください」

ふと、玄奘は目を瞬かせた。

「妖魔惡鬼ですか」

「ええ、そうです。きっと食われるか、殺されてしまいます」

勢い込んでぶるりと体を震わせる胡人に、玄奘はいかにも困惑氣味に言った。

「それは……迷信でしよう。私は、隋が乱れて天下動乱の折に、人が大勢死ぬのを見ましたが、人を殺すのは人でしかありませんでしたよ。妖魔も惡鬼も見たことがないし、それを知人友人が見たとうわさしても、己が眼で見たという人は聞いた例がありません。それとも君は己の目で見たというのですか」

「いえ、しかし噂は本当なのです、ですから」

刀を放さない胡人を恐れるでもなく、玄奘はぴしゃりと続けた。

「羅刹は人の内に巢食うもの。君の師を殺そうとする悪心もまた君の内の羅刹の仕業。これが悪鬼でなくて何が惡鬼か」

怒声を上げたわけではない。

しかし、胡人は雷うたれたかのように、恥じ入つて刀を下ろした。月がしらしらと荒れ地を覆う中、玄奘は静かに、だがはつきりと呴いた。

「妖魔惡鬼など、いるはずもない」

そんなものは、存在しない、と。

曲者は（前書き）

仙界です。短いです。

曲者は

仙界。

西王母の管理する蟠桃園の一角。
ばんとうえん

「なんといつこと、なんといつこと」

桃のような頬を苛立ちに赤く上気させ、桜花のような唇からは呪詛と聞き違えてもおかしくない呴きが零れ落ちる。

「おのれ、仏め。くそつ くそつ 奴らめ、どういりつもりだつ」

激しい口調で、手元の扇を叩き折らんばかりに折り曲げる。

「太真王夫人。あまり呪詛を撒き散らされませぬよつ」

おろおろと少女付きの女仙の一人がたしなめる。

「お黙り！」

少女 太真王夫人の口から鋭い勘気が飛び出した。

天真爛漫で美しい、西王母の末娘。

その見る影もない。

「ああ、分からぬ！ くそつ ナタク殿に色仕掛けで何があつたか
聞きましたが、あの阿呆めつ ちつとも要点を得ぬわ！ これだから、仏に抑えられた戦鬪神などという役立たずは！！」

「あのう、どこでどなたが聞いておりますか分かりませぬやえ、もうすこうし、お声を小さく

「黙れと、うておる！…」

「はつ、はひいいいいつ」

今度こそ扇がしなり、卓を叩いて、真つ二つにする。
進言した女仙は涙目になつて腰を抜かした。

「結界なぞ、とうに張つておるわ！ そもそも本拠地で仏どもに盗み聞きを許すようでは、もはや仙界も終了のお知らせだ！ 馬鹿者！！ ふん、とうに終わつておるのかもしれぬがな！ ああ、口惜しい、きやつらめ、今度こそ何を企んでおる！…」

どすん、と小柄な割りに大きな音と立てて椅子に腰を下ろすと、苛苛扇を弄繰り回した。

「高蘭。あの娘に何があるというのじゃ。私のお気に入りだつたのだぞ！　くぬつ、くぬつ、これからいつつこうと、いや、仲良くなろうとしておつたのに！　あのぎらぎらとして……うふふふふ、私を嫌うあの暗いどろどろした憎悪の眼差し……隠し通してあるつもりで駄々漏れよ。優しく優しくして、徐々に懐柔しようと思つておつた。いつ本性を明かして、脅えるさまを愈しもうと……なんじゃ、その目は」

「……軽蔑の目でござります、大真王夫人」

もう一人の夫人付きの背の高い女仙が汚物を見る目つきで夫人に答える。

「そのような性癖は控えてくださいませ。せめて胸の内にしまつていただきとうございます。耳が穢れますので」

この女仙、元九天弦女付で、ある意味太真王夫人へのお目付け役として遣わされたため、言つことには容赦がない。

「つち」

太真王夫人はあからさまに舌打ちすると、ぷいと横を向いた。

「小うるさい奴。私は弱い者苛めが大好きなのじゃ！　特に、ぶるぶる脅える奴を更にいたぶるのが大好きじゃ！！　でも愛を持つてやる！！　故に、相手も嫌悪しながらも徐々に私を受け入れていく！！　その過程、たまらぬ！！」

もう駄目だ、この主は……そのような何とも言えぬ雰囲気が室内に蔓延した。

太真王夫人が、彼女いわくお気にいりの高蘭相手に、猫を何十四も被つて清らかな少女の言動を繰り返すたび、女仙達は内心七転八倒していたのである。不気味、気持ち悪い、かゆい、などと実に散々であつた。

「まあ、それはそれとしてじや」

「ぱん！」と扇を勢いよく開くと、そのまま口元を覆う。重たげな

簪がちりちりと揺れた。

「觀世音菩薩。奴は策士よ。しかも悪辣な名手。如來の懷刀ゆえ、今回のことときやつの差し金であろう。大掛かりに動いておる」

じつと空中を睨み、

「いざれか、平天大聖が蘇つたともきく。仏門千里の駒も名高い人間の三藏法師計画。両界山に封じられし斎天大聖の解放。かつての天界の罪人どもも全て仏弟子に取り込んだというが。きな臭いとか言えぬ」

そこになぜ己のお氣に入りが絡むのか。どういうつもりだ。なんの思惑もないとはどうていえぬ。

再び舌打ち。

「くそったれめ。仙界には裏切り者があるからのう。誰とは言わぬが、あの使えぬ戦闘神の父兄どもじや。特にあの兄！－ あやつは許せぬ！－ 仏の手先になんぞなりおつて、我が物顔に内政干渉しあるわ！」

女仙達も「ああ、どこに耳目が」「言葉づかいが」と周囲をきょろきょろ見回すが、内容自体には反論せず、黙つて聞くばかりだ。不意に、太王真夫人は、眉目を解いて、柔らかな絹の靴先に視線を落とした。

「こんなことは言いつたないが……土着神に期待するしかないのかのう」

『あれ』も、祖形はかの水神。原初に連なる者。その性も曲者ゆえ。

そう呴き、彼女は、はっと田を見開く。

菩薩は碁の名手。その布石も意味が……？ ならば、その布陣の意味。その中心が意味するものは？ まして、菩薩のその性は……やはり。ならば。

いや、まさか。

考えすぎだ。いくらなんでも、『できすぎている』。

「夫人？」

怪訝そうに聞かれ、太真王夫人は頭をふり、「なんでもない」と再度舌打ちした。

ふええええづくしょい！」

激しくしゃみに、行李と九齒の馬鍬をかついだハ戒が反応した。

「兄貴い、風邪ですかい？ あれ、馬鹿は風邪ひかねえつてきいた

んですがねえ」

「あーうん、黒鹿は風邪ひかねえな、まわに」

と悲鳴が尾を引くが、浮き上がつてくるたびに、鉄棒を食らわせて沈める笑顔の兄弟子に、思嵐は正直引きつる思いで言葉が出ない。

「ほーれほれ、馬鹿は風邪を引かない。己の言動の意味もわからな

「やめひてえええええ、でもやひとこひええええええええ」

「萎えた」

「ああつ、そんなん

何故残念そうなんだ、八戒。

思嵐は白馬の上から顔を背けた。同じく、顔色の悪い水妖……悟淨が我関せずと無言でぞくぞくと歩くのを見て、嘆息した。

両界山にて水簾洞が元主の孫悟空。

高老莊にて元天蓬元帥の猪八戒。
流沙河にて元捲簾大將の沙悟淨。

恵岸行者に指示された三の従者は揃い、いよいよ大呪法の編纂に入つた。

しかし。と思嵐は三者を見遣る。

何故この三者なのか。觀世音菩薩のこと、何も意図がないとは思えぬが。

いや、この馬鹿騒ぎを見ているともしかして単に彼ら罪人への教化、救済措置なのではと思えなくもない。

それとも何か罪を犯したということ以外に、共通点でもあるのだろうか？

御仏の考えることは分からぬ。ただ人の身で、分からはずもないか。

ただ、ふと。

「ああ、白馬。お前を忘れていた。お前も元は竜だったね」小さく声をかけると、白馬は「なあに？」とばかり馬首をめぐらし、幼げな真っ黒の瞳を上目遣いに向ける。

思嵐の口元にかすかに微笑が昇り、そつと指先を伸ばして白馬の頭上を撫でる。

「おっしゃうさまあ

「おっしゃうさまあ」と鉄棒が思嵐の鼻先に突きつけられる。

「な、わっ！」

あやうく落馬しかけた思嵐は怒声を上げた。

「悟空！ 何をする、危ないではないか！」

怒鳴られた悟空は、反省の色もなく、酷笑ともれる馬鹿にした笑いを浮かべ、肩をすくめた。

「すんませんね。お師さまってば、運動神経皆無のくせに片手で手綱を握つて腰を浮かすなんて危険なことなさるんで、止めてくださいって口より先に手が」

「先に口を出せ！」

怒り倍増で怒鳴りつける。

怒鳴りつけながらも、この大妖が意外とまじめに自分の護衛をしていることを不気味に思う。飛頭蠍を中心とする様々な悪鬼妖魔、夜行遊女、今回は怪しいが、少なくとも彼なりに護衛を果たそうと

している。

実は、この孫悟空のことが一番よく分からぬ。残る一人の偽弟子に比べ、彼は仏に恭順する意思は全くない。

以前互いの目的はどうでもよいと啖呵を切つたことがあるが、実はそうでもない。彼は、いずれ道を違える。それが『いつ』なのか。知らねばならぬ。

如来に落とし前をつけさせた発言からも、いずれ彼が造反を目論んでいることは明白。悟空が何を考えて思嵐との取引を呑んだのか、いまだ分からぬ。そして、いつまで味方の『ふり』をしているのか。

時期を見定めて、注意深くその時を推し量らねば、寝首をかかれるのは自分だらう。

その時。

私はどうするのだろうか。

そう煩悶した思嵐は、己のその問い合わせよつとした。どうせひつもない。その時はそれまでだ。

他に選択肢などない。

思嵐はゆつくりと深呼吸し、前を見据えた。振り返らぬ。これ以上は。

さて、一行の行く手の先に、一振りの剣のじとき高山^{じとうざん}が隆^{りゅう}と天を突き刺している。

この山を、万寿山^{まんじゅさん}といい、その山中には五莊觀^{いそうかん}という觀^{かん}があつて、その主は仙人であつた。

道号を鎮元子^{ちんげんし}、その通称は与世道君^{よせじどうくん}と呼ぶ。

仙人の位にも位階がある。天仙、地仙、人仙こと屍解仙である。

思嵐などは、以前一番位階の低い人仙であったが、この鎮元子こそ与世道君は、地仙の祖であり、その長でもあつた。また与世道君とは、その寿命を天地と同じくするという意味であり、思嵐とは比

ぶべくもない大仙であつた。

鎮元大仙は、ふとその白く長い立派な髭を扱いて、

「ほつ」

と下界を見下ろした。

「これは懐かしい者がおいでなすつたのう」

齡千を超える童子の一人が、不思議そうに師をみやつた。

「師父、いかがされましたか？」

「ふお、ふお。前生にわしの知人であつたはずの者が、天地のそつ者とともにやつてきおつたのよ」

いや待て、縁の者というべきかのう、なんとも複雑じゃわい、と

髭を更にしごく鎮元大仙に、童子は首をひねるばかりだ。

「ふうむ、旧交を温めたいところじやが、なんと間の悪い。元始天尊様から上清天の弥羅宮に招かれておるに、四十八の真人も連れて

行くつもりじや。留守はお前達二人だけになる」

童子たち、清風と明月はお互に顔を見合させた。元始天尊は道教の最高神。まず師は聽講に行かれるであろうが、師に縁の者を二人で出向かえらぬのであろうか。

「さて、お前達。荷が重いという顔をしておくれるでないわい。そうじやな、九千年に一度実を結ぶ『人参果』が、ちょうど今の時期熟しておる。この粗果をかの三藏法師に差し上げて、接待するがよい」

「」の人参果は、五莊觀の宝果である。

三千年に一度花開き、三千年に一度実を結び、さらに三千年めにようやく熟す。九千年もかけて、ただの三十果しかならない貴重なくだものだった。

「「はい、師父」」

童子一人は畏まつて留守番を申しつかつた。内心、貴重な人参果を差し上げるなんて、もつたいたい、と思いながら。

彼らの脳裏に浮かぶ人参果。

ひと嗅ぎするだけで三百六十年も生き、まして口にすれば四万七

千年も寿命を延べると云々の意味ではあるが……

やがて思嵐達一行は、険しい万寿山に分け入り、その山中に高楼の連なり重なる影を見つけて立ち止まつた。

あれは

「倒され思慮」、「あーもういや」と語空が耳をはじながら面倒くねばに教える。

「大門の影に大書してありますよ」碑には、このようになつた。

『万寿山福地、五莊觀洞天』、と。

思風の脳裏にかつての幻影が過ぎる。

あの日、必死に険しい山を走り抜け、そして同じく觀（道教の寺）を見つけ、その閉ざされた大門を必死に叩いた。血で汚れ、頭髪を振り乱し、泣きながら必死に何度も叩きつけるよじて門を叩き、こう叫んだ。

悲鳴が、絶叫が、聞こえるはずのないそれが、重なり連なる高楼の影を走り抜ける。あるいは醜い痣の少女が、転げるようにしてその山中を走る姿が。置き去りにされた妹。そして、私は、

ぎいいいいいいいいいいいい。

大門が内側から開かれていく。思風は、はっとし、門の内側を凝視した。

光が溢れ、内側から小柄な人影が二つ。

小童二人が、拱手し、

「お待ち申し上げておりました。三蔵法師ご一行様」

あたかも思嵐たちが来ることは分かつていたとばかり、出迎えた。全ては幻聴だ。思嵐は力が抜けると同時に、法衣の下がびっしょり冷や汗でぬれているのに気づき、ゆっくりと呼吸した。胸が激しく上下している。

私は。

まだ。

一の門、一の門を過ぎ、一行はやがて立派な正殿へと案内された。思風は香をつまんで正面の『天地』の掛け布に三拜礼をして後、童子らを振り返り、

「洞主殿はいざこにか、」と挨拶申し上げたいが、「

尋ねると、彼らは「いいえ、それには及びません」と応じる。

「我が師は元始天尊様のお招きで、高弟とともに上清天の弥羅宮に出かけており、ただいま不在でござります」

「ただ、出がけに我が師より、前生で縁がありました三藏法師様がおいで際は、ていちようにおもてなしするよう仰せつかつております」

「我らではいたらぬかもしれませぬが、せいいっぱいお世話をせていただきますので、皆様方本田はお泊りの上、どうぞおまづとおくつろぎくださいませ」

交互にこう童子たちに、思風は面食らつた。洞主が不在では仕方がない。しかし、その洞主、思風たちが来る」とをすでに予見していたようだ。

更には、前生にての縁とこうが

思風は言葉にならずに口へもつたが、

「洞主殿が不在ではござ挨拶も叶いませんが、お心遣い、嬉しく思います。ありがとうございます」

そう返したところ、これら性のない弟子たちが背後で苛苛しごれを切らしているのを感じた。

まずい。これはさつさと餌を与えねど。

「八戒、悟浄、荷を解いて宿泊の準備をしてほし。お弟子殿、申

し訳ないが馬屋をお借りしたいが

「ああ、もちろんで、」
「ざいます」

快諾する童子に、思嵐は礼を言ひて、「悟空」と指名した。

「はいはい、俺が天界の弼馬温ひつまおん經驗者だから、馬の世話はお手のも
のだということですね」

「嫌味はよいから、さつさとしろ」

悟空は舌打ちして、嫌そつて正堂を出て行く。その後を八戒、悟
淨が一礼して追う。

「そこつな弟子が失礼した」

二人の童子は顔を見合せると、明言を避け、

「あの、三藏法師さま。実は師より、あなた様にもてなしとして粗
果をお持ちするよう命ぜられております。急ぎもいで参りますので、
しばしお待ちくださいませ」

思嵐が声をかける前に、彼らはばたばたと忙しなく堂を後にした。
一人残された思嵐は嘆息し、錫杖を手に、手近な椅子を借りるこ
ととする。

前世での縁か。

落とした視線を正面の掛け布につつし、天地の力強い大書を見つ
めた。

それは、私のことではあるまい。

本来の、三藏法師。玄奘のことである。

私は、ただの身代わりだ。

それ以上でも、それ以下でもない。

そのことを、彼の大仙は知らぬのであるつか。それとも、身代わ
りの呪は、妖怪のみならず、地仙の田にも自分を玄奘三藏として写
す強力なものであるのか。

思嵐には分からぬし、どうでもいい。

そう、委細などどうでもよい。目的さえ達すればそれでよい。気
にするのは障害となるものだけだ。それに注意を払うのだけで、思
嵐は精一杯なのだ。

身内ですら信用できず、気を張っているのだからな。

皮肉げに口元を歪め、掛け布から視線を外した折、ぱたぱたと軽い足音が聞こえて来た。

「お待たせいたしました！」

輝くような笑顔で、その捧げ持つた朱の盆には

咄嗟に。

咄嗟に、思嵐は強く、錫杖を握り締めた。

手の感覚がない。

血の気がどつと引き、耳鳴りがした。

つまく、音が聞き取れない。息が、できない。

『 は人参果 申します。 長寿の 』

何。

これは何。

朱塗りの盆に、裸の赤ん坊がのせられている。目があり、耳があり、口がある。

生まれたばかりの赤ん坊としか見えぬ。

『 人のように見えますが、これはくだもので 大変貴重な

』

童子らは何か言い募つてゐる。

これがくだもの？

人ではないか。

人の赤子ではないか？

どうしたのか分からぬ。気がつくと、童子らは退出していった。
がらんとした堂内。盆もない。

うまく対応できたのか分からぬが、思風はなんとか体裁を取り繕つて、人参果をさげてもらつたようだ。

「 はっ、」

つめていた息が吐き出された。血の塊を吐くような強烈な衝動が、
呼氣となつて漏れる。喉が、焼ける。焼け付くように熱い。目をぎ
りぎり限界まで見開き、乾いても閉じることができない。

あれは赤ん坊だった。

赤ん坊だったのだ。

あの日、だつて、私が。

私が殺した。
小翠。

妹を差し出せば助かるのかとも思った。

お前は、あの日泣いていた。

お前の口を塞いで。

恐ろしくて。

あの女怪どもが恐ろしくて。

助かりたくて。

泣き喚くお前が憎かつた。泣けば助かるの？

ただ死ぬだけだ！

だから、口を塞いだ。

変な声がした。気づいていた。知っていた。そうではないの？

『ねえ、あんたさあ。自分の手元見て』」覧よ』

台詞を脳内で再現し、ゆづくりと、思風は己の手元に視線を下ろす。

『あははッ あんた 一体どこを押さえてるのやああっ』

どいを。私は。あの日。あの日。

ぶるぶると痙攣する指の隙間を見つめ、

密やかな息がその唇から漏れた。かたかたと音がする。指だけで

がら、己の身を抱きしめる。

「……」桂川一派は、このままでは、おまえの命を取られてしまう。

何なのがこれかは

前生！？

私はどれほど悪行を成した。それが、その業が、現世の報いか

! ?

たすけて。

己を抱きすくめ、身体を折り曲げたまま、思風は心中に絶叫する。

たすけて

誰にも言えない。」
「え？」
「一体誰に言えばいい。わが、誰

もない。私を、何の見返りもなく大切に思ってくれる人は。もうどこにもいない。全部、私が。私のせいだ、皆。死んでしまった。

たすけて。お願い。もう、壊れてしまつ。

ぼとぼと涙が冷たい床石に滑り落ちる。

ずっとこらえていた。泣くまいと、必死に歯を食いしばつてきた。仮初の強さでも、続けば力となると信じて、耐えてきた。泣く資格などもう私にはそんな立ち止まる資格もないと思つていた。

弱みを見せるまいと、そう思つていた。

でも、限界だ。助けて、本当に壊れてしまつ。

息ができない。

苦しい。

お願い、お願いだから。

嘘だ。

こんなことでは壊れない。

人は、私は、生きて行く。

悲しみも、罪悪感も、全て、このどいつじよつもない『生』への執着の前には、幻のようなもの。

痛みは去る。悲しみも薄れる。まして罪悪感など。

でも、『今』、私は苦しい。

『今』、耐えられない。

きっと今だけだ。だから、今が過ぎればまた、誰を犠牲にしてでも生きようとする私に戻れる。

でも、『今』はいつ過去になるの。この苦しい『今』はいつ風化するの。

いつたい、いつ。

どれほど時間が経つたのか。

再び、正堂に誰か近づいてくる乱暴な足音が聞こえてくる。

「……おっしゃる、白馬の奴、馬屋つなごじきましたぜー…

…」

足音の主　悟空の言葉は、不自然に途切れた。

「……」

鳥をのむけはこの後、ぞつとあるような、威圧感が堂内に満ちる。

「おー、あんた」

何してる。

妖気が圧力となって塗り込められたような苛立ちをこじませ、伸ばされた手を、咄嗟に、思嵐は弾いた。

無言となる大妖に、身を竦ませながら、それでも思嵐はざいりつへ田で吐き捨てた。

「私に触れるな」

おぞましいと、触れられた箇所を震える手で押さえる。

汚らわしい、妖怪が。

そう、もう一度吐き捨てた。

触れるな

触れるな、と振り払った手が空中に彷徨う様を、どこか第三者の
ような思いで見つめ、

ふと。

自分は何をしている、と思嵐は脳天から冷水を浴びせられたかに
怖氣を走らせた。

暗い堂内に、二人きりだ。そつ、この忌むべき妖怪と、二人きり
なのだ!!

柔らかな生木を裂くのも似た、己の弱さを、この大妖の前に晒
してよかつたのか。

いや、よいわけがない。

味方ではない。

味方では、決してないのだと、肝に銘じた筈なのに、この惨憺た
る結果はなんだ。

愚かに過ぎる。

何かの選択肢を間違えてしまつたのではないか、といつ思いで頭
がいっぱいになる。

致命的な失敗をしたのではないかと思い至り、さつと責ぞめた思
嵐の胸中とは別に、悟空は払われた手をしげしげと見つめ、ふと上
げたその視線に、

恐ろしい勢いで、血の氣が引く音を、思嵐は確かに聞いた。

己を哀れみ、辛い哀しいと落ちていく自己憐憫の苦しさとはまつ
たく違う。

生存本能に根ざした、生粹の恐怖、それが思嵐を一気に正氣づか
せる。

所詮は、後悔し、自身を哀れむ行為など、命の危機に面していな

い時の戯れに過ぎぬ。そのことを、思嵐はよくよく知っていた。

そう、大いなる恐怖の前にば、何もかもかすんで消え、ただ縮こまつて災禍をやり過ごすとする卑劣で惨めな己しか残らぬ。

それが本当の私。

見よ、『私』が炎を映す睛に映つてゐるではないか。彼の目を見て、思嵐の身体は文字通り凍りつく。

悟空の目は火眼金睛かげんきんせい、即ち火のひとみ、金の目である。

その目が、怖ろしく壯いで、一切の感情をうかがわせぬさまは、むしろ全身の毛が逆立つほどの危機感を覚えさせる。

圧倒的弱者である思嵐には、いつそ進退窮きんたいきゆうまたと思わせるに等しい暴力性の發揮される前の一瞬の静けさに感じられたのである。野生の獸を前にした時、一番してはならぬ行為を知つてゐるだろうか。

それは、『脅え』を悟られることがある。

脅えて、一步あとずさつた瞬間に、均衡は破れ、獸は襲い掛かつてくる。

だから、脅えてはならない。後ろに下がつてはならない。たとえ、『ふり』だとしても、せめて気持ちだけでも、対等にあるので、虚勢を張り続けなければならない。

そうわかっていたはずなのに、思嵐はとっさに、脅え、悟空から半身を離して、後ろに下がつてしまつた。

身体だけではなく、心が、脅え、折れ、下がつてしまつた。

賢しらな獸は、それを悟り、牙を剥いた。

おそらくは、嗤笑わらひた。

たちまち、思嵐を襲つたのは、血と悲鳴と恐慌の全ての幻影だつた。

何度も、他者がそうなるのを目にした。

だから、自分もそうなる姿を思い描くのは容易で、そして、それだけは、

「い、「

いやだ、と。

無様に椅子から転げ落ちて逃げようとする身体を、ほとんど感覚のうせた右手が、必死に握り締める九環の錫杖が支え、思嵐は最後の最後で体勢を立て直した。

そのはずだった。

しかし、中途半端な姿勢のまま緊張に耐えうることのできなかつた体は、頼みの杖を握る手のひらをえ汗で滑り、気づいた時には、「椅子」とひっくり返って床に半身をひねるようにして倒れ込んでいた。

「」

言葉にならない痛みが、椅子の脚ごと引っ掛けで倒れた足の付け根を襲う。ひねったのかもしれない。

こんな痛みにすら耐えられないで、どうしてもつと大きな暴力の前に耐えられる。

痛いのは嫌だ。

痛いのが怖い。

痛いことをされそうになるがとても怖い。

痛みに耐える思嵐の眼前に、黒い影が落ちた。

ぎょっとするのと同時に、悟空が無表情に己の顔を覗き込んでいるのに既視感を覚える。

「……気に食わねえなあ」

低音で呴かれたそれは、思嵐に聞かせるといつより、無意識に零れたかのように聞こえた。

「俺あ、これでも相當に我を抑えて、仮初なりとも礼節を尽くしているつもりなんですがねえ。ちっとも伝わりませんかね、俺の誠意つてやつあ」

これも思嵐に尋ねるといつより、自問自答の響きがあった。

思嵐は是と應えたものか、否と應えたものか、むしろ何も應えぬ

のが正解であるのか、嵐の前の静けさに身動きすら感じじてできずにいた。

悟空は触れない。

思嵐に触れずに、顔のすぐ真横を、人差し指の長さ爪でこつこつと叩く。

「……苛々しますねえ。苛々するのに、苛々する」

怖い。怖い。怖い！

段々と床を叩く音が速くなつていぐ。

思嵐の心臓もまた、同調するかのように乱れがちに脈をはじめていく。

「元凶、

と、床を叩く音が止まつた。

「潰したら、すつきりするんですかね」

じつと見下ろす目には、何の感情も、光も浮かんでいなくて、思

嵐の喉が痙攣した。

目を逸らせない。

一瞬か、永劫か。

その赤い瞳を覗き込み、また同時に思嵐も覗き込まれ、無音の中に互いが互いを拮抗した時。

極度に緊張状態、負荷状態におかれためか、思嵐はふつとその暗く深い色合いの中に吸い込まれるかのような変性意識状態に陥つた。

宗教における忘我、入神状態、恍惚、法悦状態ともいえる、魂が抜け出して深淵なるものを覗く脱魂型のそれになつたのである。

巫女が水鏡や映りの悪い銅鏡などを用いて、神靈や異界と交信することがあるが、二人は知らずして、同時に互いの目を鏡とし、『何か』に触れようとしていた。

「お、と音がする。

「おおおと、何かの音が聞こえる。

水音だ。

これは、水の音。

身体がうまく動かない。『私』の身体は、つまく動かない。だが、行かねばならぬ。

『杖』をつき、『私』は歩く。

うねり歩き、やがて大河に辿り着き、白い、

「」

気がつくと、思風は暗い堂内に、全力疾走したあとのような荒い呼吸で床に倒れ込んでいた。

呼吸が整わない。

全身にびっしょりと汗をかいている。気持ちが悪い。

いまのは、なんだ。

流沙河で見た幻影もまた恐るべき生々しさを伴っていたが、これは、違う。

もつと、圧倒的で、もつと、莊厳で、もつと、言葉にならない。

舌がもつれる。

うまく回らぬ舌で、必死に吐き出したのが、

「う、うぐう」

大妖の名で、続くべき「今のはいつたいなんだ」という疑問は、乱れる息に言葉にすらならなかつた。

血の氣の多い口より先に手足の出る妖怪のくせに、氣難しい顔をした弟子は、少し青ざめた面持ちで、再び思風を見下ろしていたが、先ほどのような恐ろしい緊張感は消えていた。

互いに触れない。触れないのに、何か、確かに今、つながつた。

悟空は、ただ何かを考えるよつた、探るよつた日で、

二
今

と何か続けようとしたのを、大音声が遮った。

夕田を背に、堂の戸口に、ハ戒が大きな鍋をころんがらんころんがらんじろいじろいじろがらららららららららら……と最後なにやらわびしげな風情で床に転がし、口をあんぐりあけたまま突つ立つている。

「あ、う、俺、お邪魔でしたかね？」

十指を芋虫のように意味もなく動かしながら、一步二歩下がった。

表三
女烹材

表情を消した悟空が小さく咳したのを、思風ははいあらと耳にしてしまった。

ハ戒は、非常に変幻自在に弧を描く宝具により、正堂正面、縫い付けられ、おぶつ、と嫌なうめき声とともに、何故か「もつと、もつと」と更に嫌な台詞を吐き出していた。

その間に、思風は半身を起し、軽けた拍子に乱れた袂を合わせながら、不意に思い立つて、苦虫をつぶしたように磔の八戒をみやる悟空を見上げた。

何が? -

悟空にしては珍しくぶつきらぼうな応答に、思風は、いや、と首を振りかけて、やはり喉元に小骨のつつかえたような違和感を覚える。

触れない。

窓の手檻の先に今度は視線を落とし、今まで遠慮はなかつた、
と強へ。

だから、他意なく、ぽろりと零れ落ちた。

「悟空、お前、まさか。さうき私が、」

新たな闖入者のためであつた。

新たに闖入者のためであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3764s/>

夜行遊女

2011年8月30日00時21分発行